

# 崎山遺跡群 VI

—平成3年度発掘調査概報—



1992.3

岩手県宮古市教育委員会



# 崎山遺跡群 VI

—平成3年度発掘調査概報—



崎山貝塚垂直写真

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education

Miyako, Iwate, Japan

カラー1 崎山貝塚第6次調査検出遺構

カラー2 崎山貝塚第7次調査検出遺構





(カラー1)



(カラー2)

カラー3 崎山貝塚第6次調査出土縄文土器 (pot.2)

カラー4 崎山貝塚第6次調査出土陶磁器  
(左、肥前染付碗18世紀代、瀬戸美濃灰釉丸皿16世紀代)



(カラー3)



(カラー4)





## 序 文

宮古市では、国庫補助、県費補助を受けて、昭和61年度から平成2年度までの5ヶ年間で第Ⅰ期崎山遺跡群発掘調査事業を実施いたしました。

この5ヶ年間で崎山貝塚の特徴的な集落構造や豊富な動物遺体を含む貝塚の内容について、ほぼアウトラインをつかむことができてまいりました。

このたび、この第Ⅰ期発掘調査事業を受けて、平成3年度から平成5年度までの3ヶ年を第Ⅱ期とし、発掘調査を継続させることといたしました。第Ⅱ期発掘調査事業は、崎山貝塚の範囲を確定させることを目的として計画いたしました。特に、今まであまり手がつかなかった北、南、東側の各斜面と低湿地での遺構や遺物の有無を確認いたしたいと考えております。

さて、本書は、第Ⅱ期発掘調査事業の初年度である平成3年度の調査成果をとりまとめた概報であります。

発掘調査の結果、南斜面西端部に竪穴住居跡を検出したことにより、集落域がかなり広範囲に広がっていることが確認されました。

また、台地頂部では中央広場の形状や範囲と、これをとりまく環状の掘込みの範囲をほぼ確定することができました。

今後とも調査を進め保護につなげてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり様々な御指導をいただきました岩手県教育委員会文化課、岩手県埋蔵文化財センター、名古屋大学渡辺誠教授を始めとする関係機関や関係者の皆様、御理解、御協力下さった地権者各位、実際に作業に携わった市民の皆様方に厚く御礼申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸



# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査計画	1
(1) 第Ⅰ期5ヶ年計画	1
(2) 第Ⅱ期3ヶ年計画	1
2. 調査要旨	3
3. 調査体制	3
II 調査内容	5
1. これまでの調査	5
(1) 第Ⅰ期範囲確認調査による崎山貝塚の概要	5
(2) 昭和59～60年度調査の概要（昭和60年度調査区）	6
2. 崎山貝塚第6次調査	15
(1) 基本層序	15
(2) 遺構の検出状況	15
(3) 検出された遺構・遺物	19
3. 崎山貝塚第7次調査	43
(1) 調査の方法と目的	43
(2) 台地中央部	43
(a) 基本層序	43
(b) 遺構の検出状況	43
(c) 検出された遺構・遺物	43
(3) 北斜面西端部	52
(a) 基本層序	52
(b) 検出された遺構・遺物	52
4. 扁平円礫について	54
III 調査のまとめ	56

# 図 版 目 次

- 第1図版 第6次調査区全景  
第2図版 第6次調査区調査前の状況・同調査風景  
第3図版 土層堆積状況  
第4図版 第11号・第12号竪穴住居跡  
第5図版 第12号竪穴住居跡  
第6図版 第12号竪穴住居跡堆積状況  
第7図版 第12号竪穴住居跡埋土礫出土状況・同床面付近扁平円礫出土状況  
第8図版 第12号竪穴住居跡複式炉検出状況・同遺物出土状況  
第9図版 第12号竪穴住居跡複式炉・同石組部  
第10図版 第11号竪穴住居跡・同埋土堆積状況  
第11図版 第11号竪穴住居跡遺物出土状況・同柱穴堆積状況  
第12図版 第11号竪穴住居跡炉検出状況・同炉堆積状況  
第13図版 第13号竪穴住居跡(?)・第7次調査北斜面西端部Eトレンチ作業風景  
第14図版 第7次調査区・E6NSトレンチ  
第15図版 W6NSトレンチ・E15NSトレンチ  
第16図版 E6NSトレンチ(検出時)・同(遺構精査時)  
第17図版 S6E6-1号土壇跡・S9E6-1号土壇跡  
第18図版 S9E6-2号土壇跡・S9W6-1号土壇跡  
第19図版 立石・現地説明会実施状況  
第20図版 第12号竪穴住居跡出土遺物・第11号竪穴住居跡出土遺物  
第21図版 第6次調査遺構外出土遺物

## 〈カラー口絵〉

- カラー1 崎山貝塚第6次調査検出遺構  
カラー2 崎山貝塚第7次調査検出遺構  
カラー3 崎山貝塚第6次調査出土縄文土器  
カラー4 崎山貝塚第6次調査出土陶磁器

## 〈内表紙写真〉

崎山貝塚垂直写真

## 〈本文中写真図版－昭和60年度調査報告書掲載写真より〉

- Photo 1 遺跡近影・国道45号線より  
Photo 2 遺跡全影  
Photo 3 遺跡北端部土層堆積状況  
Photo 4 遺跡南北バルト土層堆積状況



- Photo 5 検出遺構-1  
 Photo 6 検出遺構-2  
 Photo 7 出土遺物(土器)  
 Photo 8 出土遺物(土器)  
 Photo 9 出土遺物(石器)  
 Photo 10 出土遺物(石器)

## 挿 図 目 次

第1図	位置図	2
第2図	崎山遺跡群と周辺の遺跡	4
第3図	崎山貝塚周辺地形図	7・8
第4図	崎山貝塚南西部調査区設定図	9
第5図	崎山貝塚第6次調査区遺構配置図	16
第6図	崎山貝塚第6次調査区土層断面図(1)	17
第7図	崎山貝塚第6次調査区土層断面図(2)	18
第8図	第11号竪穴住居跡	20
第9図	第11号竪穴住居跡・炉	21
第10図	第11号竪穴住居跡出土遺物	22
第11図	第12号竪穴住居跡(1)	24
第12図	第12号竪穴住居跡(2)	25
第13図	第12号竪穴住居跡・炉	26
第14図	第12号竪穴住居跡出土遺物(1)	28
第15図	第12号竪穴住居跡出土遺物(2)	29
第16図	第13号竪穴住居跡	30
第17図	第13号竪穴住居跡出土遺物・遺構外出土遺物(1)	32
第18図	遺構外出土遺物(2)	34
第19図	遺構外出土遺物(3)	35
第20図	遺構外出土遺物(4)	37
第21図	遺構外出土遺物(5)	38
第22図	遺構外出土遺物(6)	39
第23図	遺構外出土遺物(7)	40
第24図	崎山貝塚中央部遺構配置図	41・42
第25図	S3E6～S12E6グリッド平面図	44
第26図	S6W6～S9W6グリッド平面図	46
第27図	第7次調査区出土遺物(1)	47
第28図	第7次調査区出土遺物(2)	49
第29図	第7次調査区出土遺物(3)	50

第30図	第7次調査区出土遺物(4).....	51
第31図	北斜面西端部調査区設定図.....	53
第32図	崎山貝塚第6次調査区出土扁平円礫.....	54
第33図	崎山貝塚第7次調査区(台地中央部)出土扁平円礫.....	55
第34図	崎山貝塚集落構成模式図.....	57・58
第35図	崎山貝塚中心部遺構配置図.....	60

# I 調査経過

## 1 調査計画

### (1) 第Ⅰ期5ヶ年計画

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度より平成2年度までの5ヶ年間で第Ⅰ期として崎山遺跡群発掘調査事業を実施した。

この事業は遺跡群内における個人住宅建築に先だつ緊急発掘調査と崎山貝塚の保存を前提とした範囲確認調査の2点を目的として実施されたものである。このうち崎山貝塚での範囲確認調査は5次にわたり延1,483㎡を発掘した。しかし、この調査は遺構や貝層の分布状態の把握を第一義的な目的としたため、これらの精査は最小限の量に留めている。

この発掘調査により、崎山貝塚は非常に特徴的な形態を有する集落跡と、豊富な動物遺体を包含する貝塚を有し、しかもこれらが良好な状態で保存されていることが判明した。(集落構造については章を改めて詳述する)

範囲確認調査

### (2) 第Ⅱ期3ヶ年計画

第Ⅰ期の成果をもとに、岩手県教育委員会文化課と協議した結果、比較的短い期間で崎山貝塚の内容を把握する必要があるとの指摘を受けた。具体的には北、東、南の各斜面部のうちまだ調査を実施していない地点とこれを取りまく低湿地(水田面)、及び、台地の基部付近の各地点での発掘調査を実施し、崎山貝塚の範囲を確定させることであった。さらに、第Ⅰ期～第Ⅱ期の調査結果をもとに正式な本報告書を作成することとした。

これを受けて、第Ⅱ期は平成3年より平成5年の3ヶ年とし、次のとおり調査地点を設定してゆくこととした。

〈平成3年度〉

- 第6次調査——個人住宅建築に伴う緊急調査。南斜面西端部での遺構、遺物の分布状況、特に遺物包含層の状況を探る。
- 第7次調査——範囲確認調査。台地頂部で中央広場と環状の掘込み(註1)の範囲を確定させる。また、北斜面西端部での遺構・遺物の分布状況、特に遺物包含層の状況を探る。

〈平成4年度〉

- 第8次調査——範囲確認調査。北斜面で貝層の分布状況と内容物の状況を探る。また、台地先端部の東斜面で、集落の範囲(東端部)と遺物包含層の分布状況を探る。

〈平成5年度〉

- 第9次調査——範囲確認調査。低湿地及び台地基部付近を調査し、崎山貝塚の範囲を確定させる。また、本報告書を作成する。

(註1) 土坑域、地山の落込みを中央広場、環状の掘込みと呼称することにした。詳細については後述する。



第1図 位置図



## 2 調査要旨

平成3年度の発掘調査は、崎山貝塚第6次調査（個人住宅建築）および第7次調査（範囲確認調査）の2件である。総事業費は440万円である。

○崎山貝塚第6次調査 平成3年9月17日～12月7日 290㎡

遺跡の南西部に位置し、昭和59・60年度調査区（宅地造成に先だつ緊急調査）に隣接する。縄文時代中期中葉～末葉の竪穴住居跡を3棟検出したほか、縄文時代中期末葉の遺物包含層を検出している。

○崎山貝塚第7次調査 平成3年9月26日～12月7日 230㎡

台地中央部と北斜面（北貝塚）北西部を調査した。前者では中央広場の範囲を確定させた上、これを環状の掘込みが取り囲むことを再度確認した。また、後者では縄文時代中期を主体とする土器片などが出土したものの、包含層の発達状況が悪く、縁辺部の様相を呈している。

○現地説明会等（崎山貝塚範囲確認調査の周知・啓蒙事業）

〈北奥古代文化研究会〉平成3年10月26日～10月27日

宮古市で開催された北奥古代研究会第21回研究大会において崎山貝塚の概要を報告するとともに、調査中の各地点について見学会を実施した。参加人数50名。

〈現地説明会〉 平成3年11月29日

考古学研究者のほか、地域住民や地元小学校児童などを対象とし、今年度の調査成果を報告する。参加人数100名。

なお、これらの事業については、新聞等により報道された。

## 3 調査体制

本年度の発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括	大森 翼	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	山崎 吉章	〃 係長
	〃 坂下 昇	〃 主任兼社会教育主事補
調査員	高橋憲太郎	〃 主事（主担当）
	〃 鎌田 祐二	〃 〃
	〃 阿部 豊	〃 埋蔵文化財調査員（非常勤）

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。（敬称略）

〈地 権 者〉米沢由美、高田義勝、前川孫八、佐々木福司

〈発掘調査〉前川友宏、佐々木茂、北村忠治、菊地清八、神林信吉、大越貞蔵

佐伯裕則、山内専太郎、佐々木茂実、前川広治、小野寺清次郎、佐々木清

斎藤貞子、藤谷晶子、菅原テルミ、館崎礼子、今津東一、木村博

刈屋昭三、中嶋隆、吉田昭

〈整理作業〉前川友宏、山野目崇子、竹原昌江



第2図 崎山遺跡群と周辺の遺跡

## II 調査内容

### 1 これまでの調査

崎山貝塚は、宮古市のコードL G14-2079、岩手県のコードL G04-2180として登録された周知の遺跡である。

崎山貝塚における発掘調査は、大正13年に内務省考査員柴田常恵らにより実施されたものが著名である。この調査については、調査に随行した小田島禄郎により記述された新聞記事があるだけで、正式な報告はされていない。

柴田常恵

小田島禄郎

この後、一部で資料の蓄積や紹介（註1）はあったものの、学術的な発掘調査や論文の発表等はほとんど実施されていない。このため、崎山貝塚の名前のみは有名になったものの、遺跡自体の範囲や内容といった基本的事からは全く不明なままであった。

昭和40年代以降、宮古市周辺でも道路網整備等の公共事業や民間業者による宅地造成などの大規模な開発行為が散発的にはあるが実施されはじめる。

崎山貝塚でもこの時期に遺跡の基部付近で国道45号線の工事が実施されると、国道沿いに工場や住宅が建築されるが、これらの現状変更に対して十分な発掘調査が実施されたとは言い難い。

宮古市では昭和57年度から昭和60年度にかけて、市内に存在する遺跡の詳細分布調査を実施した。この調査は、各遺跡の所在地、立地、範囲、現況、時期、出土遺物等の基礎的データを収集したもので、いわば、埋蔵文化財保護のためのデータ・ベースともいうべきものである。

第Ⅰ期市内遺跡  
分布調査

分布調査の結果、内容、保存状態、学史的意義などから、崎山貝塚は市内に存在する遺跡のなかでも最も重要なもののひとつであることが再確認された。

しかし、この間、昭和59年度から昭和60年度にかけて、崎山貝塚南西部（国道45号線付近）にて宅地造成に先だつ緊急調査を実施している。

このように、崎山貝塚は重要な遺跡であるとされながらも、遺跡の範囲、遺構配置、貝層の分布範囲などの具体的内容が不明瞭なまま、国道45号線付近がすでに破壊され、今後もこの地点を中心に宅地化が進行する危険性が大きくなってきた。

このため、宮古市では急速崎山貝塚の範囲確認調査を策定し、昭和61年度から平成2年度までの5ヶ年を第Ⅰ期として事業を実施した。

また、引き続き平成3年度から平成5年度までの3ヶ年を第Ⅱ期範囲確認調査計画を策定し、現在事業実施中である。

#### (1) 第Ⅰ期範囲確認調査による崎山貝塚の概要

第Ⅰ期範囲確認調査では、南斜面と台地頂部を中心に調査地点を設定してきた。これまでの調査により判明した崎山貝塚の概要は次のとおりである。

〈集落跡—台地頂部〉

中央部に立石を伴う「中央広場」があり、多数の土壇跡が検出される。この外側には人為的な遺構である「環状の掘込み」がめぐり、更に外側の西側と東側には居住域である「西集落」

と「東集落」があり、竪穴住居跡などが検出される。これらの遺構群は縄文時代中期中葉～後葉（大木8a～9式）を中心に営まれたものであるが、一部縄文時代中期初頭（大木7a式）や古代（平安時代か）に伴う竪穴住居跡も検出されている。

〈南貝塚－南斜面〉

斜面中央部を中心に多量の遺物を包含する遺物包含層が検出され、この中に3地点以上の貝塚を確認している。貝層からは魚骨や獣骨を主体とする多数の動物遺体が出土したほか、骨角器類も比較的多く出土している。これらの堆積時期は縄文時代前期初頭～中期初頭（大木1式～大木7b式）にわたる。

〈北貝塚－北斜面〉

斜面中央部の1地点を調査したのみで詳細は不明であるが、縄文時代中期の遺物を多量に含む遺物包含層が広範囲に分布しているようである。また、このほぼ中心部に同時期の貝塚を確認している。

(2) 昭和59～60年度調査の概要（昭和60年度調査区）（第4図）

記述は前後してしまったが、前述したとおり遺跡の南西部において宅地造成に先だつ緊急調査を実施している。

この調査は、宅地造成により破壊される1,083.13㎡を対象とし、昭和59年11月・12月の試掘調査を経て、昭和60年4月5日～5月11日にわたり本調査が実施され、昭和62年3月に報告書が刊行されている。

当初、宮古市では貴重な崎山貝塚の一角であり、周辺の宅地化の引金となる危険性を考慮し、保護を前提として、原因者や岩手県教育委員会文化課と再三にわたり協議を重ねたが、特に原因者との調査がつかずに、結局文化課より紹介された上野猛調査員を担当者として本調査を実施することとした。

本来この調査（以下「昭和60年度調査」とする）は現在実施中の範囲確認調査と密接な関係を有するものであるが、報告書に記載された内容や挿図に正確さを欠く（例えば土坑跡の検出地点が不明な点など）ことなど問題点が多かったため、これまで触れずに済ませて来た。

しかし、今回昭和60年度調査区に隣接して第6次調査（個人住宅）を実施することとなったために、両調査区の整合性を図る必要性が生じた。従って、ここでは『崎山報文87』と原図等をもとに昭和60年度調査の概要をまとめてみる。

〈基本層序〉（Photo 3～4）

調査地点内の土層は第1層～第4層に大別される。

第1層 暗褐色土層。表土層でこの上層には部分的ではあるが盛土層が堆積する。

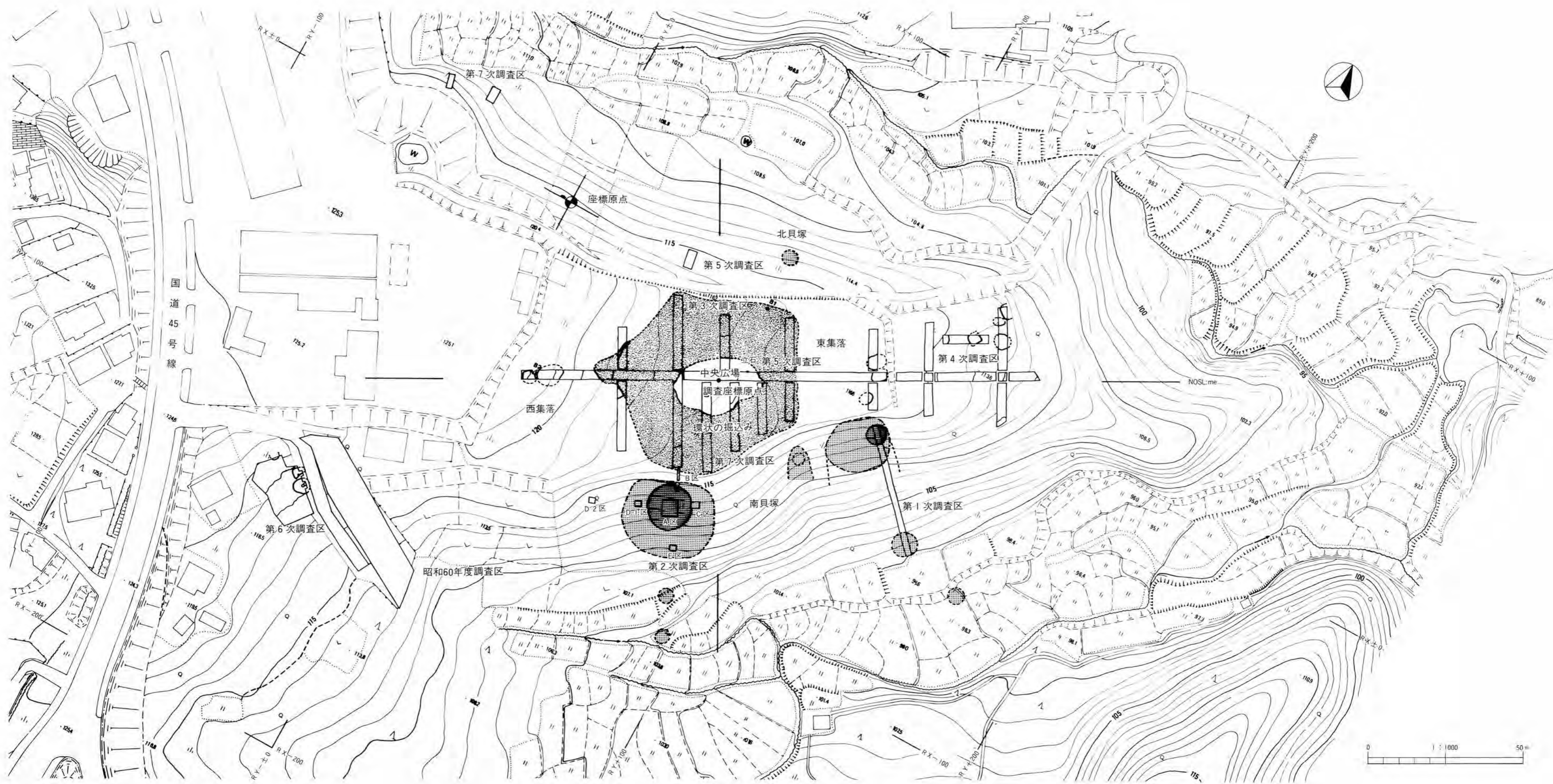
第2層 黒褐色土層。土層断面図では斜面下位には堆積しないことになっているが、深掘り部分には3層目に黒褐色土層が認められる。第2層に相当する層であろう。

第2'層 暗褐色土層。斜面上位にのみ部分的に認められる。

第3層 暗褐色～褐色土層。基盤層の上に直接のる。

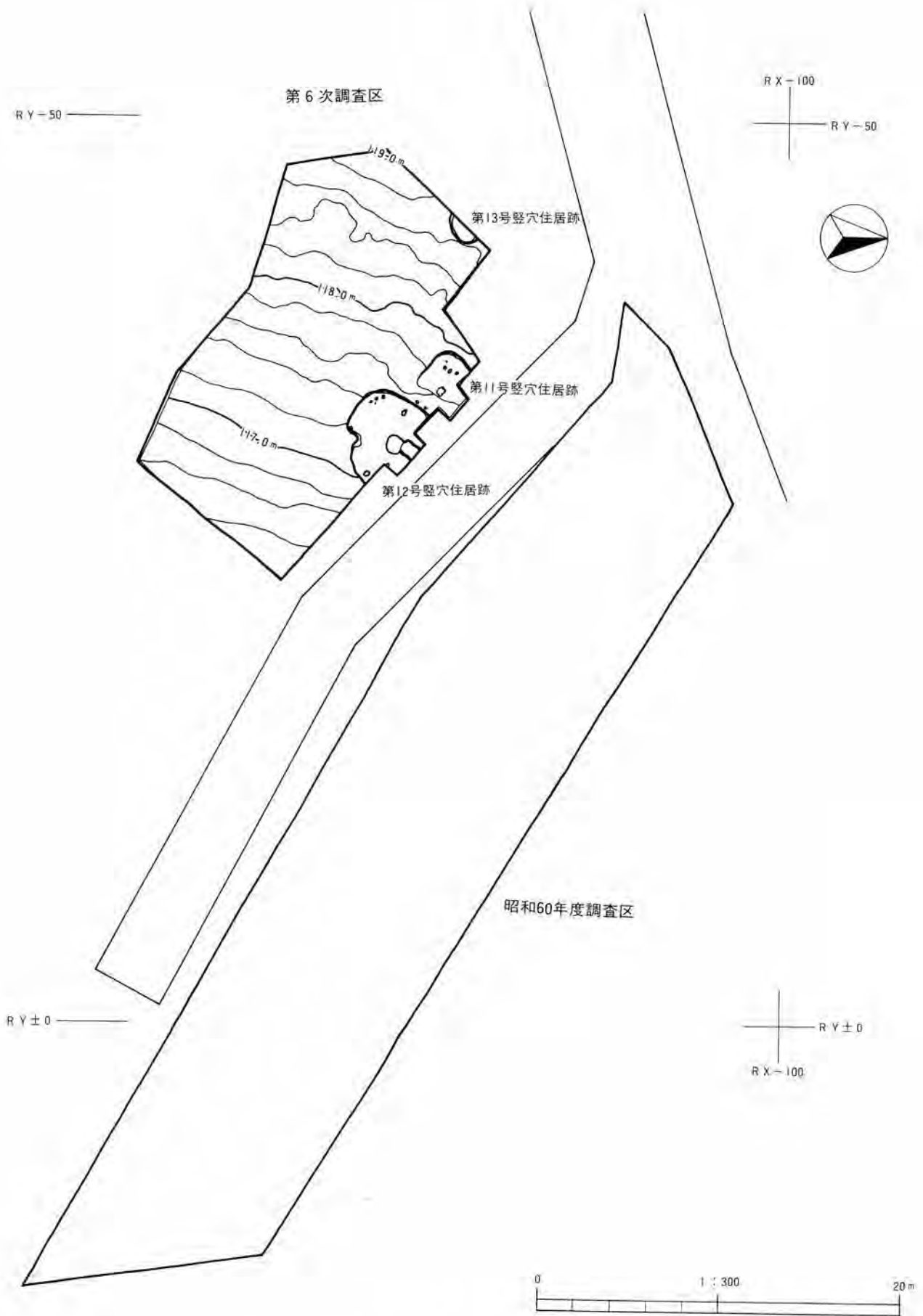
第4層 基盤層。暗褐色および褐色土の混在した土層。





第3図 崎山貝塚周辺地形図





第4図 崎山貝塚南斜面西端部付近調査区設定図



〈昭和60年度調査区〉



Photo 1 (遺跡近影 国道45号線より)



Photo 2 (遺跡全影)



Photo 3 (遺跡北端部土層堆積状況)



Photo 4 (遺跡南北ベルト土層堆積状況)



〈昭和60年度調査区〉



Photo 5 (検出遺構-1)



Photo 6 (検出遺構-2)

〈昭和60年度調査区〉

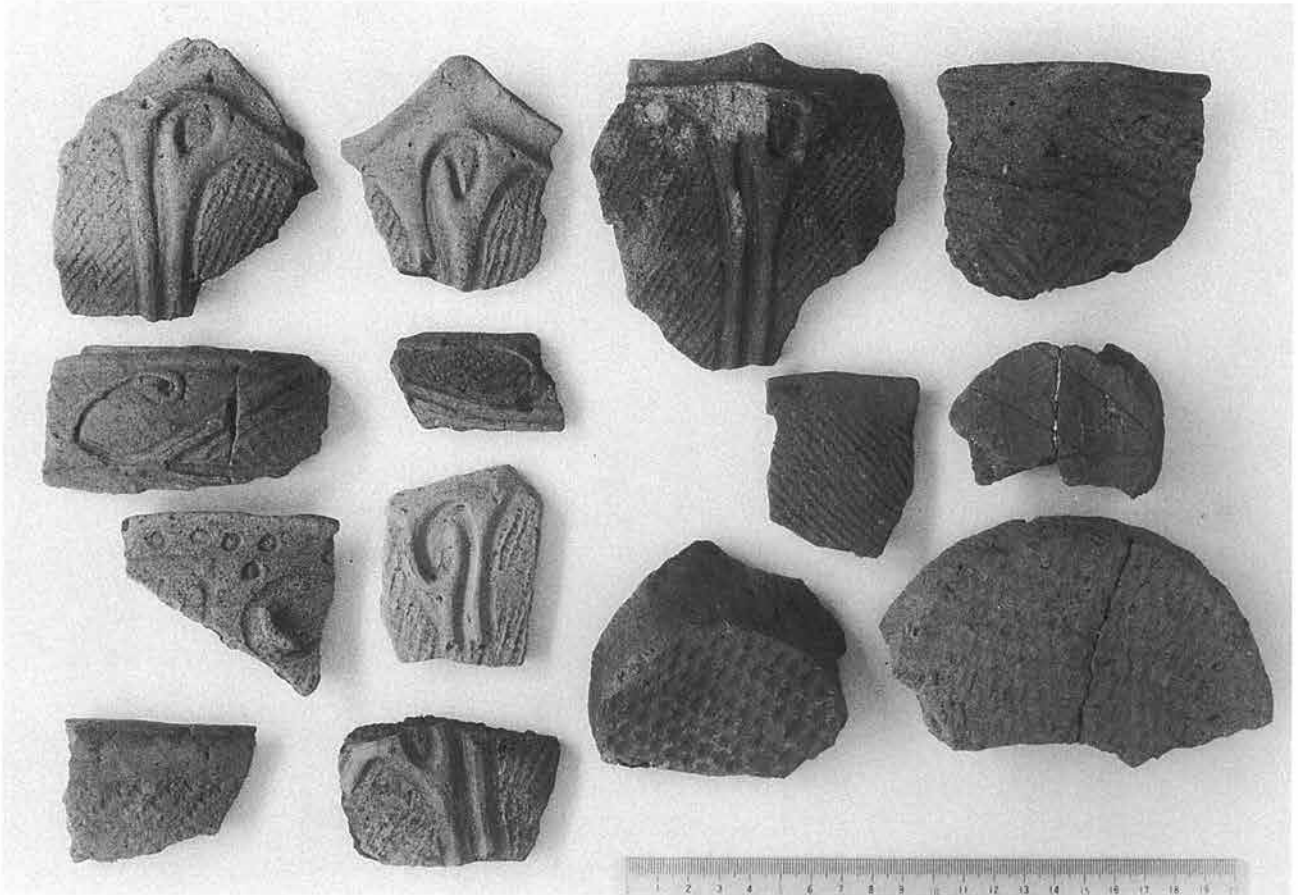


Photo 7 出土遺物 (土器)

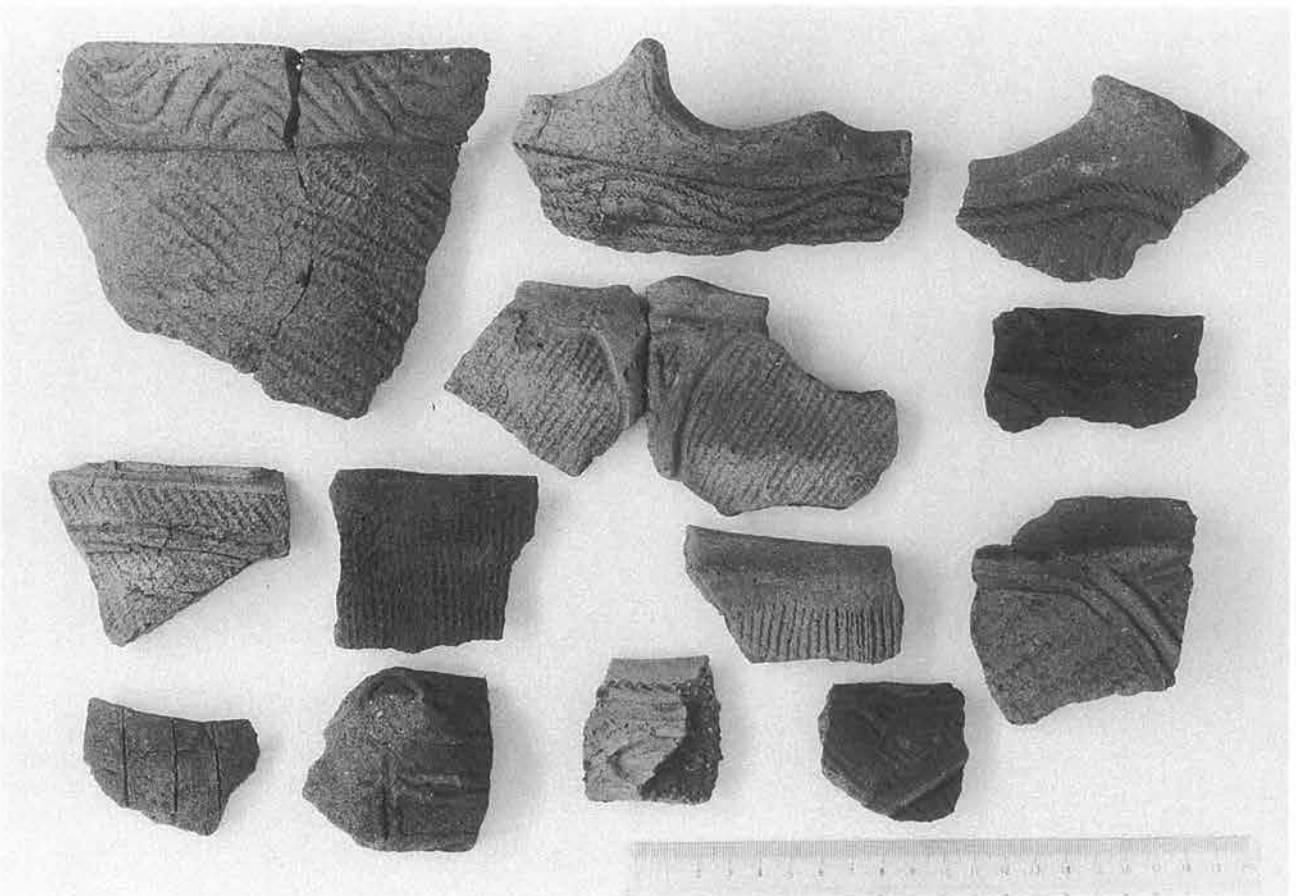


Photo 8 出土遺物 (土器)



Photo 9 出土遺物 (石器)



Photo 10 出土遺物 (石器)



〈検出遺構〉（Photo 5・6）

調査区のやや南寄りに径83～116cm、深さ15～20cmほどの不整形～長円形の土坑跡3基が検出されているが正確な検出位置は記録されていないので不明である。

いずれも第3層上面で検出し、土坑内の埋土は第2層の黒褐色土層が堆積し、伴出遺物は無いと報告されている。

〈出土遺物〉（Photo 7～10）

第1層から第3層の各層にわたり遺物が出土している。報文では縄文時代中期から後期にかけての土器片が出土したと報告しているが、これは明らかに誤りで、写真で見るとおり縄文時代前期初頭～中期後葉に伴うものである。

石器についてはPhoto 9、10に示したものの以外に敲石、磨石、扁平円礫なども多く出土したようである。

註1) 1961 岩手県『岩手県史』、1981 宮古市『宮古市史・漁業交易』など

## 2 崎山貝塚第6次調査

### (1) 基本層序（第6、7図）

住宅建築に伴い造成される区域のすべてを対象として調査区を設定した。調査区内で確認された土層は4層に大別される。

I層 やや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や黒褐色土塊を含む。やや固いがしまりは中程度である。表土層であり昭和60年度調査区の第1層に対応する。

II層 黒褐色土層で、基本土の色調や混入土の状況により2層に細分される。

II a層 やや暗い黒褐色粘質土を基本土とし、黒色土塊などを多く含む。固さは中程度でやしまりがない。遺物を最も多く含む。昭和60年度調査区の第2層（上部）に相当する。

II b層 II a層よりやや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくあまりしまりがない。遺物を多く含む。昭和60年度調査区の第2層（下部）に相当する。

III層 やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。固さ、しまりともに中程度である。漸移層であり、下層のIV層へ漸移的に移行する。遺物はほとんど含まない。昭和60年度調査区の第3層に対応する。

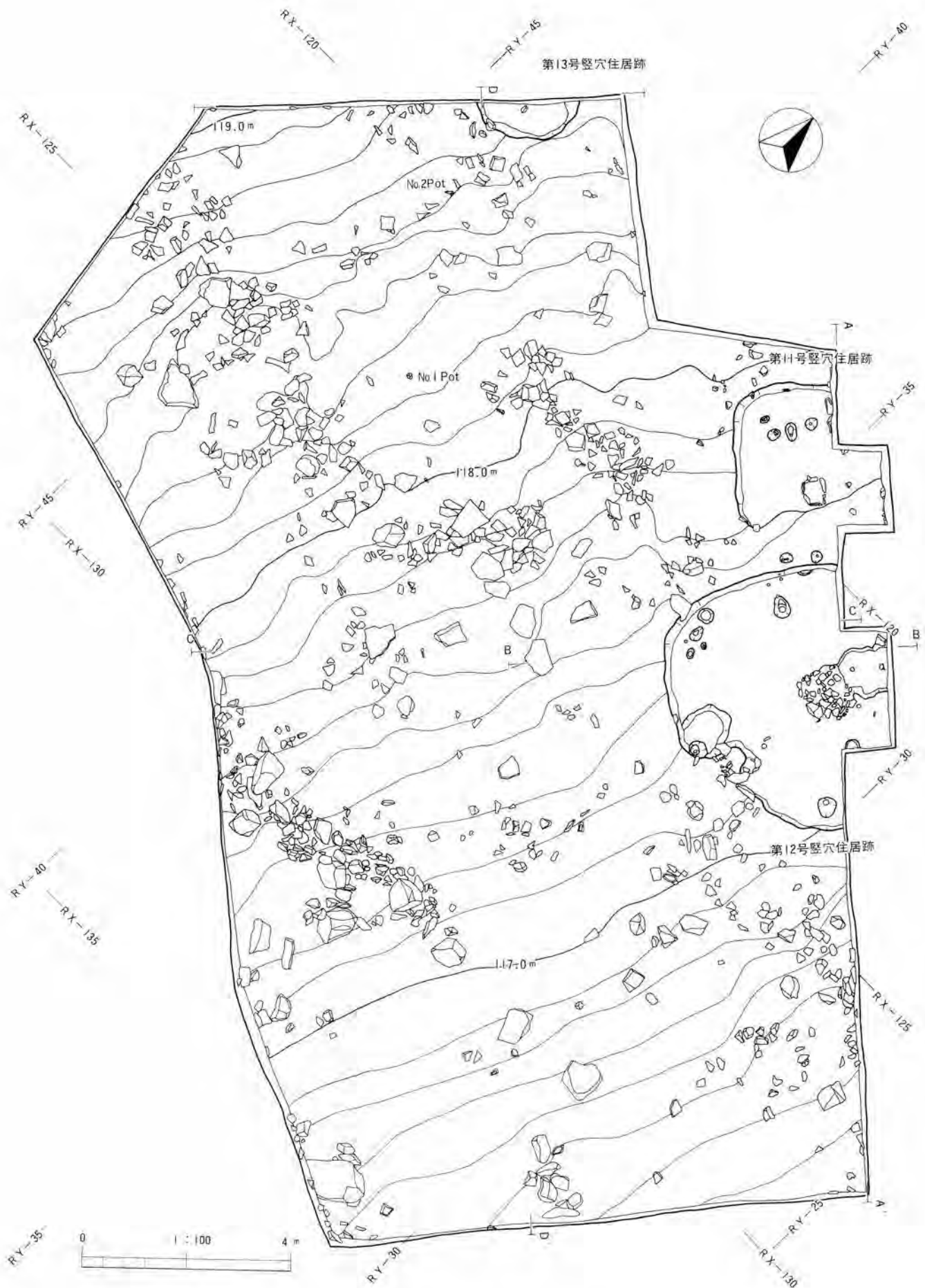
IV層 地山層であり褐色粘質土を基本土とする。遺物は含まれない。昭和60年度調査区の第4層に対応する。

### (2) 遺構の検出状況（第5図）

調査区周辺は西から東へ下る比較的斜度のある傾斜面であるにもかかわらず、調査区北半部を中心に縄文時代中期中葉～末葉の竪穴住居跡を3棟検出した。

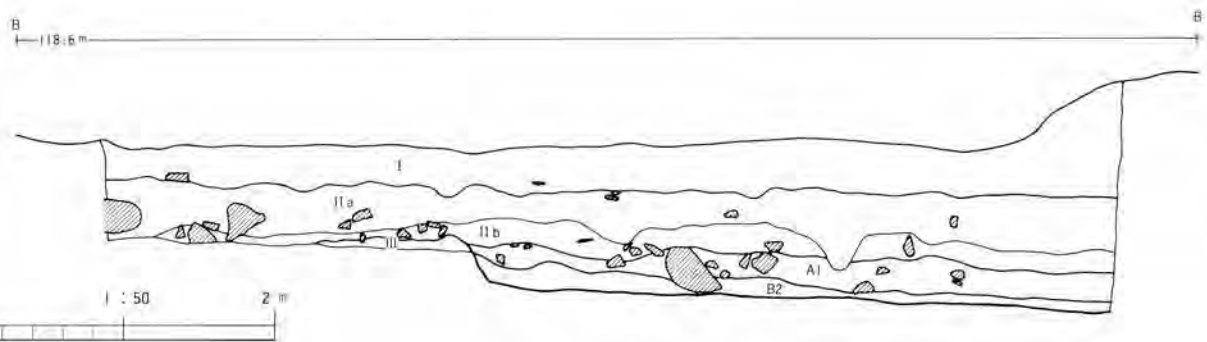
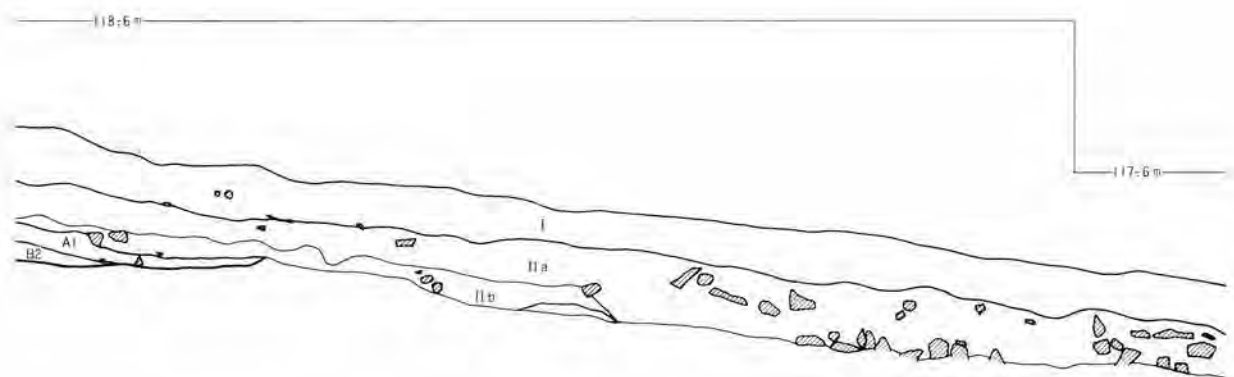
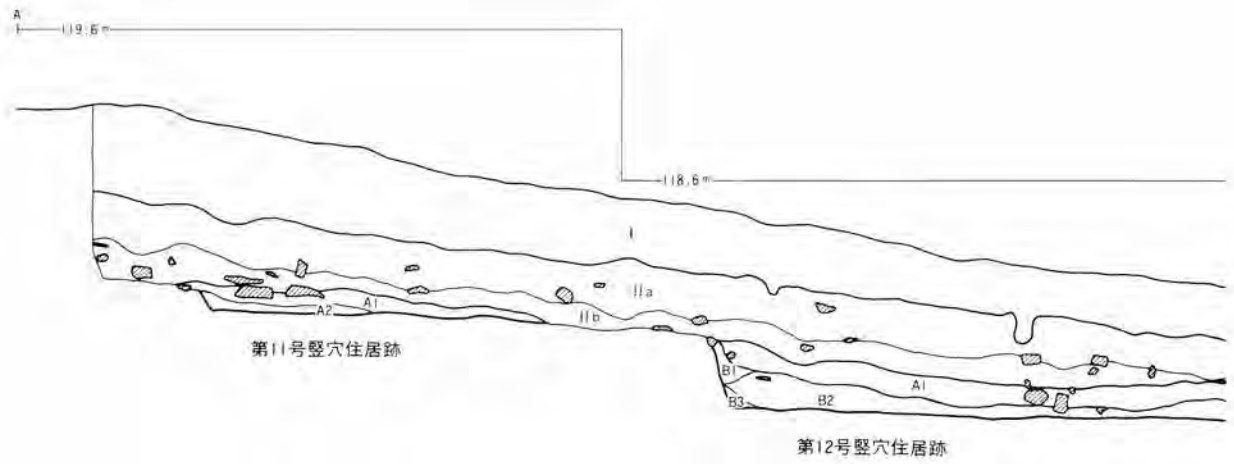
これらはいずれもIII層上面で検出しており、II b層に覆われている。

調査区内にはIV層中に角礫～亜角礫を多量に含んでおり、ここから遊離した礫がIII層～II層にかけても含まれている。

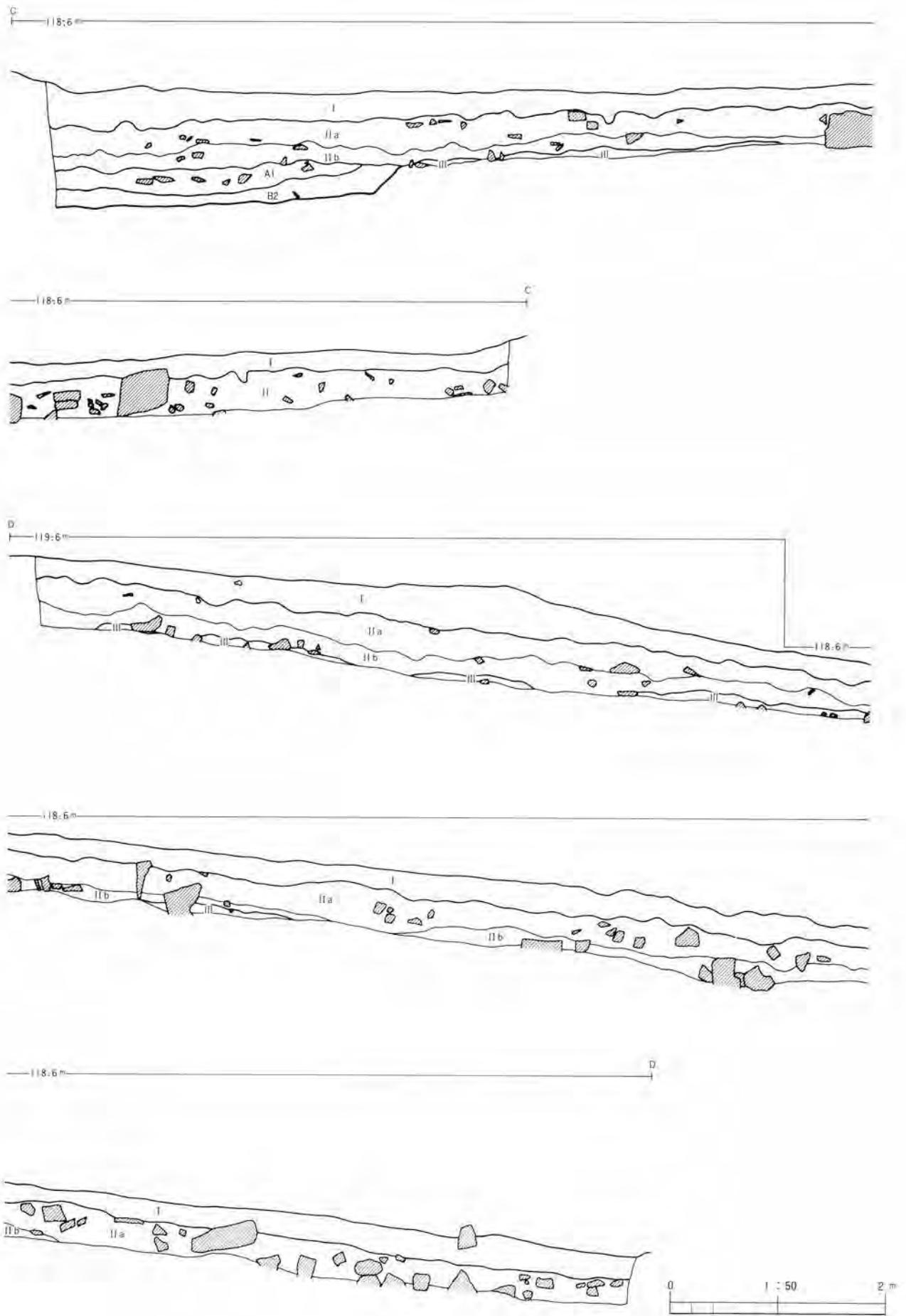


第5図 第6次調査区遺構配置図





第6図 第6次調査区土層断面図(1)



第7図 第6次調査区土層断面図(2)

当初、配石や集石などの遺構となる可能性も想定して、部分的にはあるが、礫群の下部を掘り下げてみたが、特に掘込み等はみられずⅣ層中に一様に礫が包含されている状況を確認することができた。

また、円礫～垂円礫などの異地性の礫を含まないことから、この礫群はⅣ層堆積時に後背山地である館ヶ森方面から供給されたものと判断した。

ところで、竪穴住居跡はこの礫群が比較的少ないところを選んで占地しているように見える。

### (3) 検出された遺構・遺物

#### 第11号竪穴住居跡（第8図、第9図）

調査区西端部に位置する。第12号竪穴住居跡に隣接するが重複はしていない。斜面下位の東半部は失われており、全体の $\frac{1}{2}$ 程度を精査した。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は北東～南西方向で2.8m以上、北西～南東方向で2.5mを計る。壁はややなだらかに立ち上り、壁高は最深部（北壁）で0.2mを計る。主軸方向はN53°40′Wである。（これと直交したN36°20′Eとなる可能性も考えられる。）

平面形

埋土はA層のみで、2層に細分される。A<sub>1</sub>層はやや明るい黒褐色粘質土を基本とし、やや明るい暗褐色土塊を含む。A<sub>2</sub>層は暗褐色粘質土を基本とし、やや明るい暗褐色土塊や褐色土塊を含むがA<sub>1</sub>層に比して褐色土塊の混入率が高い。

埋土

いずれの層も固さ、しまりともに中程度である。

床面はほぼ平坦で固いが、東端部（炉付近）でやや柔らかくなる。貼床は認められない。

柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>が主柱穴に相当し、いずれも柱痕跡を確認している。P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>を結ぶ線がほぼ中軸線と一致することから、調査区外に2口の柱穴が存在するものと思われ、柱穴配置は6本柱となる可能性が高い。

柱間寸法は各々芯々でP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>が0.7m、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>が0.6m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>が2.38m、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>が2.53mを計る。これら以外は、P<sub>1</sub>は柱穴であり柱痕跡がみられる。また、P<sub>1</sub>はやや浅いピットである。

炉は長方形の石囲炉で炉の長軸が住居跡の主軸方向にほぼ一致する。規模は長軸で0.53m、短軸で0.46m、炉床までの深さ0.09mを計る。

炉

炉の構築方法は、炉よりひとまわり大きいだ円形の掘り方にK<sub>1</sub>層をつめながら炉石を埋設している。炉石は、やや焼成を受けているものの炉床はやや柔らかくほとんど焼成を受けていない。

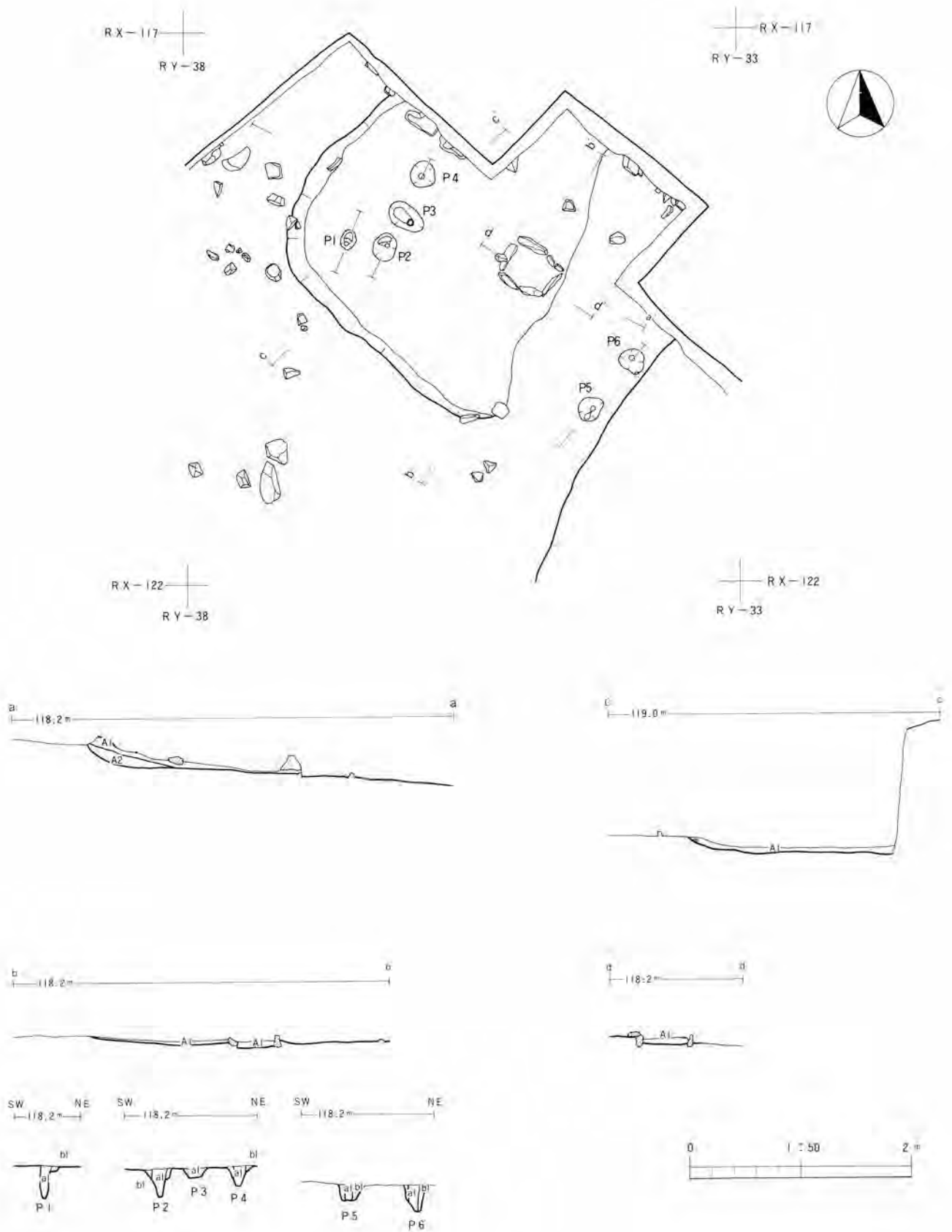
#### 出土遺物（第10図）

埋土が浅いこともあり遺物の出土量は少ない。

土器

1はA<sub>1</sub>層から出土したもので、口縁部に4単位の大突起を持つキャリバー形深鉢である。大突起間には山形の小突起を配する。施文は口縁部文様に集中し、大突起部に「C」字形の貼付文を施し、大突起間を波状の隆起線で連絡する。大突起下部には隆起線による渦巻文を施し、この間を横位長だ円形文で連絡する。口縁部文様帯の最下部は横位1条の隆起線をめぐらせて区画している。地文はL-R単節斜縄文で、口縁部は横方向に、体部は縦方向に回転させる。

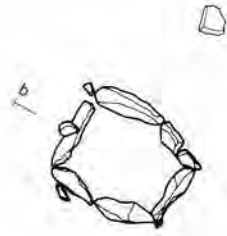
2、3は隆沈線および沈線により施文される深鉢の口縁部である。4はキャリバー形深鉢の破片で、口縁部に隆起線による施文がみられる。5～8は沈線により施文されるものであるが、



第8图 第11号竖穴住居跡

R Y-36  
R X-118

R Y-34  
R X-118



<使用時>



R X-120  
R Y-36

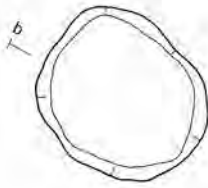
R X-120  
R Y-34

a

R Y-36  
R X-118

R Y-34  
R X-118

a



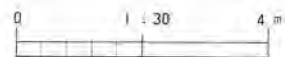
<構築時>



R X-120  
R Y-36

R X-120  
R Y-34

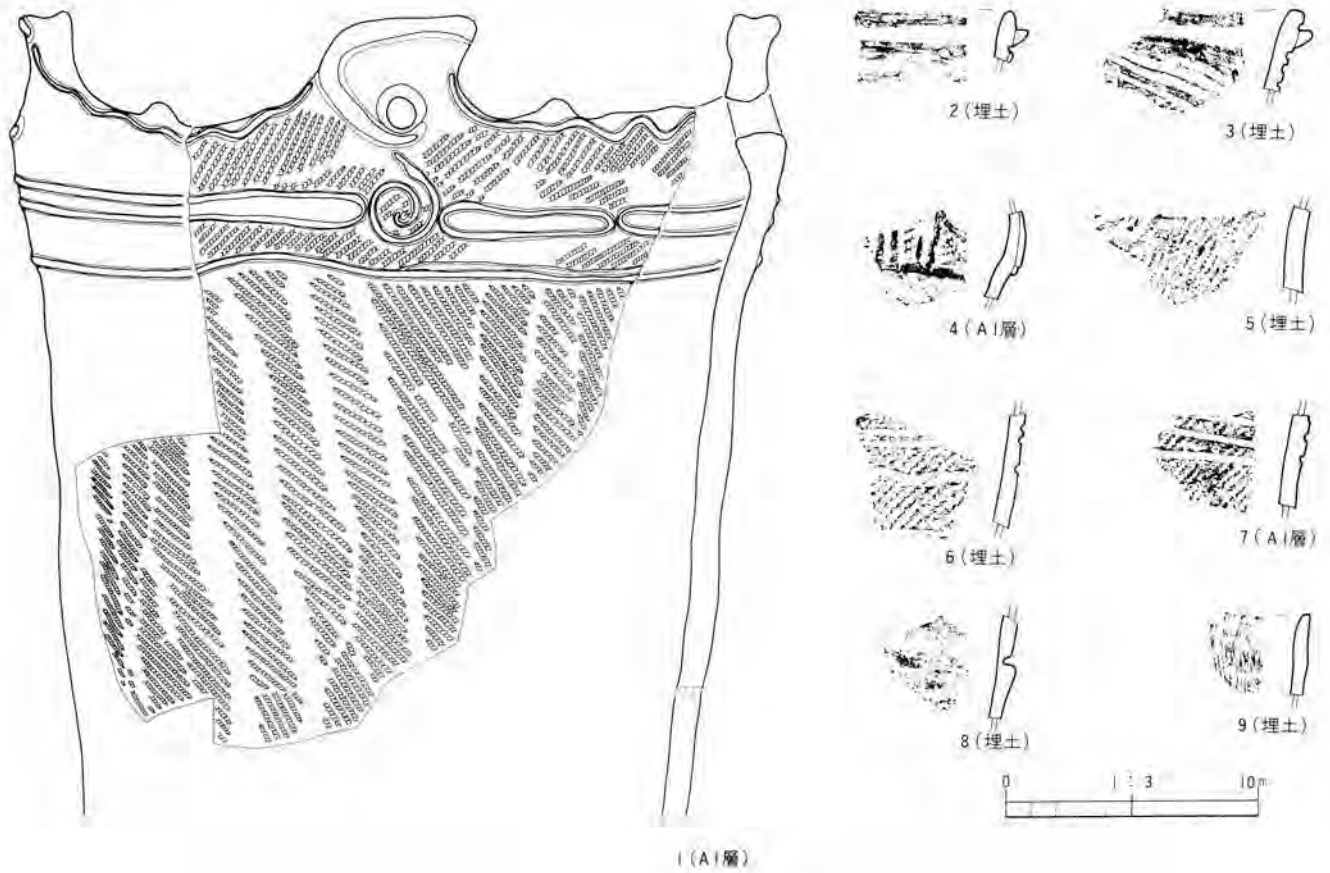
a



第9図 第11号竪穴住居跡・炉



8にはだ円形の連続刺突文が伴う。9は櫛目文を地文とする小形深鉢の口縁部破片である。  
 これらはいずれも大木8a式に伴う。



第10図 第11号竪穴住居跡・出土遺物

### 第12号竪穴住居跡（第11図～第13図）

調査区北端部に位置する。第11号竪穴住居跡に隣接するが重複はしていない。全体の4/5程度を精査した。

平面形は隅丸の多角形（五角形か）を呈し、規模は北東～南西方向で4.1m以上、北西～南東方向で5.1mを計る。壁は直壁で、壁高は北壁で0.45m、南壁で0.05mを計る。主軸方向はN27°Eである。

平面形

埋土はA層・B層・C層に大別される。A<sub>1</sub>層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。固さは中程度でややしまりがない。B層は3層に細分される。B<sub>1</sub>層とB<sub>2</sub>層はいずれも暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を多量に含む。固さは中程度であるがしまりがない。両層とも北西部の壁際に堆積するが、一部南西部の壁寄りにも堆積している。壁の崩壊土と思われる。B<sub>3</sub>層はやや暗い暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。固さは中程度でややしまりがない。C層は炉を覆う土層で、2層に細分される。C<sub>1</sub>層は黒色粘質土を基本土とし、暗褐色土粒をわずかに含むほか炭化物粒や焼土粒をわずかに含む。柔らかくややしまりがない。C<sub>2</sub>層は黒褐色粘質土を基本土とし、黒色土塊や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりがない。

埋土

床面はほぼ平坦で固く、貼床は認められない。

柱穴は、P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡を確認している。調査区外にも柱穴が存在する可能性があり柱穴配置は不明である。

柱穴

柱間寸法は、各々芯々でP<sub>2</sub>とP<sub>6</sub>が3.15m、P<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>が2.7m、P<sub>2</sub>とP<sub>7</sub>が3.8mを計る。

これら以外は、P<sub>1</sub>が周溝状のピットで、P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>は浅いピットである。

炉は石組複式炉で、床面中央から北東に寄る。柱穴による主軸方向と炉の主軸方向がほぼ一致している。炉の各部をI部、II部として説明する。

炉

I部は不整形の石組炉で、径1.0mを計る。炉の壁際に炉石や土器片を埋設する。また、炉床にも敷石状の礫がみられるが、大半は原位置を留めていない。炉床はほとんど焼成を受けておらず、焼土層がみられない。II部は不整形の堀込みで、北東～南西方向で0.9m以上、北西～南東方向で1.0m、深さ0.12mを計る。底面は、やや柔らかく焼成は受けていない。

炉の構築方法は、I部を東西1.45m、南北1.1m、深さ0.5mの不整だ円形に、II部を不整形に掘り下げた後、I部に、K<sub>2</sub>層をつめ、さらに炉石をすえながらK<sub>1</sub>層をつめている。K<sub>1</sub>層は黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。K<sub>2</sub>層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊などを多量に含む。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

### 出土遺物（第14図・第15図）

遺物の出土量はやや少ない。住居跡に伴うものとしては、5が炉石とともに埋設されていた土器片であり、54～56は床面に密着して出土したものである。また、炉を覆うC層からの出土遺物は住居跡廃棄後の遺物と思われる。埋土遺物はA<sub>1</sub>層とB<sub>1</sub>層からのみ出土しており、前者からのものがやや多い。

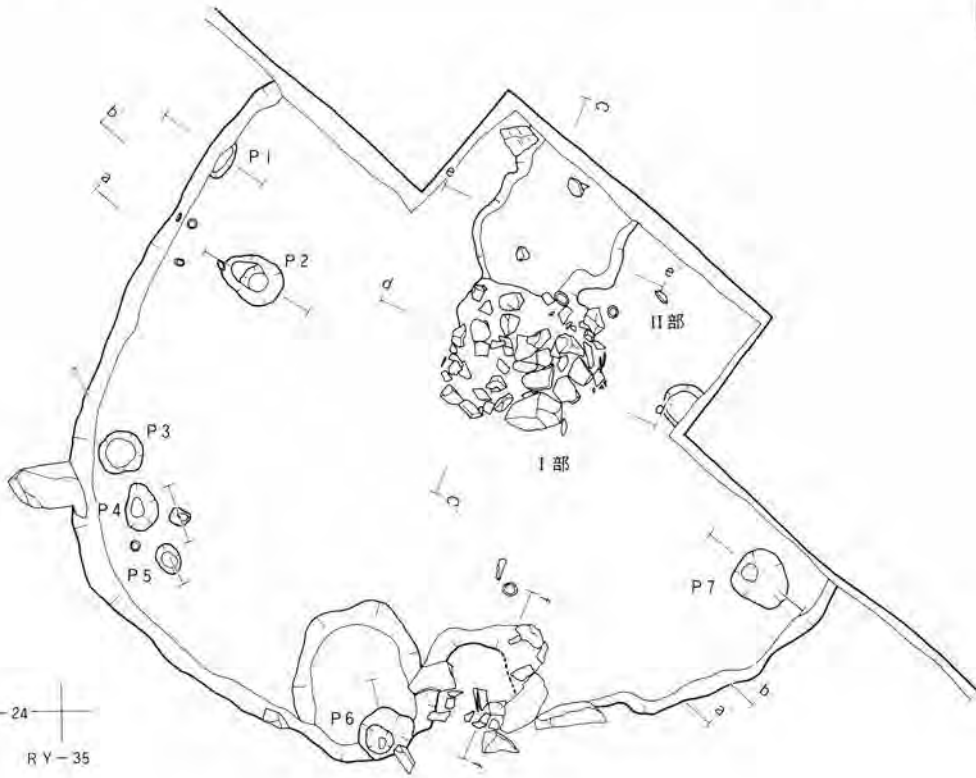
5は炉に埋設されたもので平行沈線による施文がみられる。

土器

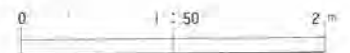
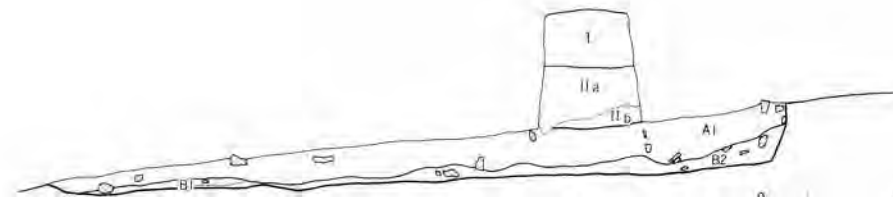
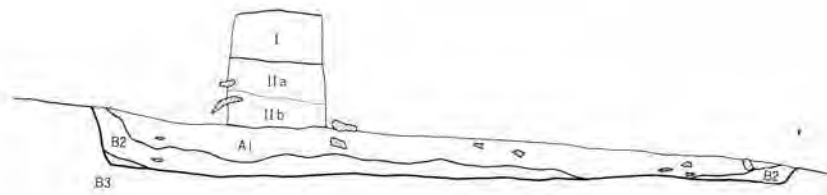
1・3～6はC<sub>1</sub>層から出土したものである。1は口縁部が内湾する小形深鉢で、口縁部に4単位の大波頂を有する。波頂には隆沈線による渦巻文を施す。波頂下と波頂間に隆沈線によ

R Y-35  
R X-119

R Y-30  
R X-119



R X-24  
R Y-35



第11図 第12号竖穴住居跡(1)

る懸垂文を施すことにより縦位の区画文を形成している。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させるが、隆沈線の施文以前に施されている。

3・4・6は口縁部に隆起線を施すもので、3・4は頸部以下に平行沈線文による施文がみられる。

7～16はB<sub>2</sub>層出土遺物である。8は磨消技法により施文される。内面の調整方向により横位の施文と考えたが、縦位だ円形区画文となる可能性も大きい。

10は隆沈線により施文されるものである。

11～13は調整の不十分な隆起線により施文されるもので、11はキャリバー形深鉢となる。

7は口縁部が外反し体部が膨らむ深鉢で、頸部に施された横位2条の平行沈線間を2段の連続刺突文で充填している。9・14・15も平行沈線により施文されるものである。

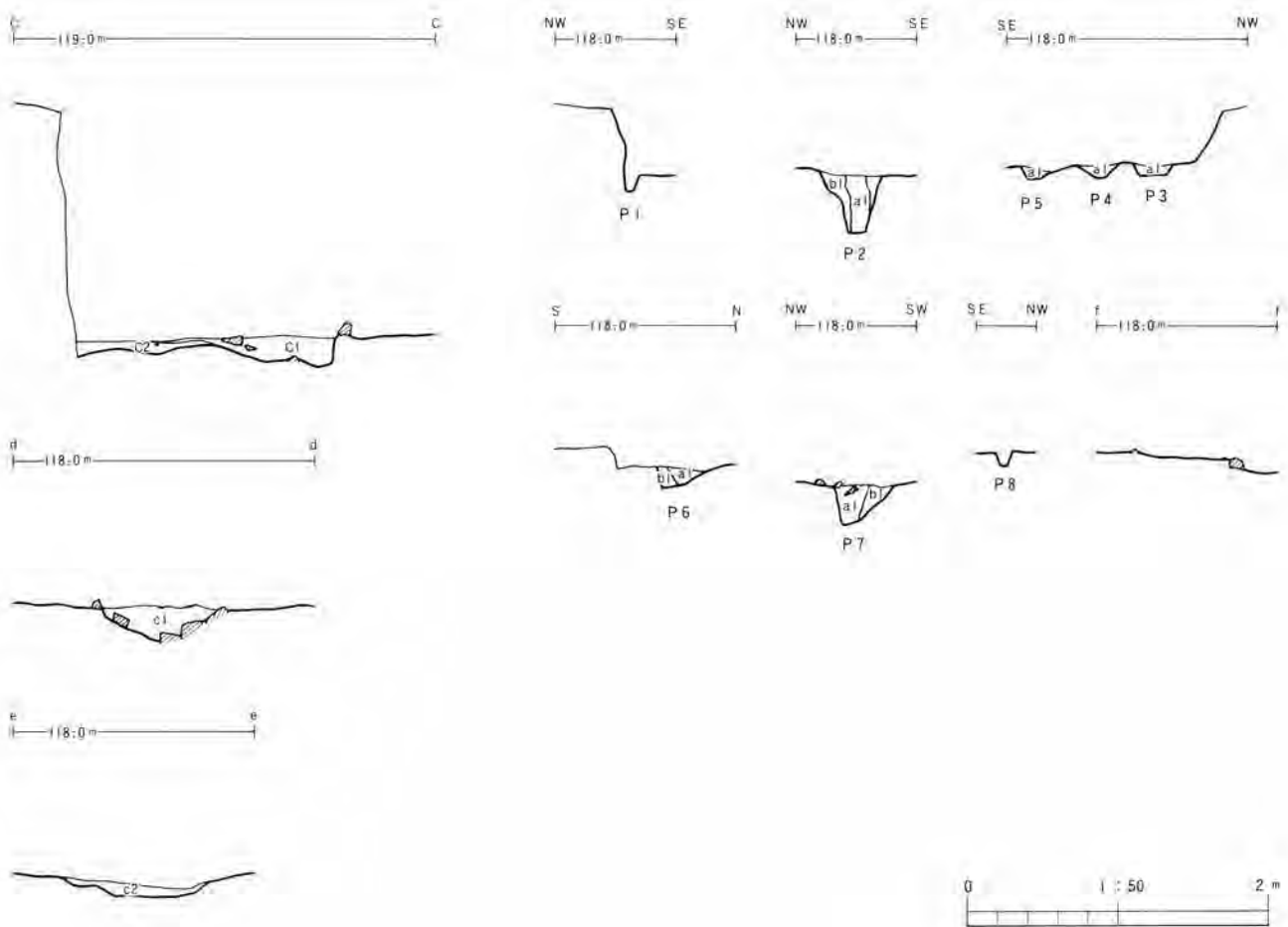
17～25はA<sub>1</sub>層出土遺物である。17は口縁部がわずかに外反する深鉢で、磨消技法により区画文を施す。

19、22は隆沈線により施文されるものである。

18はキャリバー形深鉢で、口縁部上端に隆沈線による施文があり、その下位に横位の平行沈線による施文がみられる。

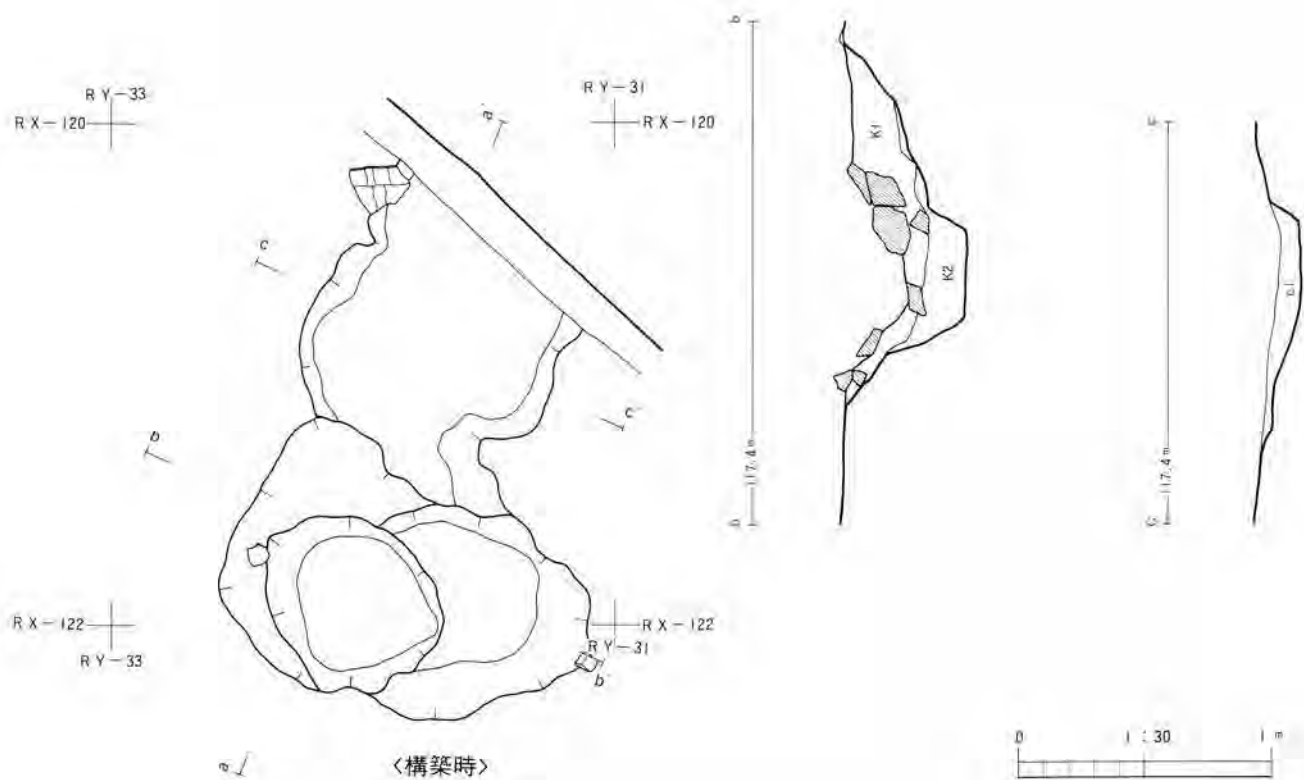
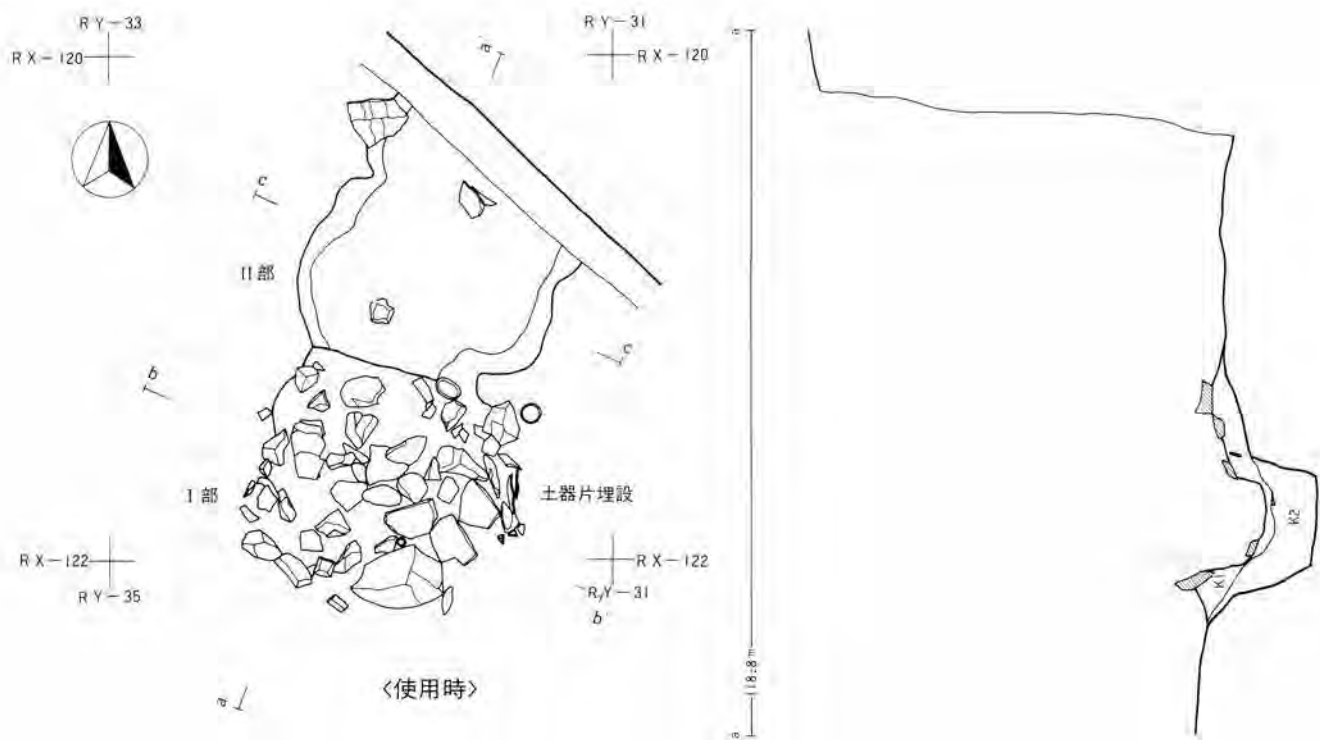
21は頸部が強く屈曲する深鉢で、細い隆起線による施文がみられる。

20・23～25は平行沈線により施文されるもので、25は波状に懸垂し、他のものは横位に施文



SMS06NO2H

第12図 第12号竪穴住居跡(2)



第13図 第12号竪穴住居跡・炉



される。

2・26～52は埋土出土遺物である。遺構検出時に出土したものが大半であるため、ほとんどがA層から出土したものと思われる。

2は磨消技法により曲線的な区画文を施すものである。

26～29も磨消技法により縦位の区画文を施すものである。28は口縁部付近がわずかに外反する深鉢である。

30～37は隆沈線により施文されるものである。いずれも小破片であり全体のモチーフが不明ではあるが縦方向と横方向に展開する施文がみられる。30・31は口縁部がわずかに内湾する深鉢である。

48～52は主体的施文のないものである。48は口縁部破片で良く整形されている。49・50はL-R単節斜縄文を地文とするものである。51は綾絡文を地文とするものである。52は網目状撚糸文(?)を地文とするものである。

53はA層から出土した石製円盤で、扁平円盤の周縁を幅0.5cm程度に擦ったものである。部分的に擦痕は認められるものの両面ともに大きく自然面を残す。長径4.9cm、短径3.8cm、厚さ1.1cm、重量27.2gを計り、扁平円盤Aグループに含まれるサイズである。

石製品

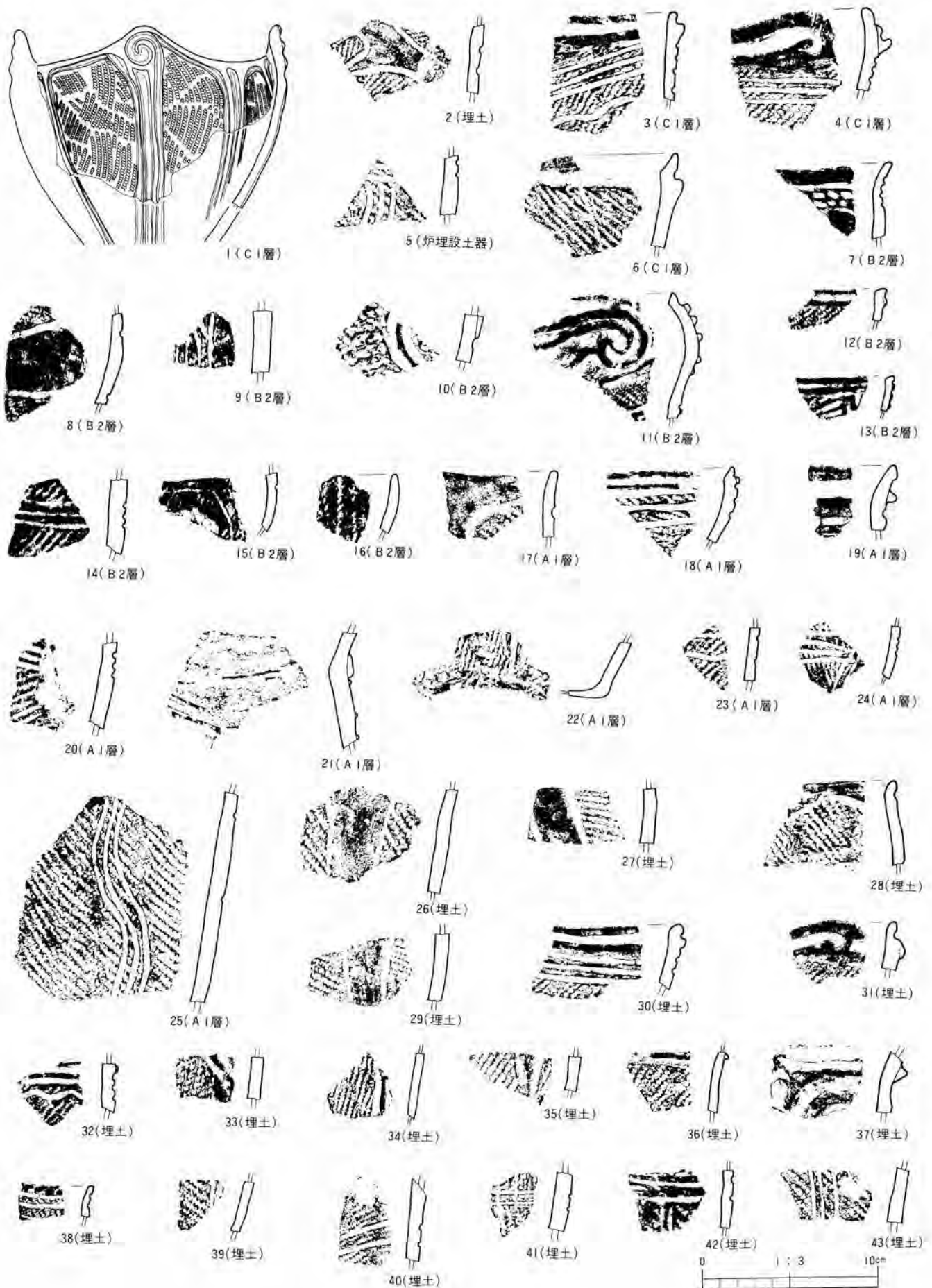
54～56は床面の西壁寄り出土したものである。

石器

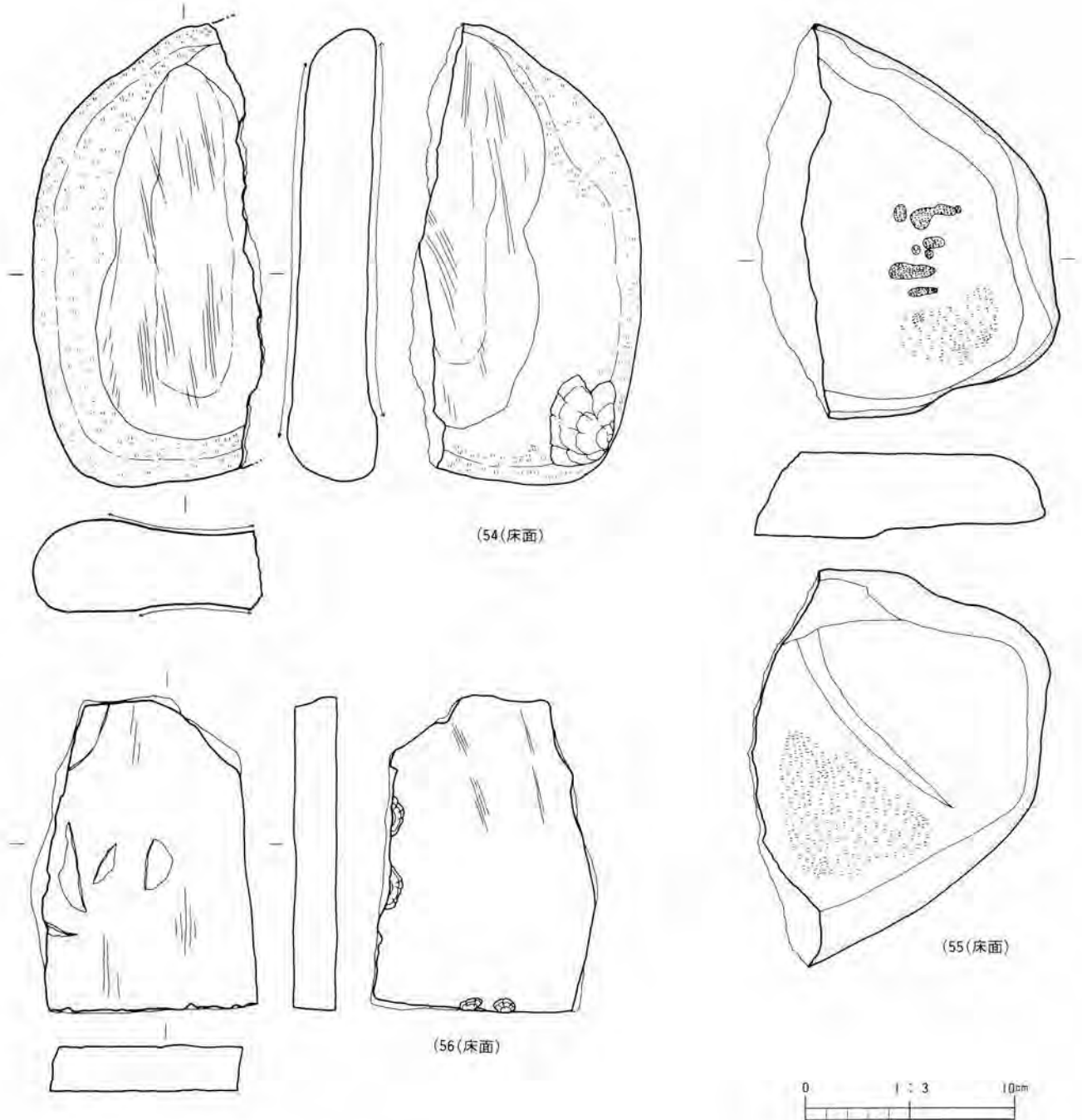
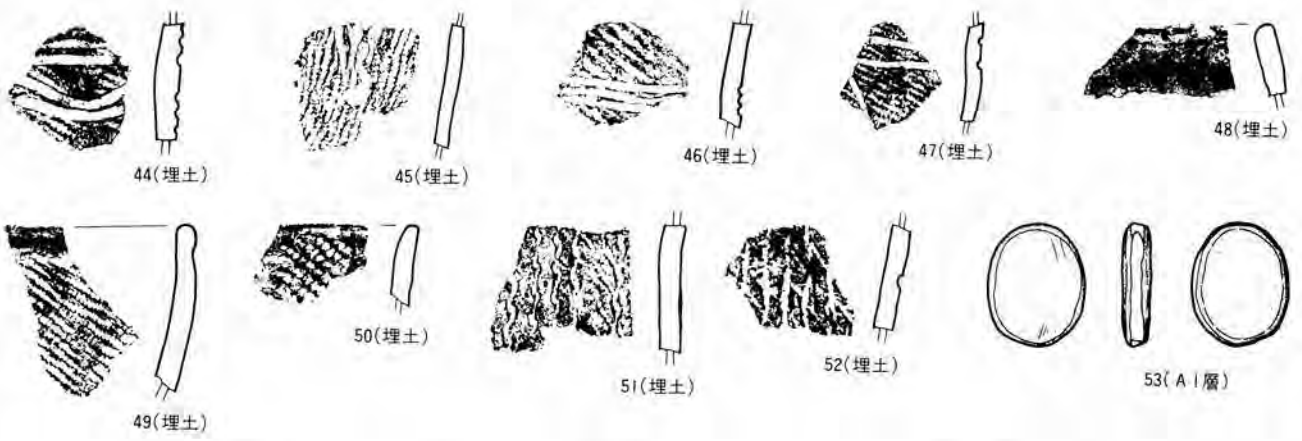
54は石皿で、長さ18～19cm、推定幅9～10cmを計る不整だ円形の凹んだ使用痕を両面に有する。凹部の一端は抜けており、三方に縁を有する。長軸方向に使用したようで、この方向に擦痕が多くみられる。両面ともに凹部の周辺には、まばらな敲打痕を有する。55も石皿かと思われ片面に磨面があり、まばらな敲打痕と敲打痕の集中する部分が認められる。明瞭な擦痕は認められない。

56は砥石で、両面ともに平滑な磨面を有する。

出土遺物のうち、磨消技法により施文されるものは大木9式～10式に伴うもので、他のものは大木8b式に伴う。



第14図 第12号豎穴住居跡出土遺物(1)



第14図 第12号竪穴住居跡出土遺物(2)

第13号竪穴住居跡（？）（第16図）

調査区北西部に位置し、他の住居跡からはやや離れている。調査区内に北東～南西方向に2.0 m、北西～南東方向に0.65 mを精査したのみで、柱穴や炉などの付属施設は検出されなかった。住居跡とする根拠は乏しいのではあるが、フラスコピット等の土坑とも考えづらいので、とりあえず住居跡とし、新しい所見があれば後日訂正することにした。

埋土

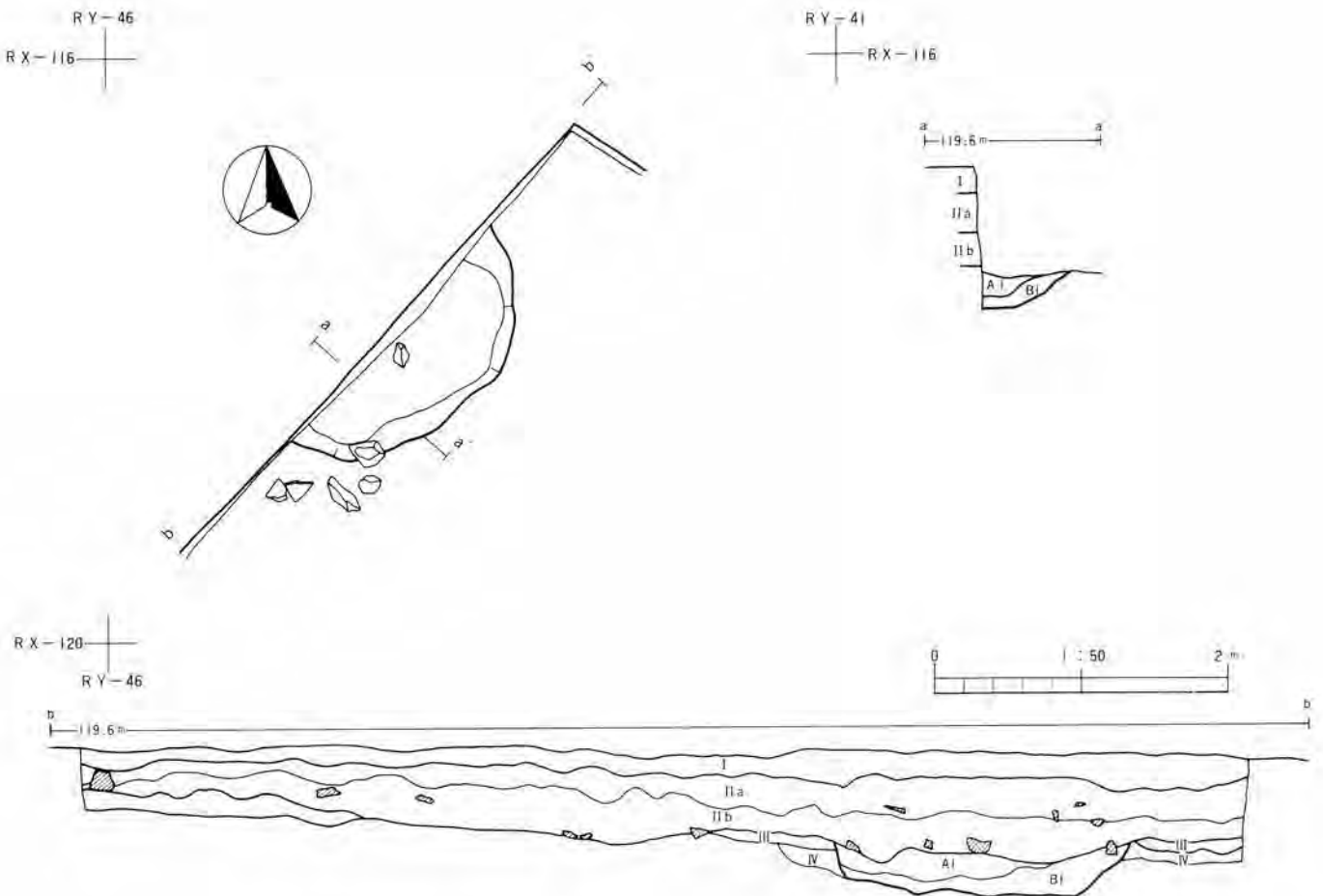
埋土はA層・B層に大別される。A層は黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。B層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

壁はやや外傾し、深さ0.35 mを計る。床面はやや凹凸があるが、やや固い。

出土遺物（第17図）

土器

3はA層から出土したもので、磨消技法による曲線的な区画文を施文する。大木10式に伴う。



第16図 第13号竪穴住居跡

### 遺構外出土遺物（第17図～第23図）

調査区内で確認された土層は、前述したとおりⅠ層～Ⅳ層までである。Ⅰ層は表土層であり、縄文時代の遺物をやや多く含むが、陶磁器片や鉄器（釘等）などの中世以降の遺物も含まれている。近代～現代の遺物は図示しなかった。

Ⅱ層は縄文時代の遺物包含層で上下2層に細分される。縄文時代前期前葉から中期末葉にわたる遺物が出土しているため、Ⅱ層が堆積した時期は中期末葉となる。細分層に型式差があるかどうかは遺物量が少なく不明である。

Ⅲ層は漸移層であり遺物は含まれない。遺構はすべてⅢ層上面で検出している。ただし、昭和60年度調査区ではⅢ層に対応する層から相当量が出土している。

Ⅳ層は地山層であり遺物を含まない。

1・2・4～37はⅡb層出土遺物である。1と2はややまとまった状態で出土した。他のものは破片で出土し、接合したものはほとんどない。

土器  
Ⅱb層

1は口縁部が直立し、体部中央が強く張り出すつぼ形の器形を呈する。口縁部を無文帯とし体部上半に主要な文様帯を有する。文様帯上下の境界を断面三角形の横位隆起線で区画し、内部に円形の縄文区画文と無文帯を施す。体部下半は地文帯となる。地文はR-L-R複節斜縄文を縦方向に回転する。大木10式に伴う。

2は深鉢の底部付近で、L-R単節斜縄文を縦方向に回転する。

4は体部の屈曲する深鉢で、体部に曲線的な縄文区画文を施す。大木10式に伴う。

5～15は隆沈線により施文されたものである。5～7は比較的丁寧調整された隆沈線により懸垂文を施文する。5はやや口縁部の内湾する小形の深い鉢である。これらは大木8b式の新しい部分に伴う。

8～15はやや調整が不十分な隆沈線により施文されるもので、文様が横方向へ展開するものが多い。12はキャリパー形深鉢で口縁部文様帯に横位の波状隆起線や隆沈線などを施文する。頸部と体部文様帯上端にはいずれも横位4条の平行沈線がめぐり、体部文様帯へは懸垂文や横位波状文などが施文される。8・10・11・13・14は口縁部が内湾気味の深鉢となるようである。これらはいずれも大木8b式に伴う。

16～25は平行沈線により施文されるもので、文様が縦方向に展開するものと横方向に展開するものの2者がみられる。いずれも大木8b式に伴う。

27～30は外面を調整した無文の土器である。いずれも同一個体片かと思われる。口縁部が強く内湾している。

26は口縁部が外反する深鉢で、刻み目を有する隆起線を口縁に沿って波状に施文している。縄文時代前期に伴う。

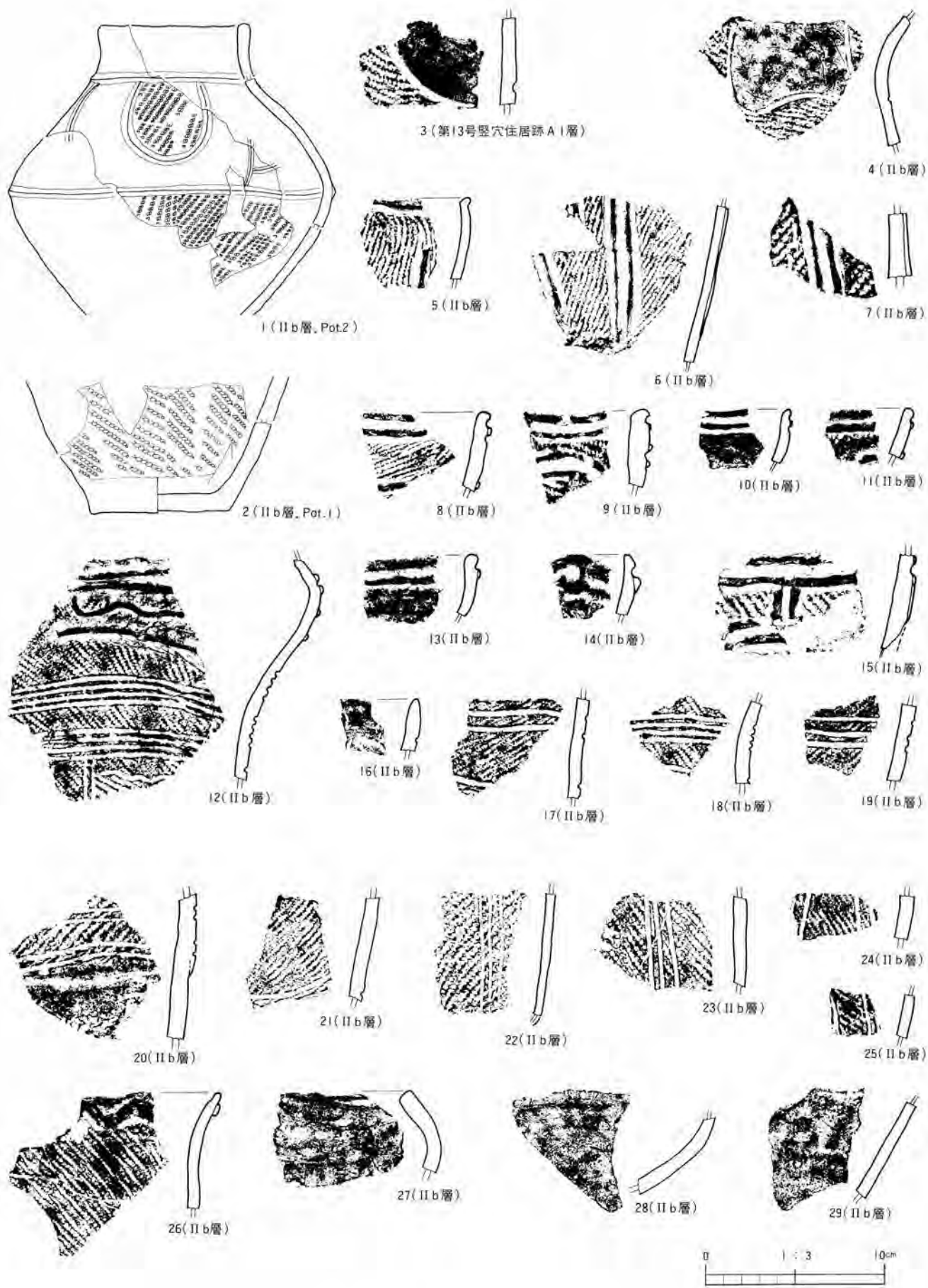
31～37は体部に主体的な施文がみられない土器である。31～32は単節斜縄文を縦方向に回転する。33は縄文を横方向に回転するもので、横方向の綾絡文がみられる。縄文時代前期に伴うものか。34～36は綾絡文を縦方向に回転する。37は木目状撚糸文を地文とするものである。

38～89はⅡa層出土遺物で、いずれも破片である。

Ⅱa層

38～47は磨消技法により施文されるものである。38は口縁部がやや外反する深鉢で、やや幅





第17图 第13号竖穴住居跡出土遺物  
遺構外出土遺物(1)

の広い山形の縄文区画文を有するが全体のモチーフは不明である。39～42・45は縦位の縄文区画文を施すもので大木9式に伴う。44も同様であるが、縄文区画文の幅がやや狭く前述したものとは型式差があるかもしれない。

48～64は隆沈線により施文されるものである。48は口縁部がやや外反する深鉢である。49・50は口縁部の内湾する深鉢で、連続刺突文が施文されたものである。51・64はキャリパー形深鉢である。52～54は口縁部が直立あるいは内湾気味に立ち上がるものである。これらはほぼ大木8b式に伴う。

65・67～78は平行沈線により施文されるものである。65は口縁部が外反し、体部に横位の平行沈線と懸垂文を施すものである。67・70・72・75・76は横方向の平行沈線文を施すものである。73・77・78懸垂文を施すものである。これらはほぼ大木8b式に伴う。

66はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆沈線や沈線により波状に展開する施文がみられる。大木8a式に伴う。

79・80は無文の口縁部破片である。79には連続刺突文が施される。

81・82は半裁竹管により施文されるもので、82は円形の貼付に沿った沈線と、小波状の沈線が施される。81も小波状の沈線が施される。大木6式に伴うものである。

83は胎土に植物繊維を含む土器で、口縁部がやや内湾する。破片の下端にだ円形の圧痕を伴う隆起線が施される。縄文時代前期前葉に伴う。

84～88は体部に主体的な施文がみられないものである。84・85・88は単節斜縄文を地文とする。86は横方向に綾絡文(?)を施すものである。87は縦方向に綾絡文を施すものである。

89は深鉢の底部破片で、網代痕の後に広葉樹の木葉痕が施される。

90～102・108はI層出土遺物である。

I層

108は肥前染付碗で、外面に一重網目文を施すが、見込には施文されない。いわゆるくらわんか手で18世紀代に伴うものと思われる。

第21図版2は瀬戸美濃の灰釉丸皿で、16世紀代に伴うものと思われる。(註1)

90～92は縄文時代後期に伴うと思われるものを一括した。90は磨消技法により区画文を施すものである。91は調整された器面に沈線による文様を施すものである。92は平行沈線による波状の施文がみられるものである。

93・94は磨消技法により施文されるもので、縄文時代中期後葉～末葉に伴う。

95・96は隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

97～101は平行沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

102は櫛目文を地文とするものである。

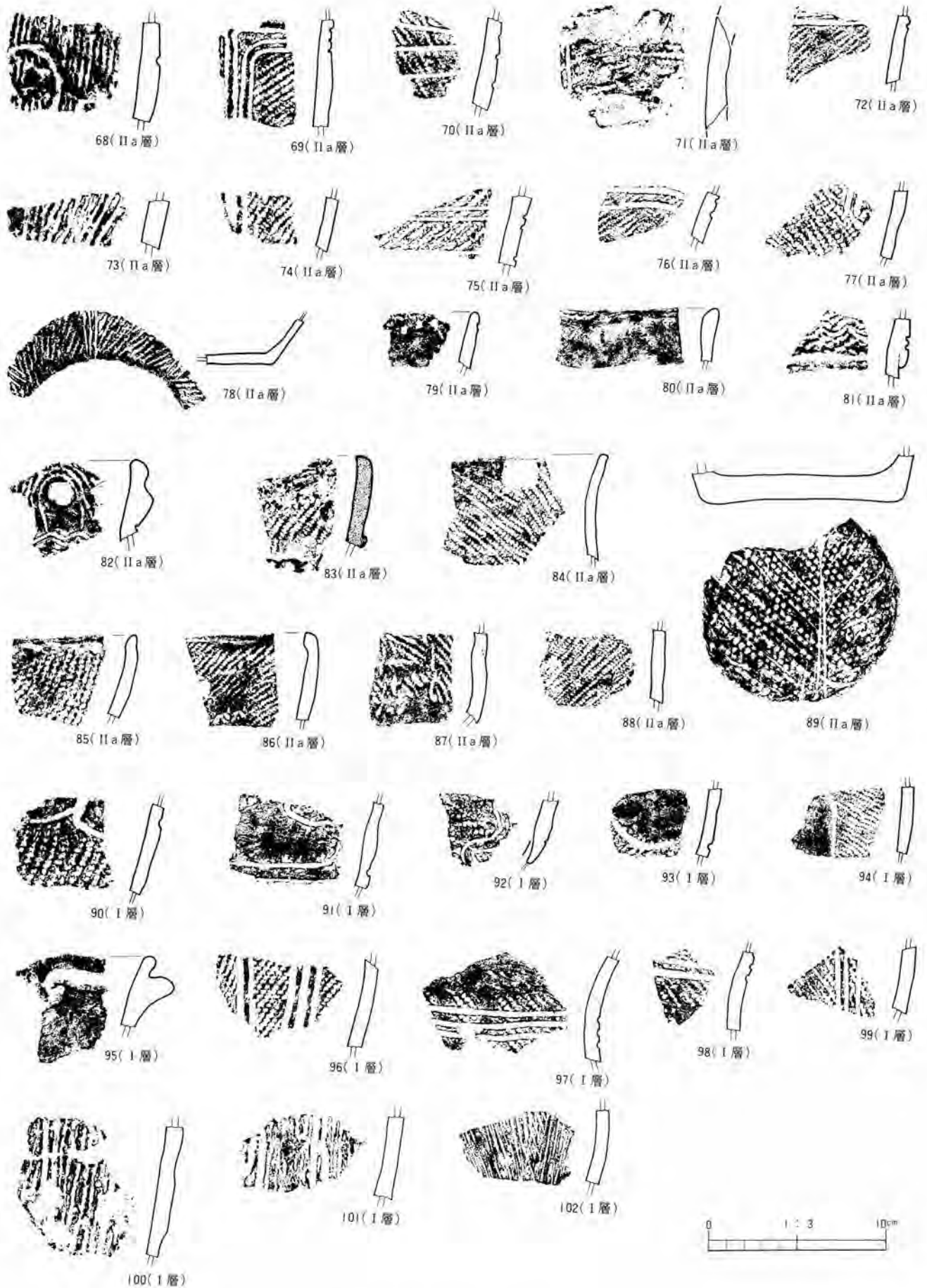
107は胎土に植物繊維を含む土器片を利用した土製円盤である。縄文時代前期初頭に伴う。

土製品

(註1) 陶磁器類は室野秀文氏に鑑定をお願いした。



第18図 遺構外出土遺物(2)



第17圖 遺構外出土遺物(3)



石器	石器は土器同様にⅠ層～Ⅱb層の各層から出土している。各々の時期を確定できないので、器種毎に説明する。
石鏃	103・104は石鏃である。いずれも三角鏃で、103は平基、104は凹基である。
削器	106は削器である。やや厚手の剥片を素材としており、表面に一部自然面を残す。裏面にも大きく主要剥離面を残すが、調整剥離によりバルブを取り除いている。一方の側縁に調整を施し、やや鈍角の刃部を作り出す。もう一方の側縁は、ほとんど調整されないが鋭角な刃部となっている。両側縁とともに微細な剥離がみられる。
使用痕のある剥片	105は使用痕のある剥片である。特に刃部への調整は行わず、やや鋭角な側縁をそのまま刃部とし、使用時によると思われる微細な剥離が伴っている。
磨製石斧	109～114は磨製石斧である。いずれも中央部で欠損している。 109・111はいずれも良く研磨されたものであるが、欠損後の剥離がみられる。109は成形時の敲打痕を残している。 110・113も全面を研磨するがやや不十分であり、特に113は成形時の敲打痕を大きく残す。 112・114は表面をほとんど研磨しないもので、成形時の敲打痕や自然面を残している。
打製石斧	115は打製石斧である。両面ともやや大きめの剥離にて調整するが自然面を残している。一方の側縁はやや鋭角的であるものの、もう一方の側縁には幅1.2cmの敲打痕を有する。
敲打磨石	116～126は敲打磨石である。いずれも機能磨面には剥離などの調整が伴わないものが多い。機能磨面の部位により次の3者に分類される。 ① 116～118は長だ円形扁平礫の側縁を使用するもので、116には剥離が伴う。機能磨面の幅は116が2.2cm、117が2.5cmであるが、118は1.5cmとやや狭い。 ② 119～121は長だ円形扁平礫の両端部を使用するもので、側縁部には敲打痕を伴っている。119下端の機能磨面幅は2.1cmであり、これ以上広い機能磨面を有するものは中央に稜をつくることにより幅を二分している。 ③ 122～125はやや厚味のある扁平円礫の周縁を使用するもので、機能磨面の中央部に稜をつくることにより幅を2～3cm程度としている。125は幅1.3cmの機能磨面を有している。122は機能磨面に隣接して敲打痕が伴っている。 126も同様な扁平円礫を使用するものの、機能磨面は全周せずに敲打痕が伴っている。
敲石	127～133は敲石である。敲打磨石に類似した素材を用いており、やはり敲打される部位により3者に分類される。 ① 127は長だ円形扁平礫の側縁を使用するもので、敲打痕の最大幅は3.5cmを計る。敲打痕に隣接して小さな磨面が伴い、擦痕が観察される。 ② 128・129は長だ円形扁平礫の両端部を使用するものである。129は両端ともに敲打痕の最大幅は2.5cmほどである。128は両端部に幅1.7cmほどの敲打痕を有するほか側線部にも敲打痕を有している。 130～133も端部に敲打痕を有するものであるが、前述したものより小さな扁平円礫を使用している。敲打痕の幅は、いずれも2～3cmを計る。敲打痕の周辺には使用時の剥離が伴っている。 ③ 133はやや厚味のある扁平円礫を使用するもので、周縁に幅2.5cmほどの敲打痕を有する。

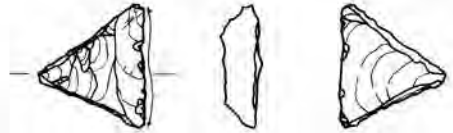




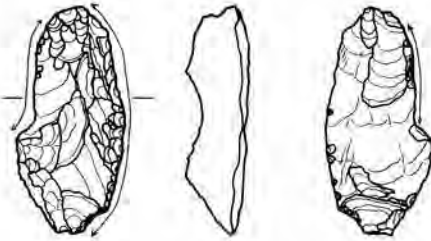
103( I 層)



104( I 層)



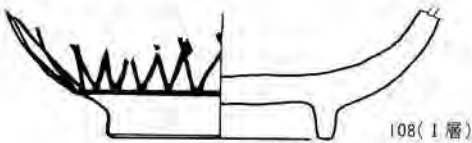
105( II a 層)



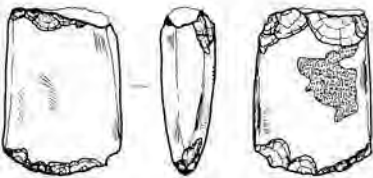
106( I 層)



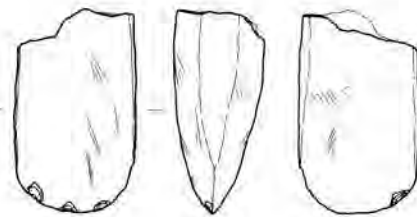
107( II a 層)



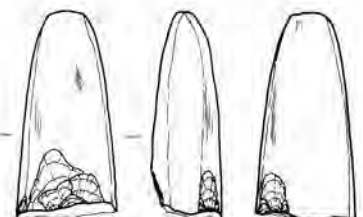
108( I 層)



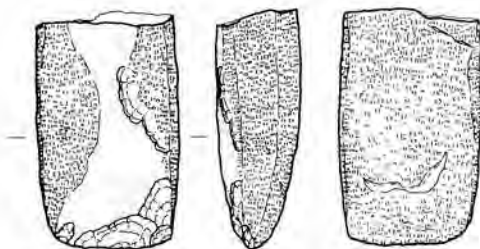
109( II a 層)



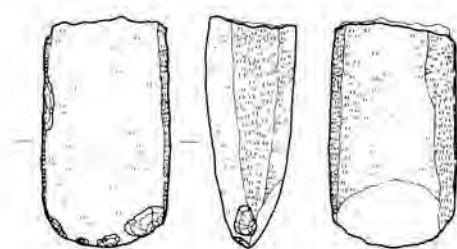
110( II a 層)



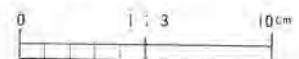
111( I 層)



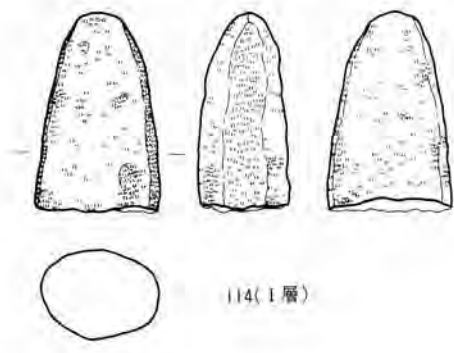
112( II a 層)



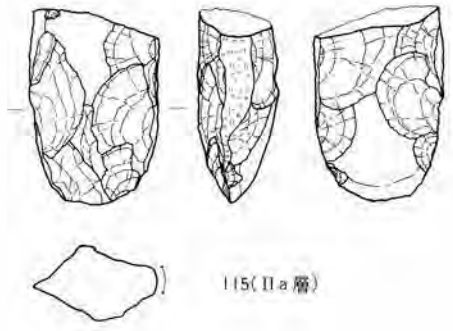
113( II a 層)



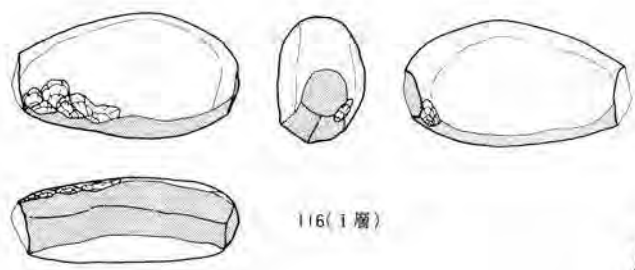
第20図 遺構外出土遺物(4)



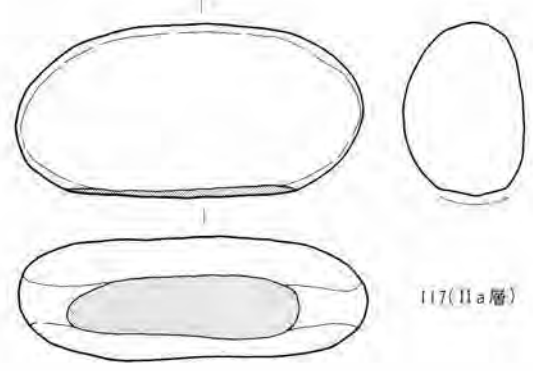
114(1層)



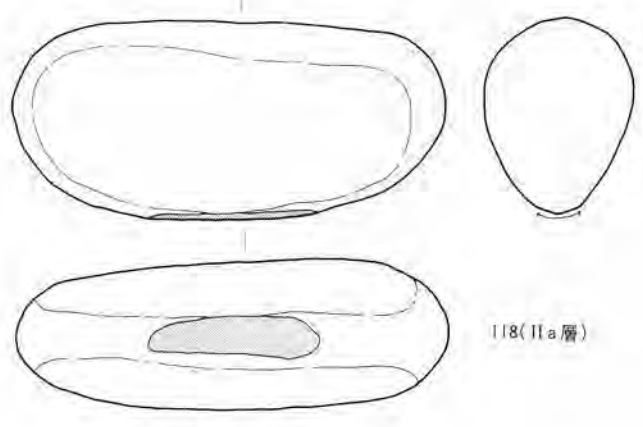
115(IIa層)



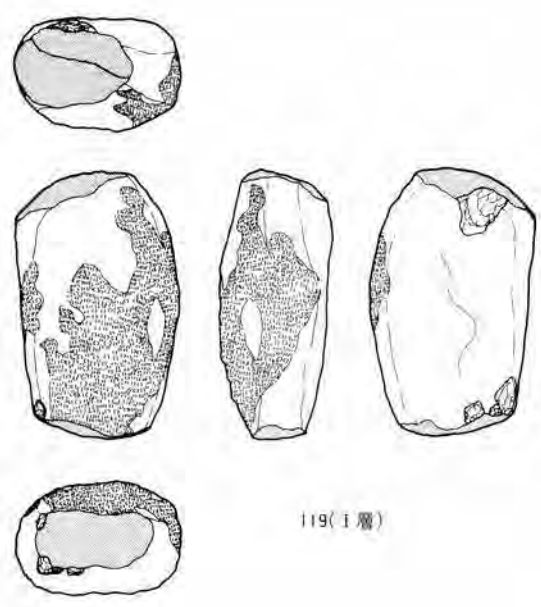
116(1層)



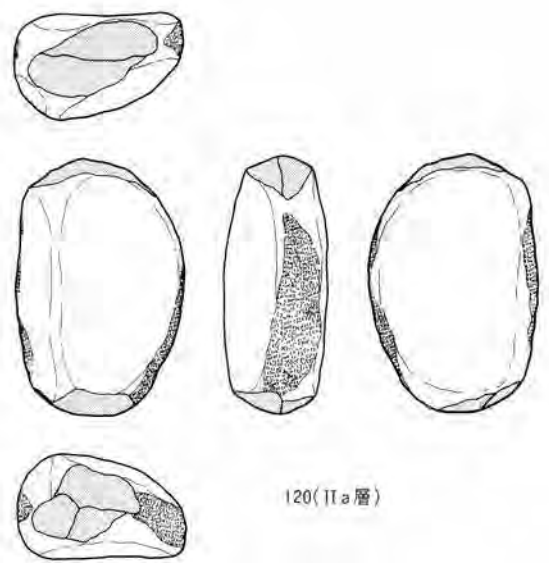
117(IIa層)



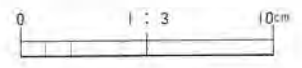
118(IIa層)



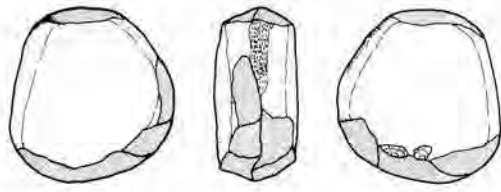
119(i層)



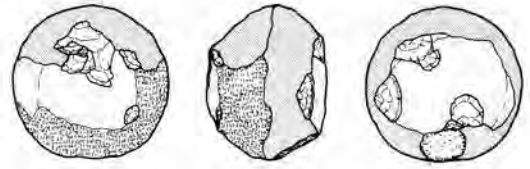
120(IIa層)



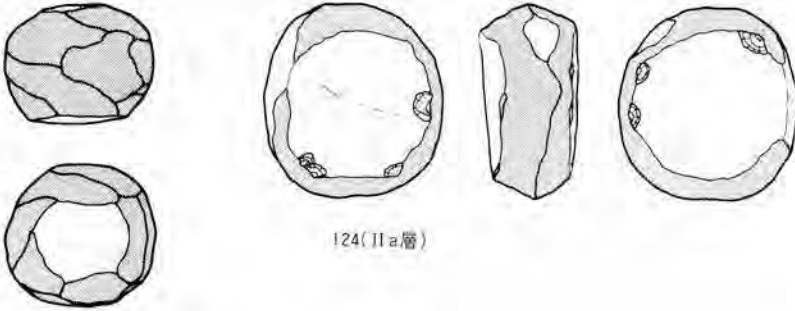
第21図 遺構外出土遺物(5)



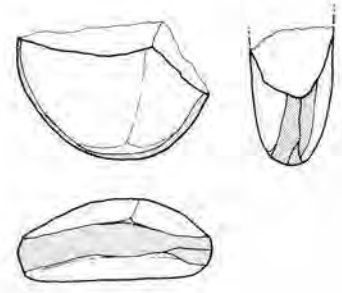
121(II a層)



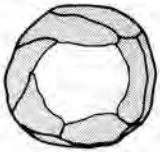
122( I層)



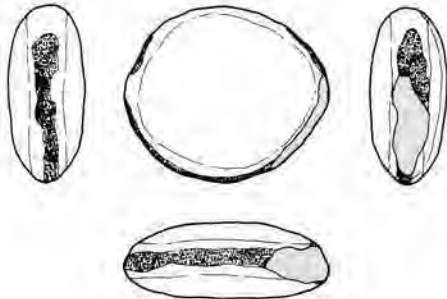
124(II a層)



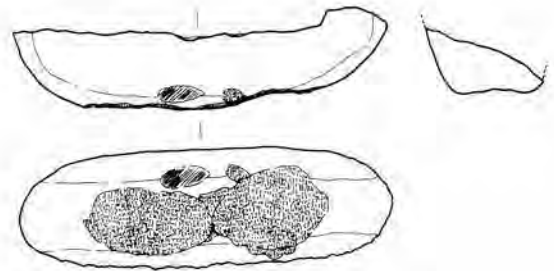
125(II b層)



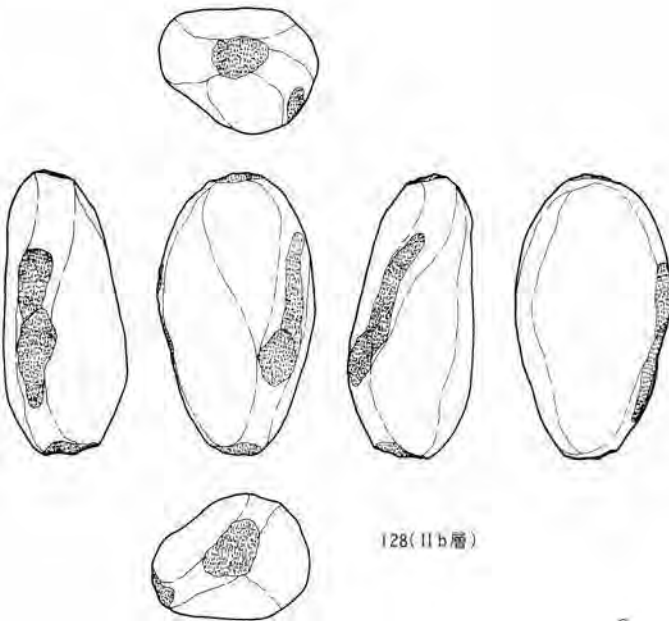
123( I層)



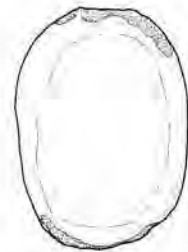
126(II a層)



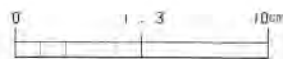
127(II b層)



128(II b層)



129(II a層)



第22図 遺構外出土遺物(6)

両面ともに使用時の剥離が伴う。

石皿

134は石皿の破片である。平坦な面を磨面としただけで縁を作り出さない。磨面には敲打痕や擦痕が伴う。

砥石

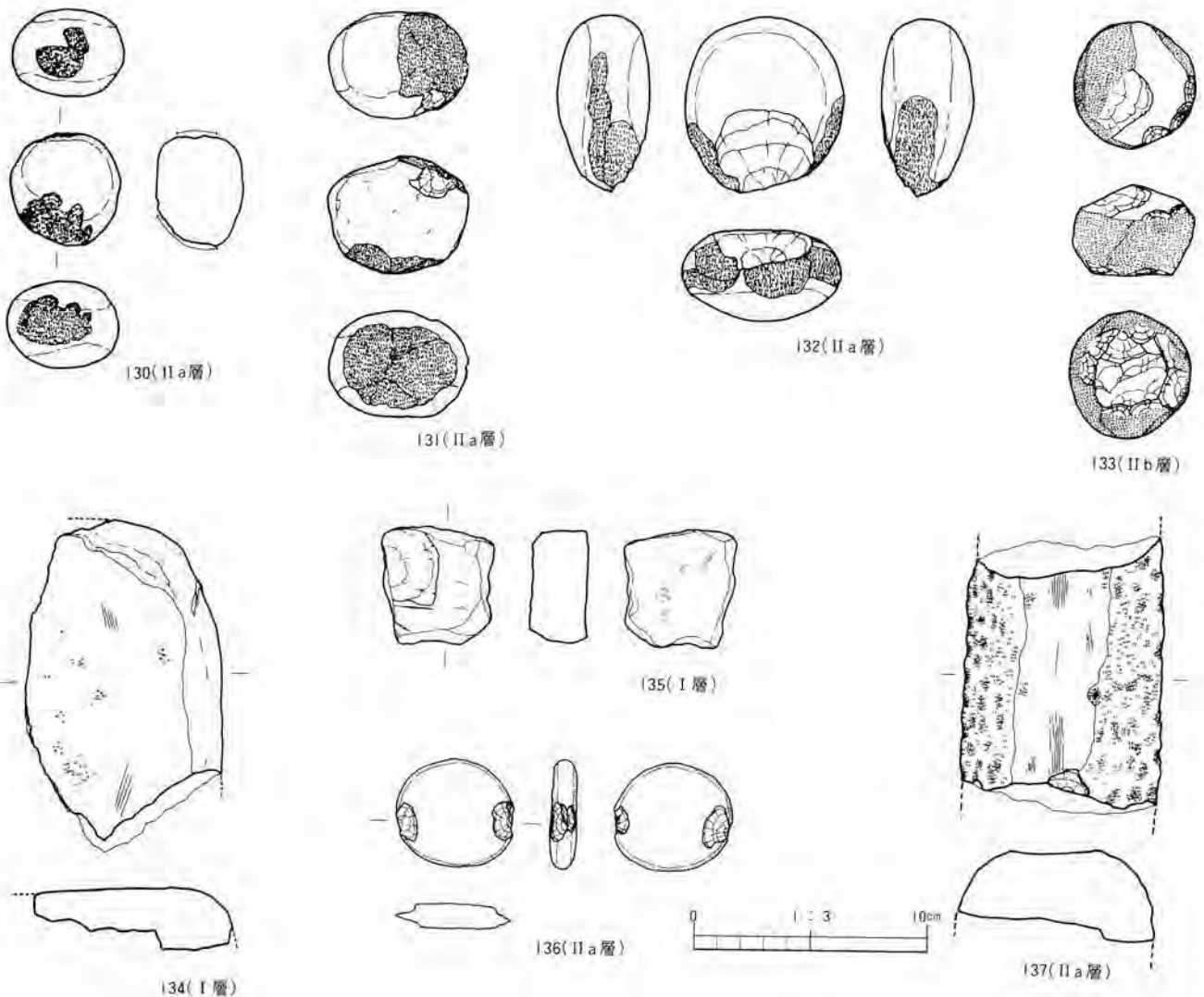
135は小さな亜角礫をそのまま使用するもので、一方の面に磨面を有し擦痕が伴うほかわずかな敲打痕が伴う。もう一方の面は剥離を伴う自然面であるが、この面も使用されており擦痕が認められる。

石錘

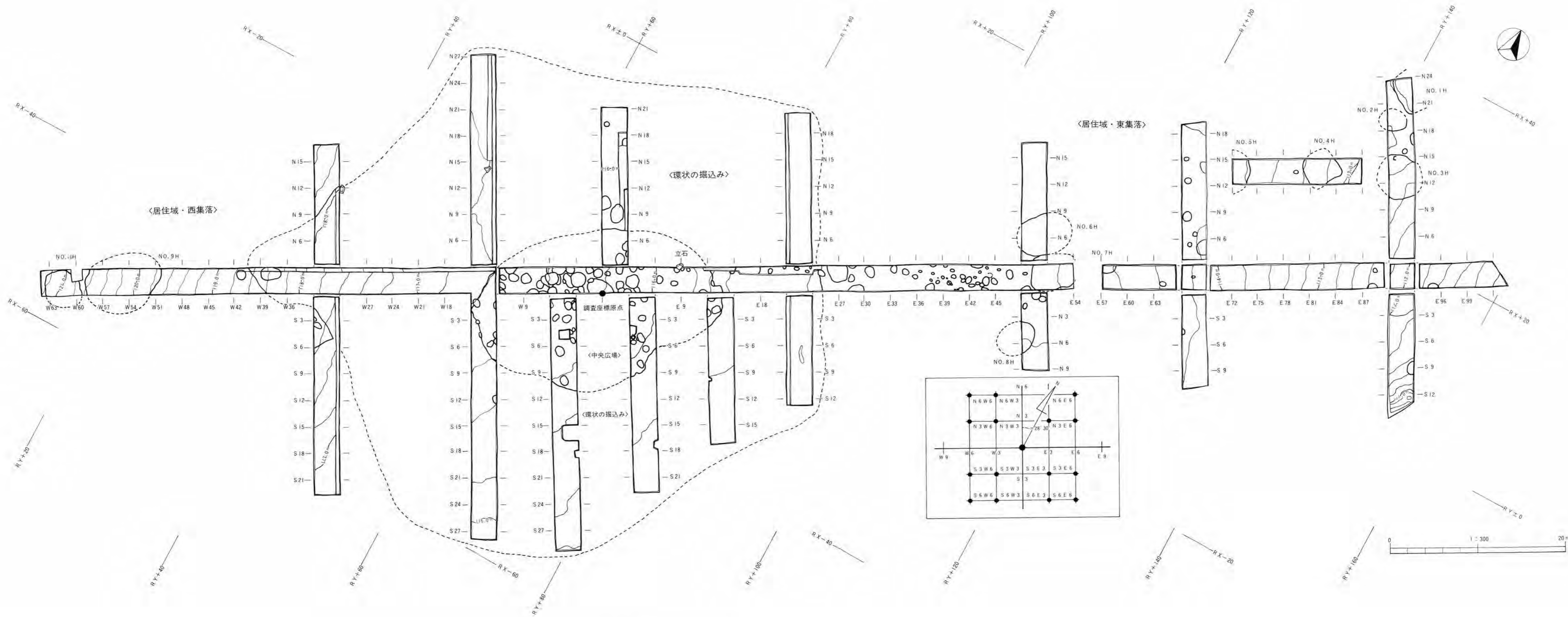
136は扁平円礫を使用する石錘で、長軸の両端部を両面から剥離させている。長径5.0cm、短径4.6cm、幅1.1cm、重量47.2gで、扁平円礫のAグループに含まれるサイズである。

石製品

137は石棒の体部片である。上下両端を欠くほか裏面も剥離している。表面中央部に幅3.5cmの凹んだ磨面を有し、擦痕が伴う。この両側には成形時の敲打痕が比較的密に施されている。



第23図 遺構外出土遺物(7)



第24図 崎山貝塚中央部遺構配置図





### 3 崎山貝塚第7次調査

#### (1) 調査の方法と目的

本年度は岩手県教育委員会文化課の指導のもとに台地中央部と北斜面西端部に調査区を設定した。前者は中央広場の形状と範囲を確定させることを目的とし、後者は北斜面西端部付近での遺物包含層のあり方を調査するとともに遺跡の範囲を探ることを目的とした。

台地中央部では遺跡中軸線に直交して、W6S3～W6S30、E6S3～E6S24、W15S3～E15S18のトレンチ3本を設定した。

また、北斜面西端部では等高線に合わせて3×5mと2×5mのトレンチを設定した。

#### (2) 台地中央部（第25図、第26図）

##### (a) 基本層序

本調査区に堆積する土層はⅠ層～Ⅲ層であり既に報告済なので詳述を避ける。

##### (b) 遺構の検出状況

いずれのトレンチも北半部～北端部に地山面があらわれるが、この部分が中央広場に相当する。かわって、南半部には環状の掘込みの埋土である黒褐色土層が広く堆積している。

今回の調査により中央広場が、長軸29m、短軸18mの不整だ円形を呈し、周囲を環状の掘込みがとり囲むことが確定した。

また、中央広場にて新たに21基の土壇跡を検出した。

##### (c) 検出された遺構・遺物

土壇跡は4基を断ち割っているため、これらについて記述する。

##### S6E6-1号土壇跡（第25図）

中央広場の地山面上で検出した。検出面でS6E6-2号土壇跡を切るほか、底面付近でS9E6-1号土壇跡を切る。

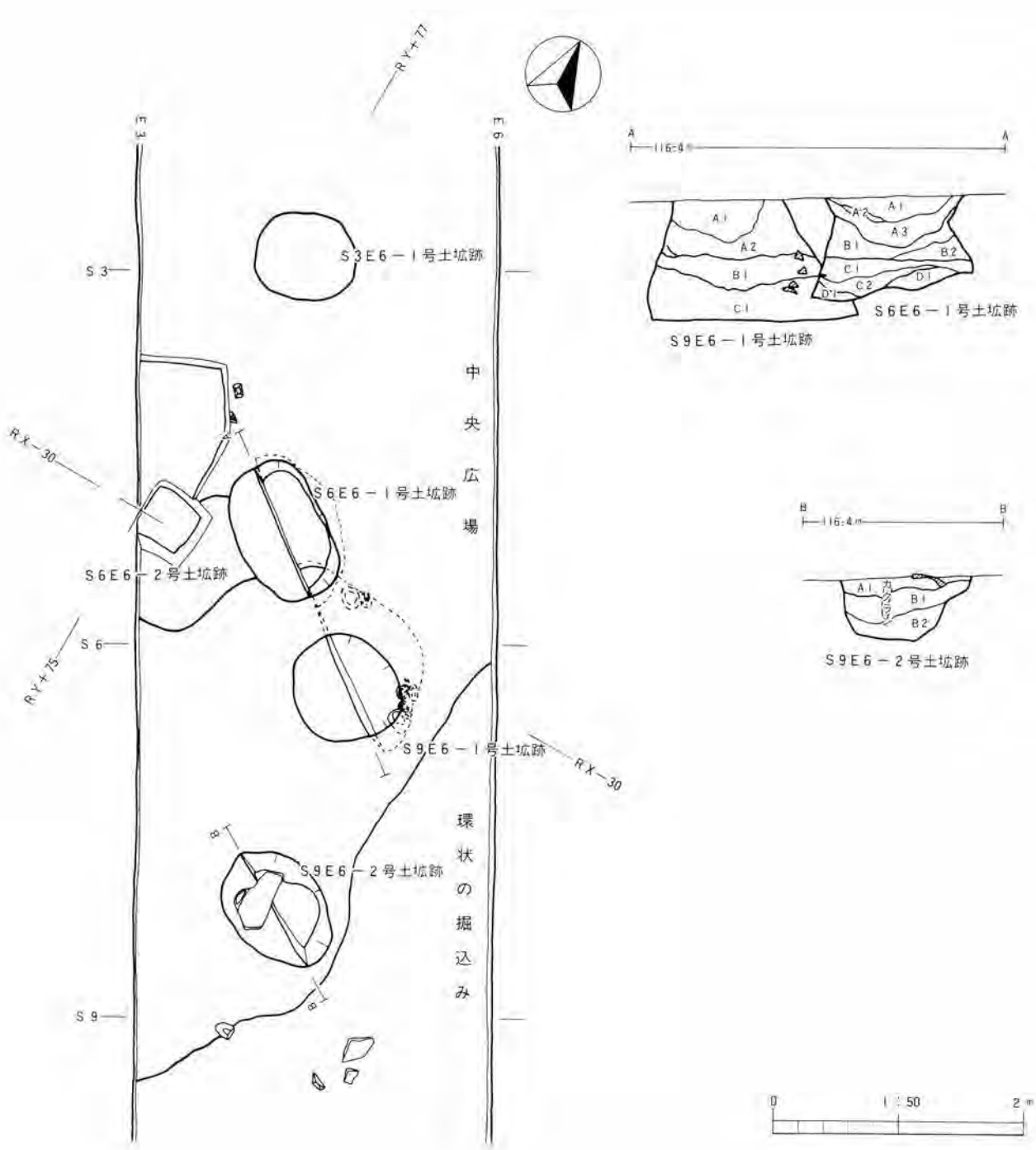
開口部の平面形は、だ円形を呈し、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.8mを計る。底面もだ円形を呈するようで、長径1.3m、短径0.5m以上（1.0m程度か）を計る。

断面形は頸部にくびれを有するフラスコ形を呈する。底面はやや凹凸があるが、やや固い。

埋土はA層・B層・C層・D層に大別されるが、明るい層と暗い層が互層となり堆積している。

A層は暗褐色粘質土を基本土とする層で、A<sub>1</sub>層とA<sub>2</sub>層は黒褐色土塊を含むほか、炭化物粒を含む。A<sub>2</sub>層は黒褐色土塊を含まず炭化物粒の混入量もすくない。いずれの層も固さ、しまり具合とも中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とする層で、暗褐色土塊などを含むほか、炭化物粒をわずかに含む。B<sub>2</sub>層はB<sub>1</sub>層よりやや明るく混入土の量も少ない。いずれの層もやや固く、しまり具合は中程度である。



第25図 S3E6～S12E16グリッド平面図

C層は暗褐色粘質土を基本土とする。C<sub>1</sub>層は褐色土塊などを少量含むが、C<sub>2</sub>層は黒褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も炭化物粒を含み、固さ、しまり具合ともに中程度である。

D層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含むほか、炭化物粒をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

#### 出土遺物（第28図）

出土遺物は極めて少ない。縄文土器片はわずかに出土しているが、いずれも器面が著しく磨滅しており図示できなかった。

36は埋土から出土した石鏃で、わずかに凹んだ平基の三角鏃である。両面ともに主要剥離面を残すが、特に裏面で著しく、先端部でバルブを取り除くように剥離させたほかは、周縁を小さな剥離で調整しただけである。

#### S 9 E 6 - 1号土坑跡（第25図）

中央広場の地山面上で検出した。底面付近でS 6 E 6 - 1号土坑跡に切られる。

開口部の平面形は不整円形を呈し、径0.8~0.9、深さ0.95mを計る。底面は不整だ円形を呈するようで、長径1.65m、短径0.65m以上（1.4m程度か）を計る。

断面形は開口部から底面へオーバーハングするフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層・C層に大別される。

A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。A<sub>1</sub>層はA<sub>1</sub>層よりやや暗く、やや固い。しまりは両層とも中程度である。

B層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。固さしまり具合ともに中程度である。壁際に礫の集積がみられた。

C層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒をわずかに含む。固さしまり具合ともに中程度である。B層に連続して壁際に礫の集積がみられた。

#### 出土遺物（第29図・第30図）

やはり出土遺物は極めて少ない。縄文土器片はいずれも磨滅しており図示できなかった。

46・47はB層~C層の礫が集積したところに含まれていたものである。

46は石皿で、良く使い込まれ両面に凹んだ磨面を有する。磨面には擦痕と敲打痕の集中するところが認められる。47も石皿であり、一方の面に磨面があり全面的にまばらに敲打痕が認められるが、部分的に敲打痕が集中するところもみられる。擦痕はほとんど認められない。

#### S 9 E 6 - 2号土坑跡（第25図）

中央広場の縁辺部で環状の掘込みとの境界付近に検出した。検出面は地山面である。重複する遺構はない。

開口部の平面形は、だ円形を呈し、長径1.05m、短径0.75m、深さ0.5mを計る。

主軸方向はW20° 10' ではほぼ中央広場の中心部を向いている。また、北西部の検出面からA<sub>1</sub>

層にかけて、長径0.5m、短径0.3mの扁平亜角礫が含まれていた。

埋土はA層とB層に大別される。

A<sub>1</sub>層は、やや暗い褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むほか炭化物粒をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を少量含むほか炭化物粒をわずかに含む。B<sub>2</sub>層はB<sub>1</sub>層より混入土の量が少ない。いずれの層もやや固くしまり具合は中程度である。

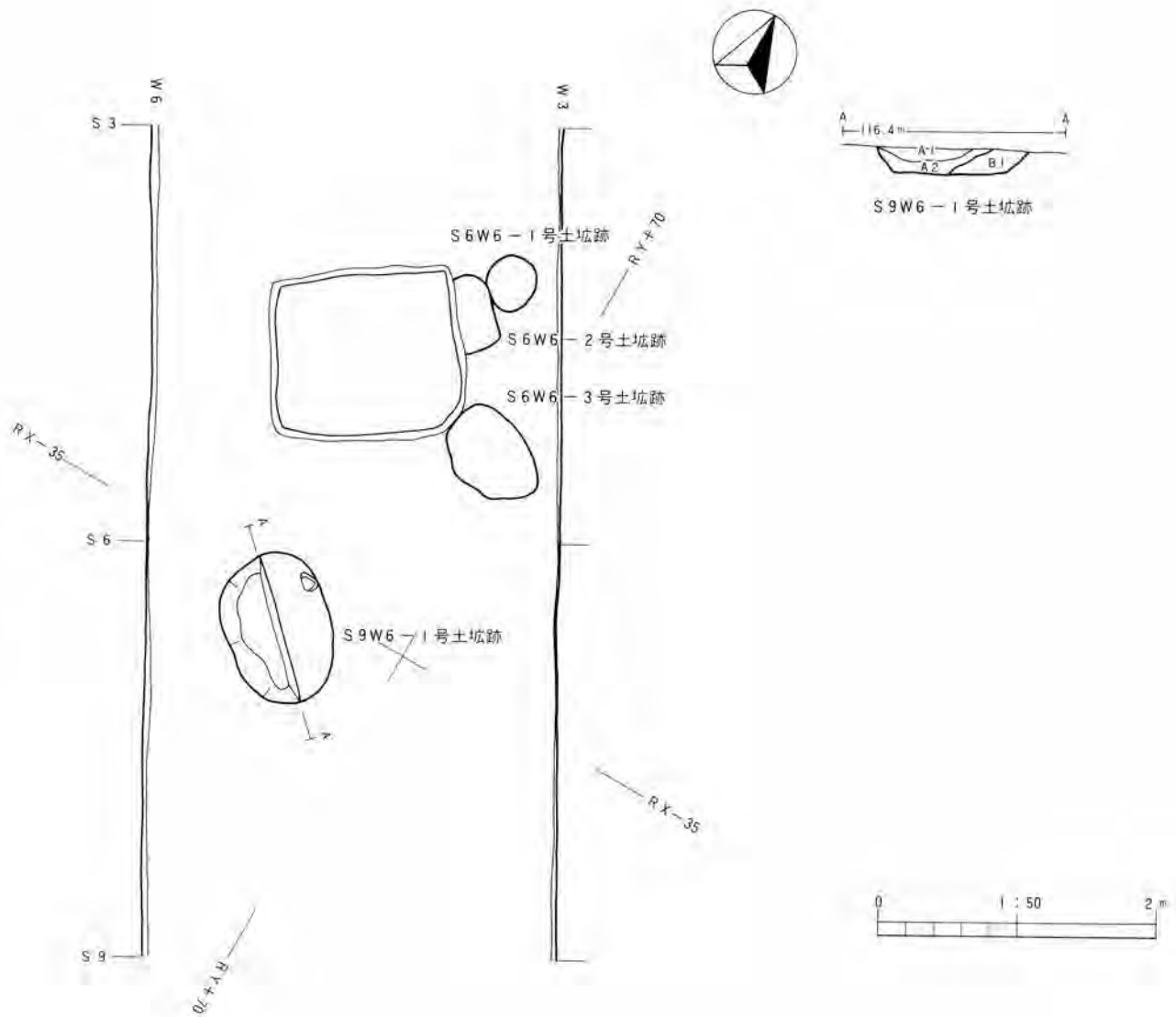
A層、B層ともに人為堆積と思われる。出土遺物はない。

### S 9 W 6 - 1号土坑跡 (第26図)

中央広場の地山面上で検出した。重複する遺構はない。

開口部の平面形は、だ円形を呈し、長径1.1m、短径0.75m、深さ0.18mを計る。

主軸方向はW40° Nで中央広場の中央よりかなり西に偏したところを向いている。出土遺物



第26図 S 6 W 6 ~ S 9 W 6 グリッド平面図





第27図 第7次調査区出土遺物(1)

はない。

埋土はA層とB層に大別される。

A層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。A2層はA1層よりやや明るい。両層とも固さしまり具合とも中程度であり炭化物粒をわずかに含む。

B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。炭化物粒を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

#### 出土遺物（第27図～第30図）

台地中央部から出土した遺物は縄文時代中期中葉（大木8b式）～後期に伴うものであるが出土量は極めて少ない。特に土器と剥片石器が少ない。

#### 土器（第27図）

5は磨消技法により施文されるものであるが、口縁部に縄文帯を施すことなどから縄文時代後期に伴うものであろう。

1・2・4・6も磨消技法によるものであるが、縦位の縄文区画文を施し、大木9式に伴う

3は器面が磨滅しており、平行沈線か帯縄文か判別がつかないものである。

7～18は隆沈線により施文されるものである。口縁部は内湾するものと外反するものの2種がある。いずれも大木8b式に伴う。

#### 石器（第27図～第30図）

##### 石 鏃

37はやや膨らみを持つ三角鏃である。基部は平基であるが、やはりわずかに膨らみを持つ。両面ともに丁寧に調整されており主要剥離面を残さない。

##### 削 器

38は小形ではあるが、両側縁を調整して刃部を作り出す。上端に打面を残し、裏面も主要剥離面を残している。

##### 搔 器

39はやや軟質の石材を用いるが、下端に調整を加えて鈍い角度の刃部を作り出している。また、基部付近にも両面から調整を施すものの刃部を作り出すものではない。裏面の節理面には擦痕が認められる。

##### 磨製石斧

31～34は磨製石斧である。31・32は中央部から欠損した刃部破片である。いずれも丁寧に研磨されている。32は上端に欠損後の剥離に伴う、33・34は基部破片であるが、器面全体に敲打痕と剥離がみられるのみでほとんど研磨されていない。敲打成形時のものか。

##### 打製石斧

35は打製石斧で、磨製石斧に比してやや大形である。側縁から刃部にかけてやや大き目の剥離により調整されている。刃部はやや片刃状を呈している。側縁にはわずかに敲打痕が伴う。

##### 敲打磨石

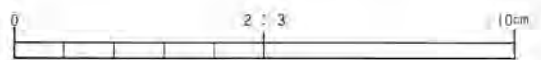
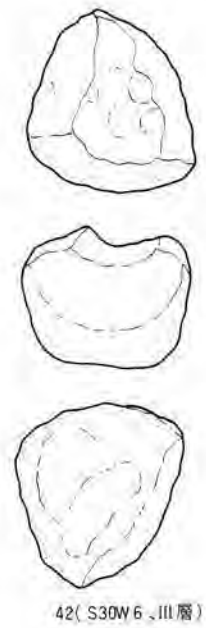
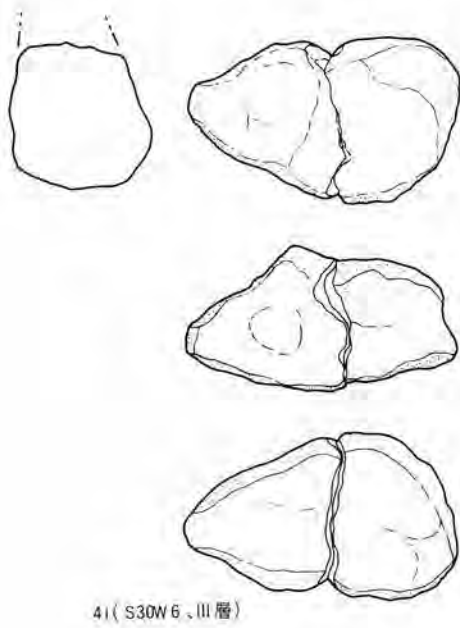
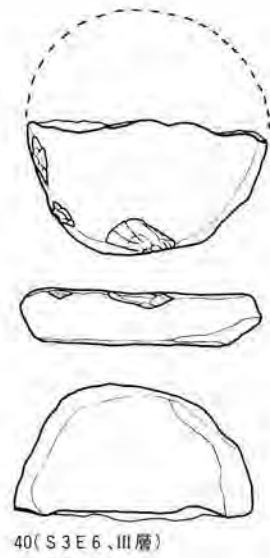
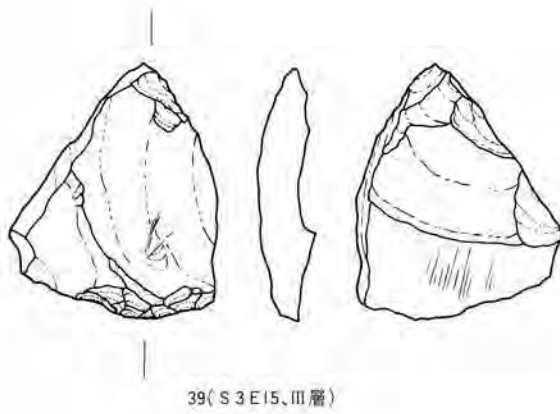
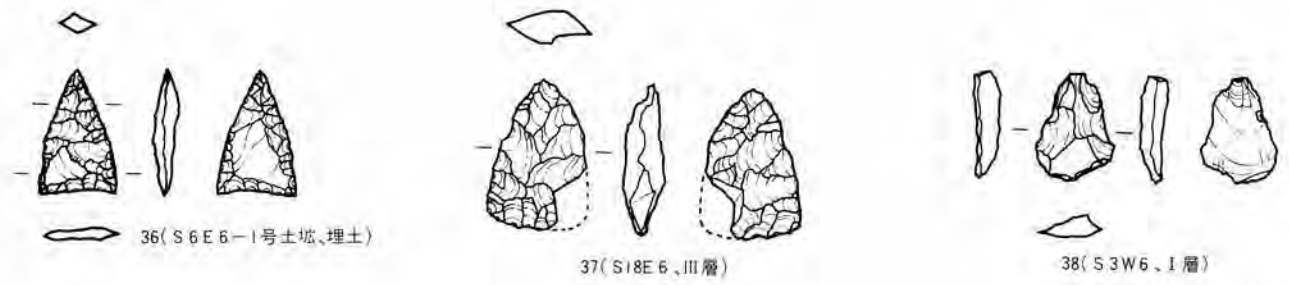
43・44は敲打磨石である。43は扁平礫の一側縁を機能磨面とするものである。機能磨面の幅は1.3cmであり調整剥離が伴っている。44は長だ円形礫の長軸方向の一端部を敲打し、これに接して敲打磨面を有するものである。

##### 石 皿

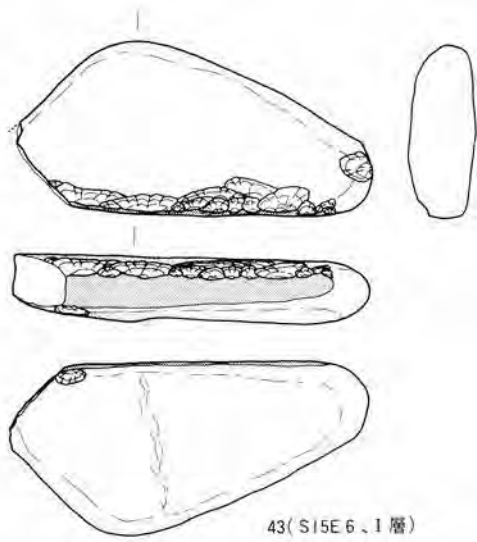
48は石皿片であり、両面に磨面を有する。一方の磨面はほぼ平坦であるがもう一方の磨面はやや凹んでいる。敲打痕や擦痕が伴っている。

##### 砥 石

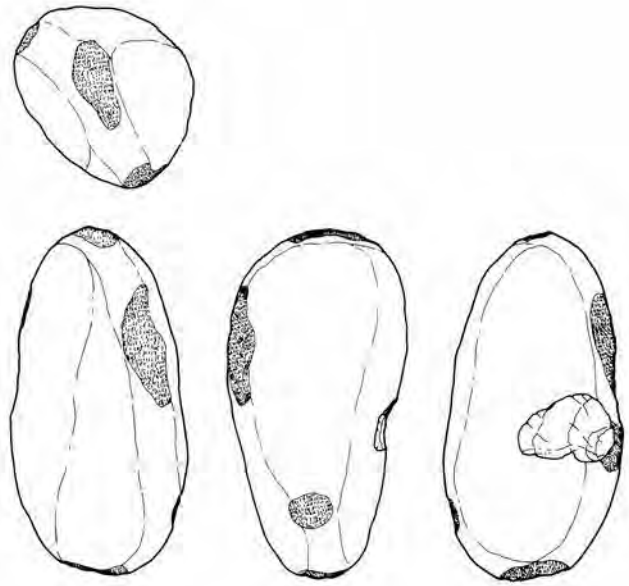
49～54は砥石である。49・50はやや大形であるが、51～54は小形である。いずれも磨面を有し、擦痕や溝状の使用痕がみられる。また、部分的に敲打痕を伴うものもある。50は石棒か石皿の欠損品を再利用したもので、一方の面にやや凹んだ磨面を有している。



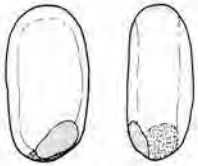
第28図 第7次調査区出土遺物(2)



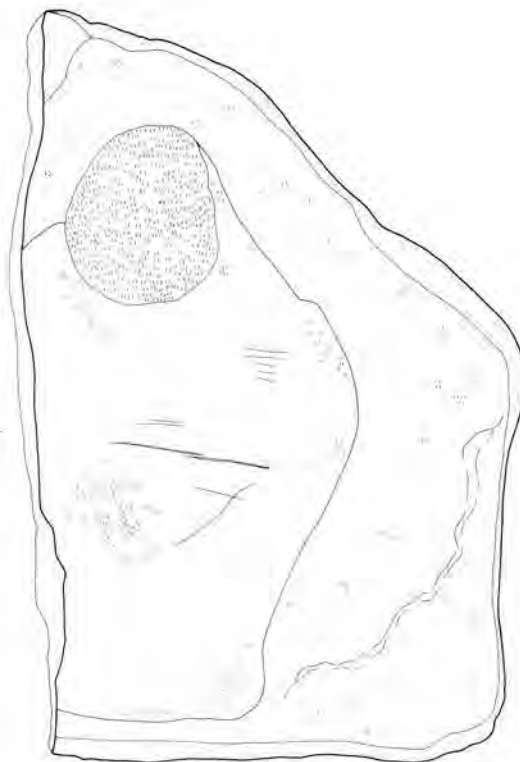
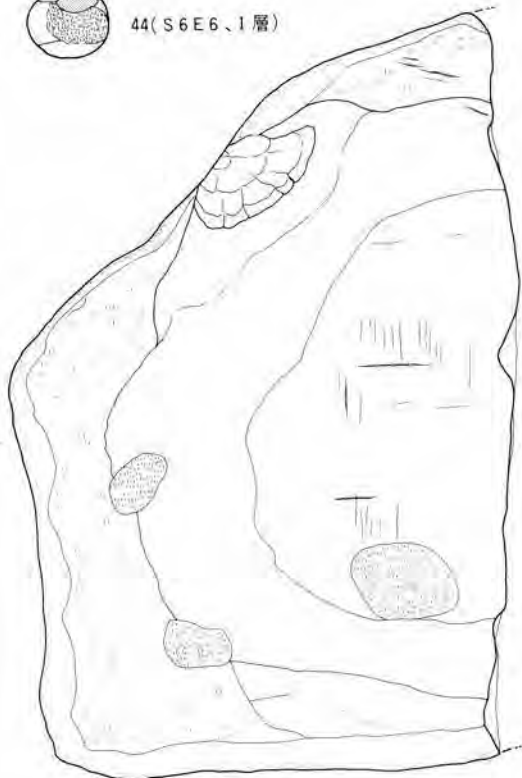
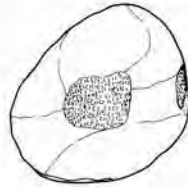
43(S15E6、1層)



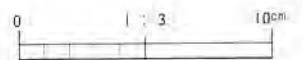
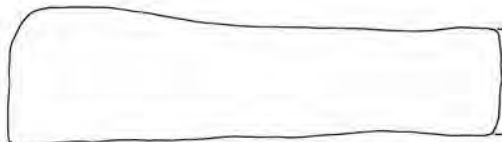
45(第6次調査区、1層)



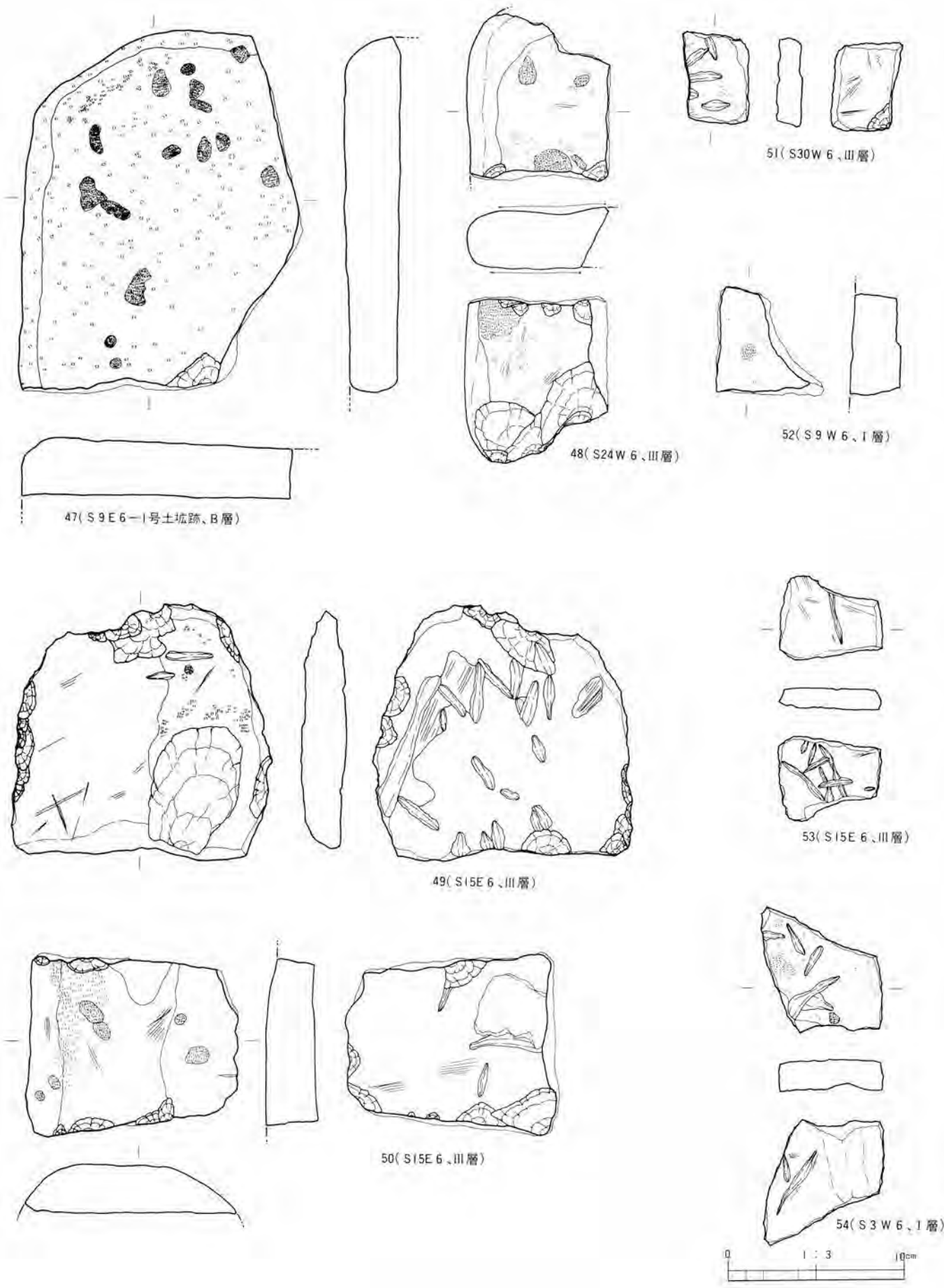
44(S6E6、1層)



46(S9E6-1号土坑跡、B-C層)



第29図 第7次調査区出土遺物(3)



第30図 第7次調査区出土遺物(4)



焼成粘土塊

土製品 (第28図)

41・42は焼成粘土塊である。調査時は3点であったが2点が接合している。いずれも胎土、焼成具合ともに類似している。接合面はやや平坦であることから、本来は径3cm程度の小塊をいくつかまとめて接合したものであろう。道具として目的的に作られたのかどうかは疑しい。

石製円盤

石製品 (第28図)

40は直径4.9cm、厚さ1.0cmの扁平礫の周縁を擦る石製円盤である。

(3) 北斜面西端部 (第31図)

北斜面西端部では地形に合わせて東西2本のトレンチを設定した。それぞれEトレンチ、Wトレンチと呼称する。

(a) 基本層序 (第31図)

本調査区内に堆積する土層はI層、II層、III層、IV層、V層に大別される。

I層は表土層で、暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがない。

II層は2層に細分される。II a層は、ややシルト質の褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含む。柔らかくしまりがない。Eトレンチにのみ堆積する。II b層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。柔らかくややしまりがない。Wトレンチのみに堆積する。

III層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや柔らかくしまりがない。遺物包含層で、Eトレンチにのみ堆積する。

IV層は、やや明るい暗褐色粘土質を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。下面はV層へ漸移的に移行する漸移層である。

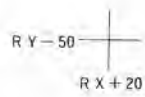
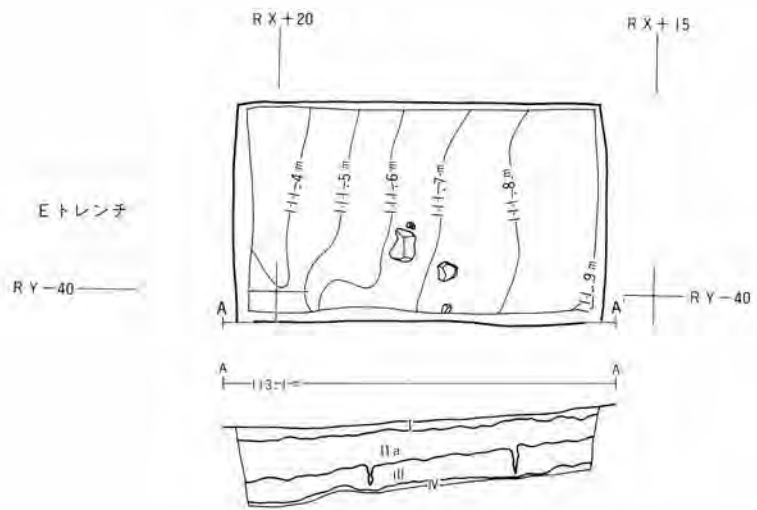
V層は地山層で、ややシルト質の褐色土を基本土とする。

(b) 検出された遺構、遺物 (第27図)

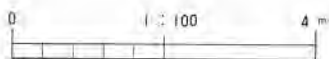
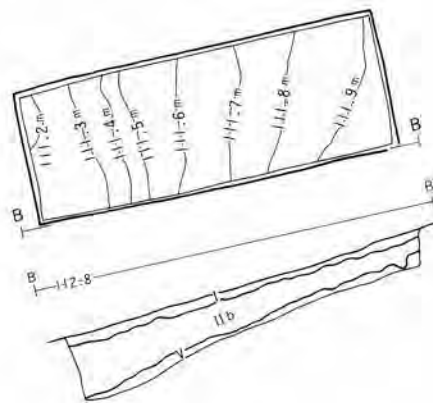
本調査区内で遺構は検出されなかった。出土遺物は、EトレンチのIII層から若干の土器片が出土したほか、WトレンチのII b層からもわずかに土器片が出土している。

25、26はWトレンチのII b層から出土したもので、いずれも磨消技法により施文される。25は口縁部がほぼ直立する深鉢で、口縁部を無文帯とし、体部に「L字形」または「逆丁字形」の縄文区画文を施す。大木10式に伴う。2は全体のモチーフが判然としないが、大木9式～大木10式に伴うものであろう。

27～30はEトレンチのIII層から出土したものである。27は隆起線上に円形押捺を連続させるもので、30は平行沈線により施文されるものである。両者ともに大木8 b式に伴う。28はキャリパー形深鉢かと思われ、口縁部に隆起線による長だ円形の区画文を施し、内部を縦位の原体圧痕文で充填している。大木8 a式に伴う。29は撚糸文を地文とするものである。



W トレンチ



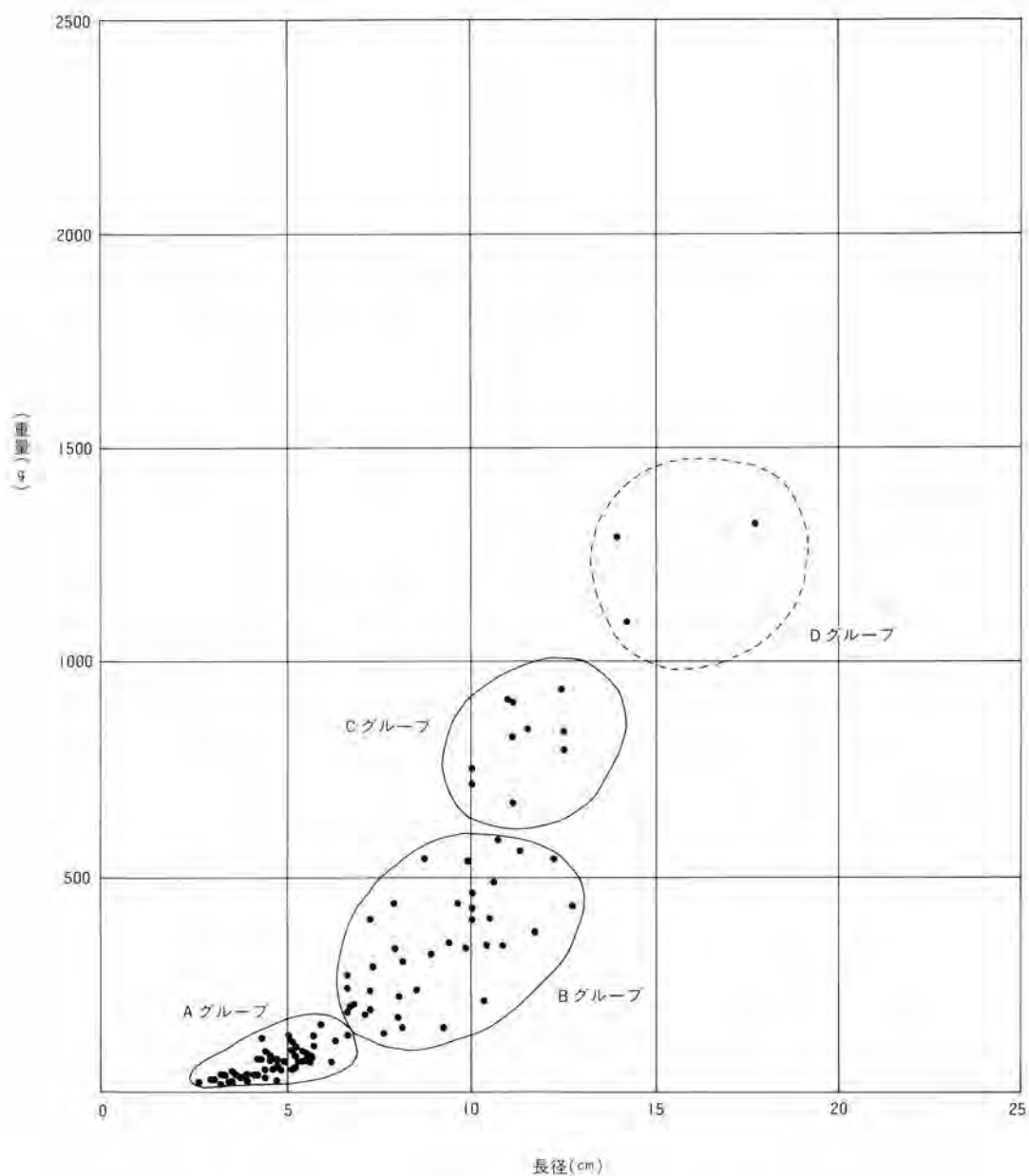
第31図 北斜面西端部調査区設定図

#### 4. 扁平円礫について（第32図・第33図）

今年度も調査区内から多数の扁平円礫が出土している。第6次調査区から出土した総数は、343点であるが、このうち縄文時代中期末葉の大木10式期に伴うとみられるⅡ層出土の資料124点を図表化したのが第32図である。

今までの所見に類似し、下位よりAグループ、Bグループ、Cグループと3つのまとまりが確認される。

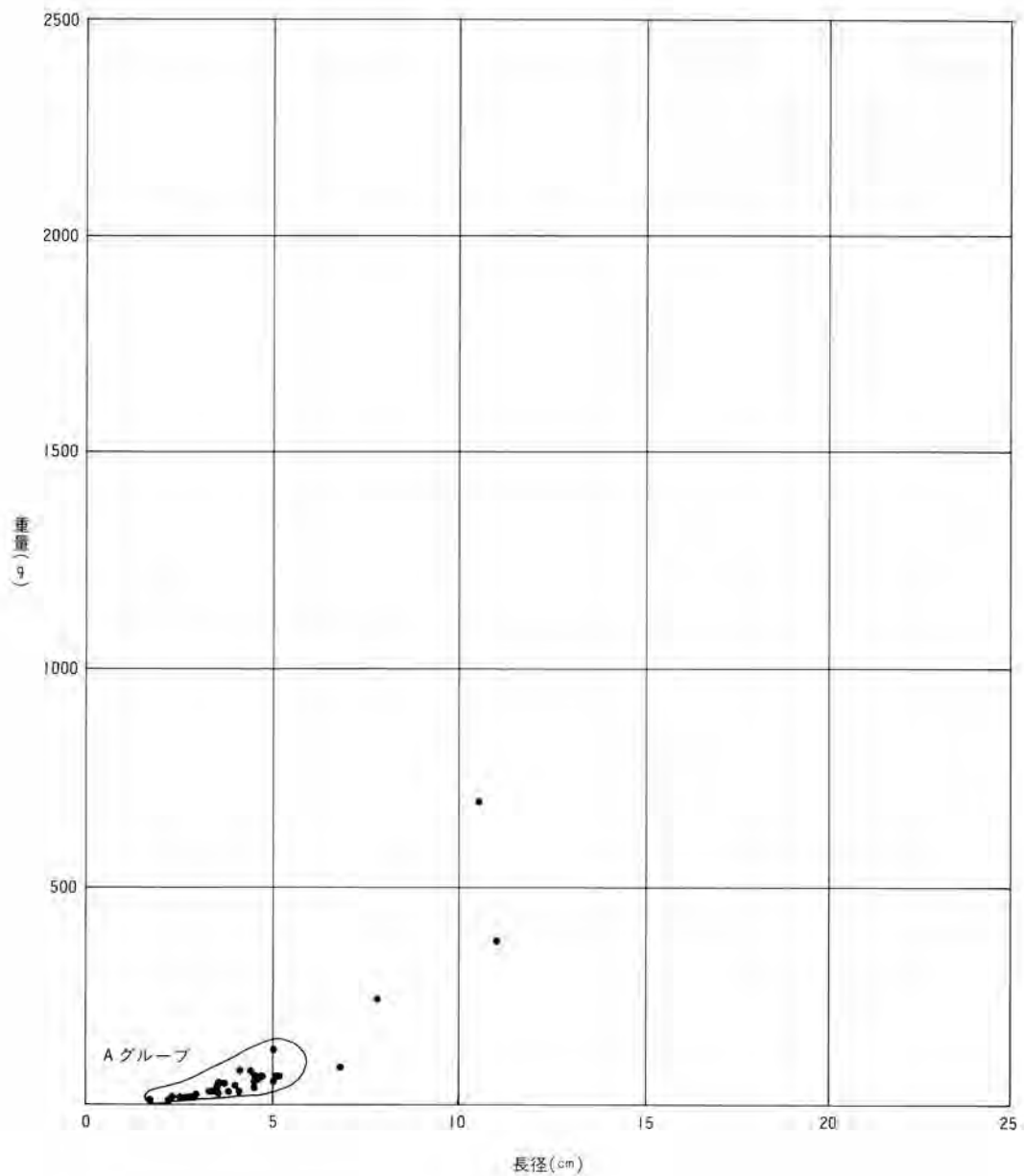
ただし、Dグループについては数が少なく分布範囲が不明瞭であった。



第32図 崎山貝塚第6次調査区出土扁平円礫

第7次調査区のうち台地中央部のⅢ層から出土した39点を図表化したものである。縄文時代に伴うものではあるが、やや時間幅があるかもしれない。

Aグループには集中した分布がみられるものの、上位のグループのものはほとんど含まれていない。



第33図 崎山貝塚第7次調査区（大地中央部）出土扁平円礫

### Ⅲ 調査のまとめ

今年度は第6次調査（個人住宅建築に先だつ緊急調査）と第7次調査（範囲確認調査）の2件を実施し、その内容は前述したとおりである。

ここでは各調査地点毎の遺構群に解れながら崎山貝塚の集落構成について述べることにする。

#### 崎山貝塚第6次調査

隣接する昭和60年度調査区から竪穴住居跡が検出されなかったことや、周辺がやや斜度のあつた傾斜面だったことから、当初は遺物包含層の堆積状況を探ることを目的として調査を開始した。ところが、調査の結果予想に反して竪穴住居跡が検出されたことにより、第6次調査区周辺まで居住域（西集落）が広がっていることが判明した。

第12号竪穴住居跡は、炉石とともに埋設された土器片や埋土最下層（C層）の土器が大木8b式の最終段階に伴うものであることから、この時期に作られた遺構であると思われる。

また埋土の遺物（B層～A層）には磨消技法による大木9式の破片を含んでおり、使用時～廃棄直後と埋土堆積時に型式差が認められた。

本住居跡で特筆されるのは、炉が中央広場を向いていることであり、集落全体がある一定の規則性を持って構成されている可能性が指摘できる。

尚、本住居跡の炉は石組炉に前庭部を伴つた石組複式炉であり、宮古市トロノ木I遺跡や石鳥谷町大地渡遺跡などの報告例とも矛盾はしない。（註1）

第11号竪穴住居跡は、埋土遺物から大木8a式の新段階に伴うものと思われる。但し、第12号竪穴住居跡の例を見ると造られた時期はやや上る可能性もある。全堀していないために、主軸方向が中央広場を向くのか、これと直交するのかは判断できなかった。

第13号竪穴住居跡は付属施設を検出していないので住居跡とできるかどうか確定はできない。埋土中から大木10式に伴う土器片が出土している。

これらの遺構はすべてⅡ層に覆れている。Ⅱb層からは数が少ないものの大木10式に伴う土器が出土しており本層中の最新型式となっている。第17図1は丹羽の分類した大木10式第Ⅲ段階に相当する。

#### 崎山貝塚第7次調査

本調査は中央広場南辺の確定と環状の掘込みの範囲を探ることを目的とした。調査の結果、中央広場は長軸29m、短軸18mの不整だ円形を呈し、この周囲を環状の掘込みがとり囲むことが確定した。

また、中央広場にて精査した土壇跡のうちフラスコ形土壇を除くS9E6-2号土壇とS9W6-1号土壇跡は、規模や形状と埋土の堆積状況が人為的堆積と考えられることから墓壇跡である可能性が大きいと言える。

また、S9E6-2号土壇跡の最上部に大きな礫が伴い、主軸方向がほぼ中央広場の中心部を向いている点が特筆される。





第34図 崎山貝塚集落構成模式図



北斜面西端部に設定したトレンチでは、わずかではあるが遺物が包含されていたことにより遺物包含層が続いていることが判明したが、Eトレンチの東30～40mの地点では多量の遺物が表面採集されていることを考えると、本調査区は縁辺部の様相を呈していると言えそうである。

次に、これまでの調査により判明した崎山貝塚の集落構成について述べる。(第34図・第35図参照)

崎山貝塚は、地形的に3分類することが可能である。つまり、第一は台地頂部の平坦面であり、第二はこれを取り囲む斜面部であり、第三は更に外側の低湿地である。崎山貝塚の集落構成もほぼこれと対応しており、台地頂部に集落跡、斜面部に貝塚や遺物包含層が形成されている。低湿地については、水のみ場や堅果類などのアク抜き場等々の想定はできるものの、遺構や包含層として確認しているわけではない。

#### 〈集落跡〉

台地の中央部に長軸29m、短軸18mの不整だ円形を呈する地山面があり、中央広場と呼称している。面積は約500㎡程度で、東寄り(遺跡のほぼ中軸線上)に高さ1mの立石が立っている。

中央広場

また、この地点で現在80基を超える土坑跡を検出している。このうち7基を精査しており次の3種の土坑跡を確認している。

①やや大形で、断面形がフラスコ形を呈するものが4基あり、このうち大木10式期のものが2基ある。埋土下層にムラサキインコガイを主体とする貝層を伴うものもある。

②長軸1.0m程度のだ円形を呈するものが2基ある。今年度調査したS9E6-2号土坑跡とS9W6-1号土坑跡が相当する。

③径0.5m程度の円形を呈する皿形の土坑跡が1基ある。

①については従来貯蔵穴と考えられて来たものであるが、大木10式期に伴うものが主体を占め、後述するように集落跡が主に営まれた時期には伴わないようである。③については性格不明である。

問題となるのは②のタイプであり、今回精査したもののほかに形態が類似するものや、配石状の礫を伴うものはS3W15-1、S6W15-1～3号土坑跡等がある。(いずれも検出のみ)。また長軸方向が広場の中心部を向くものもある。これらの土坑群は従来墓坑跡と考えられて来たものに類似する。例えば、紫波町西田遺跡の集落中心部に放射状に検出された土坑群や、一戸町御所野遺跡の集落中心部に検出された配石遺構や小判形土坑などがこれに相当する。

崎山貝塚の場合も、中央広場に本来伴う土坑はこうした円形の墓坑群であると思われ、同じく中央広場に存在する立石とも符号してくる。

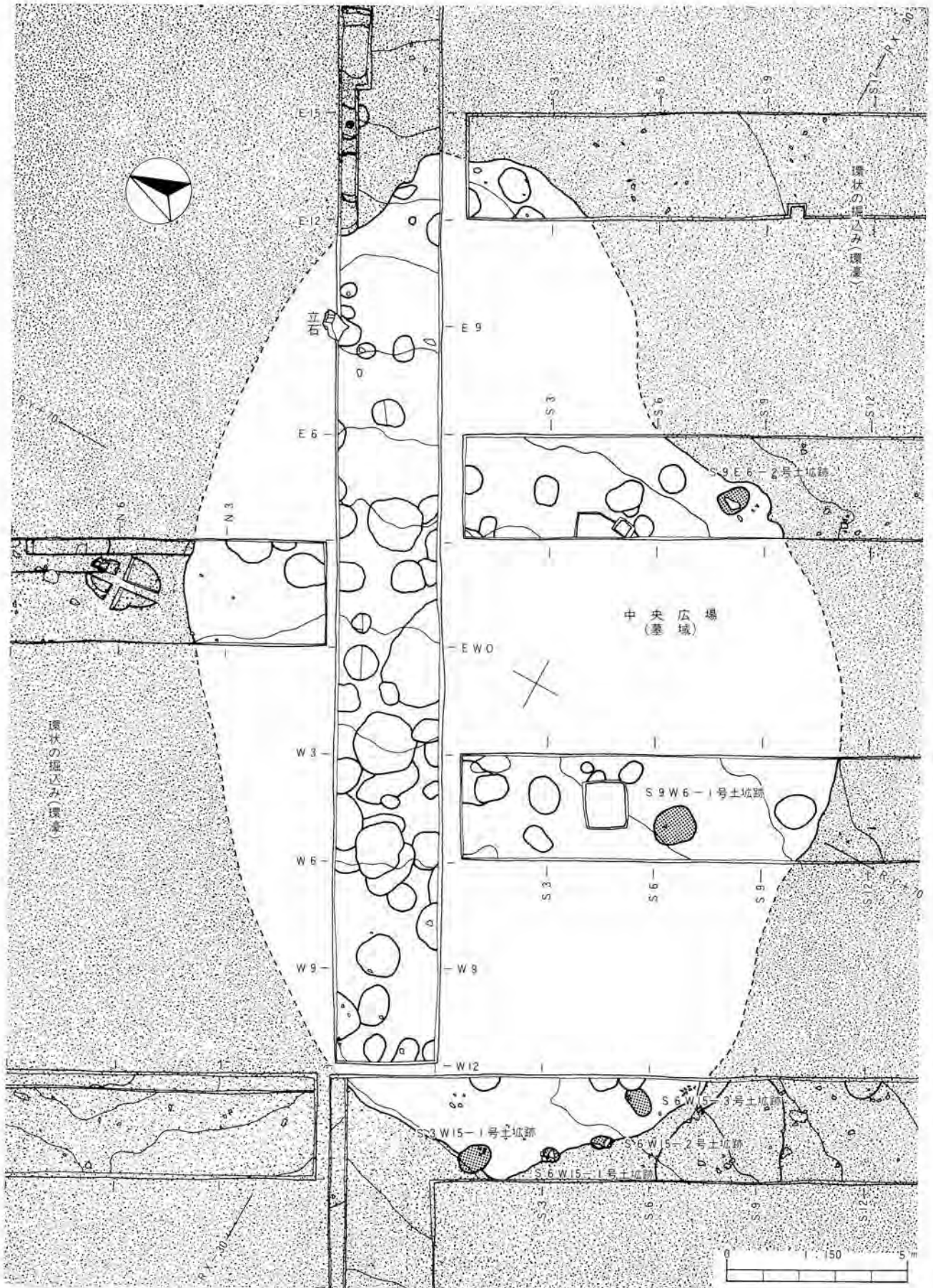
従って、崎山貝塚の中央広場は本来は立石を伴う墓域であり、①タイプのフラスコ形土坑は集落が廃棄されて行く過程で二次的に形成されたものであると考えられる。

立石を伴う墓域

中央広場(墓域)の外側には幅12～26m、深さ1.2mの環状の掘込みがめぐっている。平成2年度の調査により人為的な遺構であることが確認されている。壁は約45°ほどに立ち上がり底面は中央部に向けてゆるやかに傾斜している。また、埋土は多くの混入土や炭化物粒のほか

環状の掘込み





第35図 崎山貝塚中心部遺構配置図

ドングリ廃棄ブロックなどが形成され、人為堆積の様相を呈している。

遺構の構築された時期は、大木8 a式以前である。大木8 a式末葉～大木8 b式初頭にかけて、遺構が埋没ははじめ凹地の状態になると、東半部を中心に柱穴状のピットが掘り込まれる。

ところで、この環状の掘込みの性格であるが、内側の中央広場（墓域）と外側の居住域を分け隔てる区画施設としての環濠と見るのが妥当であると思われる。

環濠

環状の掘込み（環濠）の外側には東西両側に竪穴住居跡が検出され、居住域を形成していたことが判明している。東側の居住域を東集落、西側の居住域を西集落と呼称している。

居住域

東集落は南北50m、東西90m以上を計る。推定される面積は4,700㎡以上である。

東集落

東集落の西部は環状の掘込み外縁から20m程度にわたり、住居跡が検出されずに柱穴状の小ピットなどが集中する地点がみられる。前述したように環状の掘込み埋土下層からも柱穴状のピットが掘り込まれており、今後両者の関係を検討してゆく必要がある。

小ピット域

この外側に現在竪穴住居跡を8棟と炉跡1基を検出している。主体となるのは大木8 b式～大木9式に伴うものであるが、第1号竪穴住居跡（N24E93-1）は古代に伴うものであり、第2号竪穴住居跡（N21E93-1）は大木7 a式に伴うものである。（註2）

西集落は東西130m以上、南北100m以上を計る。面積は正確に算定できないが、13,000㎡は超えそうである。西集落では現在5棟の竪穴住居跡を検出している。大木8 a式～大木8 b式に伴うものが主体を占める。ただし、第13号竪穴住居跡は大木10式に伴う可能性がある。

西集落

第6次調査により西集落域がやや広がったことは前述したとおりであるが、第12号竪穴住居跡の主軸方向が中央広場（墓域）を向いていることから、この地点まで計画的に集落域の中にとり込んでいた可能性が指摘される。

また、集落域の規模から西集落は東集落に優先するものと思われ、調査の進行に伴いこの地点で竪穴住居跡の検出数が増加するものと思われる。今後は資料の蓄積を待つて両者の性格論に言及する必要がある。

更に、集落跡の周辺の、南北両斜面には貝塚や遺物包含層が形成されており、それぞれ南貝塚、北貝塚と呼称している、南貝塚は縄文時代前期を主体に形成されたものである。既に報告済なので詳述を避ける。北貝塚については、来年度調査を予定しているので改めてまとめることにしたい。

以上、崎山貝塚の集落構成は中心部から中央広場（立石を伴う墓域）、環状の掘込み（環濠）、居住域（東集落、西集落）と同心円状に三重構造をとることが判明した。ただし、居住域に関しては台地頂部に十分な平坦面が無いことから、地形に制約される形で、東部と西部のみに分布し、環状とはならない。

また、東集落の小ピット域については性格が判明すれば、居住域から切り離して四重構造となる可能性も指摘できる。

ところで、環状あるいは同心円上に重層構造をとる集落としては、紫波町西田遺跡が著名である。西田遺跡の集落は主に大木8 a式期に営まれ、中心部から墓塚群、掘立柱建物跡、住居跡群、土壇（貯蔵穴）群と展開する四重構造をとることが判明している（註3）。

西田遺跡

また、最近の調査では山形県村山市西海湖遺跡や一戸町御所野遺跡からも類似する構成をと



る集落が報告されている。

#### 西海淵遺跡

西海淵遺跡の集落は縄文時代中期を中心に営まれ、中心部から広場、墓塚群、土坑、小ピット群、住居跡群と展開する四重構造をとることが判明している（註4）。

#### 御所野遺跡

御所野遺跡の集落のうち主体となるのは、縄文時代中期後半に営まれたもので、中心部には墓域と考えられる配石遺構があり、その外側を馬蹄形に住居跡がとり囲んでおり、最低でも二重の重層構造をとることが判明している（註5）。

#### 同心円状重層構造集落

この様に、縄文時代中期中葉～後半期にかけて、極めて特徴的な同心円状重層構造集落（註5）の存在することが改めて注目されてきている。これらの集落の最大公約数的な特徴は、墓域が集落の中心部を占地し、これをとり囲む居住域とは厳然として区別されているということに外ならない。そして、これは該期においてひとつの墓制が確立したことを裏づけているのであろう。しかしこれについては192基の墓塚を完掘した西田遺跡での論考（註6）があるだけで、その実態は不明であると言わざるを得ない。

更に、西田遺跡の集落構成をひとつの典型をみるならば、もがりの場と推定されている掘立柱建物跡と貯蔵穴群の存在を一応確認する必要があるものと思われる。

崎山貝塚の場合では、掘立柱建物跡については東集落の西部に検出された小ピット群や、環状の掘込みの埋土下層から掘込まれた小ピット群のうち柱痕跡をもつものがあるので、今後面的調査を実施する必要がある。また、貯蔵穴群については中央広場から環状の掘込み埋土中に検出例はあるものの、所属時期が判明するものは大半が大木9式～大木10式であり、住居跡群の主体となる時期とは型式差が認められる。むしろ、集落廃棄後（少なくとも集落構成については強い規制が働いた時期以降）に形成されたブロックと見るべきであろう。おそらくは居住域に取り込まれるかあるいは更に外側の斜面部から低湿地のどこかに集落に伴う土坑群が存在しているものと思われる。

#### 弥生時代の環濠集落

最後に、環状の掘込みについて言及したい。この施設について、墓域と居住域を区画する環濠であろうと想定したことは既に述べたところである。一般に環濠を有する集落は弥生時代の環濠集落が代表とされる。その形態は、掘込みがV字形や逆台形を呈し、集落の外縁部に施される防御施設というのが一般的なイメージであろうと思われる。

#### 縄文時代の環濠

近年、北海道苫小牧市静川16遺跡などから非常に特殊な例ではあるが縄文時代の環濠が報告されている。報告書によるとこれは縄文時代中期末の余市式期に営まれたもので、丘陵の端部に立地する竪穴住居跡2棟を上幅2mで断面形がV字形を呈する環濠が長さ138.5mにわたりとり囲んでいる（註7）。

#### 静川16遺跡

この環濠の性格について性急に結論を出すのは無理な話ではあるが、やはり集落の内と外を区画する施設（あるいは防御？）といったイメージであろうか。

崎山貝塚の例はこうしたものとは全く性格を異にしている。

第一は、集落外縁の区画施設（あるいは防御施設）ではなく、あくまでも集落内部の区画施設であるという点。

第二は、形態（特に断面形態）から内部と外部の区画はどちらかと言えば物理的なものではなく精神的なものである点。つまりこの程度の掘込みであれば特に土橋のような付属施設が無

くともいつでも容易に出入りできるということである。

この様に崎山貝塚の環状の掘込み（環濠）は、墓域と居住域を分離するものであり、聖なる空間（ハレ）と日常生活を営む空間（ケ）を分離するものであると思われる。これは集落内での墓域の存在をより一層際立たせるものであったと想定される。こうした意識は、同心円状の重層構造をとる集落に共通するものであった可能性が指摘できるかもしれない。

そして、この施設が機能するのはあくまでも精神的な、社会的な規制に基づくものであり、むしろ、集落の構成員による共同作業でこのような施設を造営すること自体に大きな意義があったと考えたい。

やがて、何らかの理由によりこの規制の持つ強制力が弱くなると、環状の掘込み（環濠）には土砂、ドングリ、土器片などの遺物が廃棄されるようになり、土壇跡などの別な遺構が構築され、最終的には集落自体の終焉を迎えることになる。

崎山貝塚の集落構成は極めて特徴的なものであり、西田遺跡などの環状集落（特に同心円状の重層構造をとる集落）と基本的には同じ意識でもって構築された可能性を指摘した。

しかし、崎山貝塚の場合は墓域を環濠で区画し、墓域の持つ意味をより極立たせている点に特徴がみられ、他の集落にはみられない独自の形態となっている。

しかも崎山貝塚には集落とほぼ同時に形成されたとみられる貝塚や遺物包含層（北貝塚）も伴っており、当時の生産活動に関する資料の蓄積も見込まれていることや、低湿地などの遺跡をとりまく地形的環境も現時点では比較的良好に保存されている点なども、忘れてはならない大きな特徴となっている。

今後も調査を進め、遺跡の範囲や内容についての所見を蓄積するとともに、保護に向けた手立を構ずる必要があると思われる。

註1) 1981・相原康二「大地渡遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』

岩手県教委、日本道路公団、及び『トロノ木Ⅰ報文89』宮古市教委ほか

註2) 本報告では竪穴住居跡に通しの遺構番号を仮りに付している。

註3) 1980・佐々木勝ほか「西田遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』岩手県教委、日本国有鉄道盛岡工事局

註4) 1990、西海縁遺跡調査説明資料より

註5) 1991、高田和徳『御所野遺跡 平成2年度発掘調査概報』一戸町教委

註6) 註3に同じ、佐々木によると、192基の墓塚は8つの埋葬区（8群—17小群）に大別され、個々の埋葬区（群）内部での重複はあるものの、埋葬区同志の重複はみられないことから、各々の埋葬区には厳然とした区分がある。また、祭祀場である長方形柱穴列にも同様のことが言え、結果的には両者の小群が対応関係にある。

更に、8群の埋葬区は各々1単位集団にかかわる埋葬区であるとしている。

註7) 1983、佐藤一夫ほか『静川16遺跡 縄文時代の環濠と集落』苫小牧市教委



写 真 图 版





# 第1図版



第6次調査区全景（北西から、左の住宅地が昭和60年度調査区）



第6次調査区全景（北西から、左の住宅地が昭和60年度調査区）

## 第2図版



第6次調査区・調査前の状況



第6次調査区・調査風景



# 第3図版

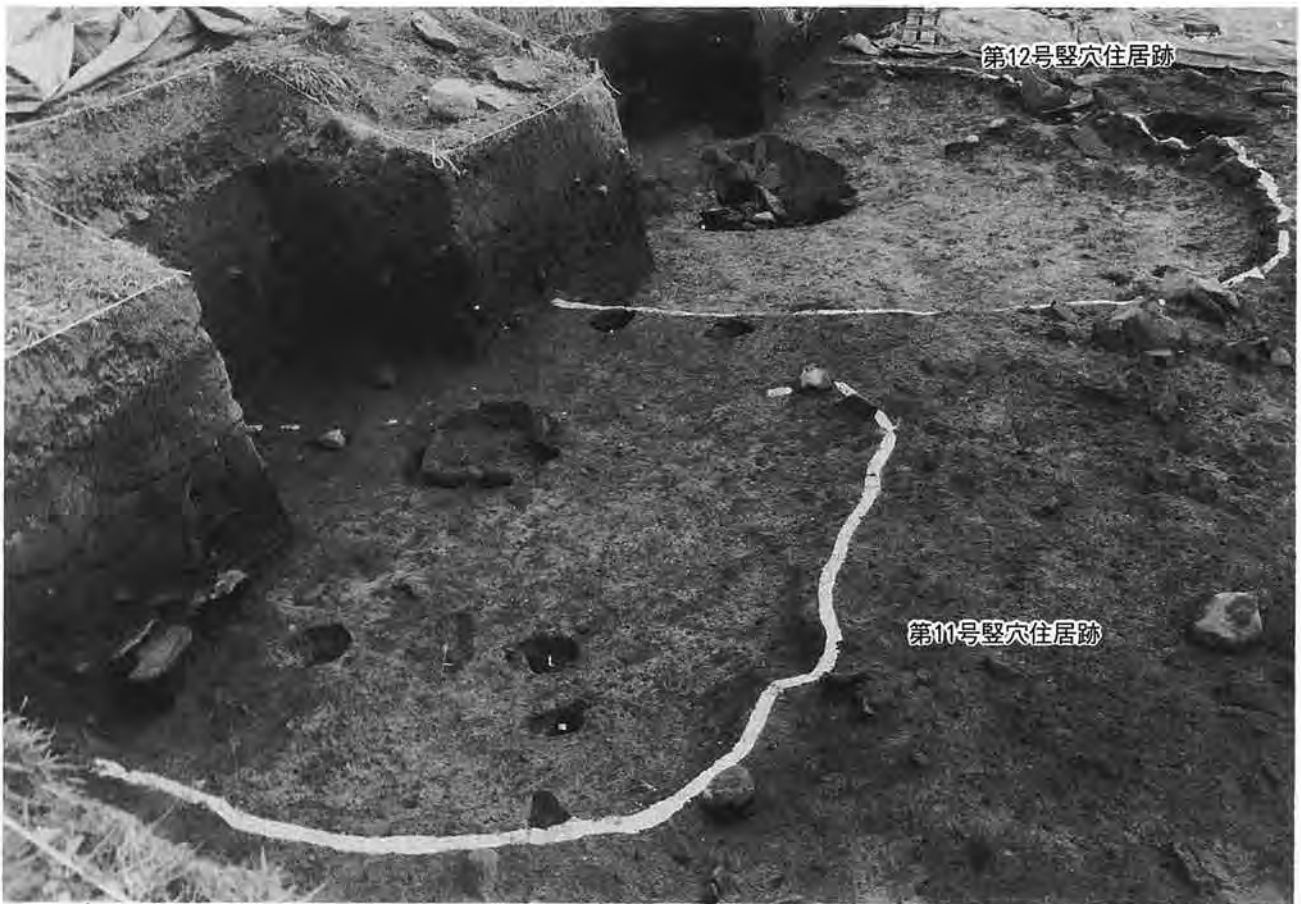


土層堆積状況（北西から）



土層堆積状況（南東から）

# 第4図版



第11号、第12号竪穴住居跡（北西から）



第11号、第12号竪穴住居跡（南東から）





第12号竪穴住居跡（北東から）



第12号竪穴住居跡（南から）



## 第6図版



第12号竪穴住居跡・堆積状況（南東から）



第12号竪穴住居跡・堆積状況（南西から）



第12号竖穴住居跡・埋土礫出土状況



第12号竖穴住居跡・床面付近扁平円礫出土状況



## 第 8 図版



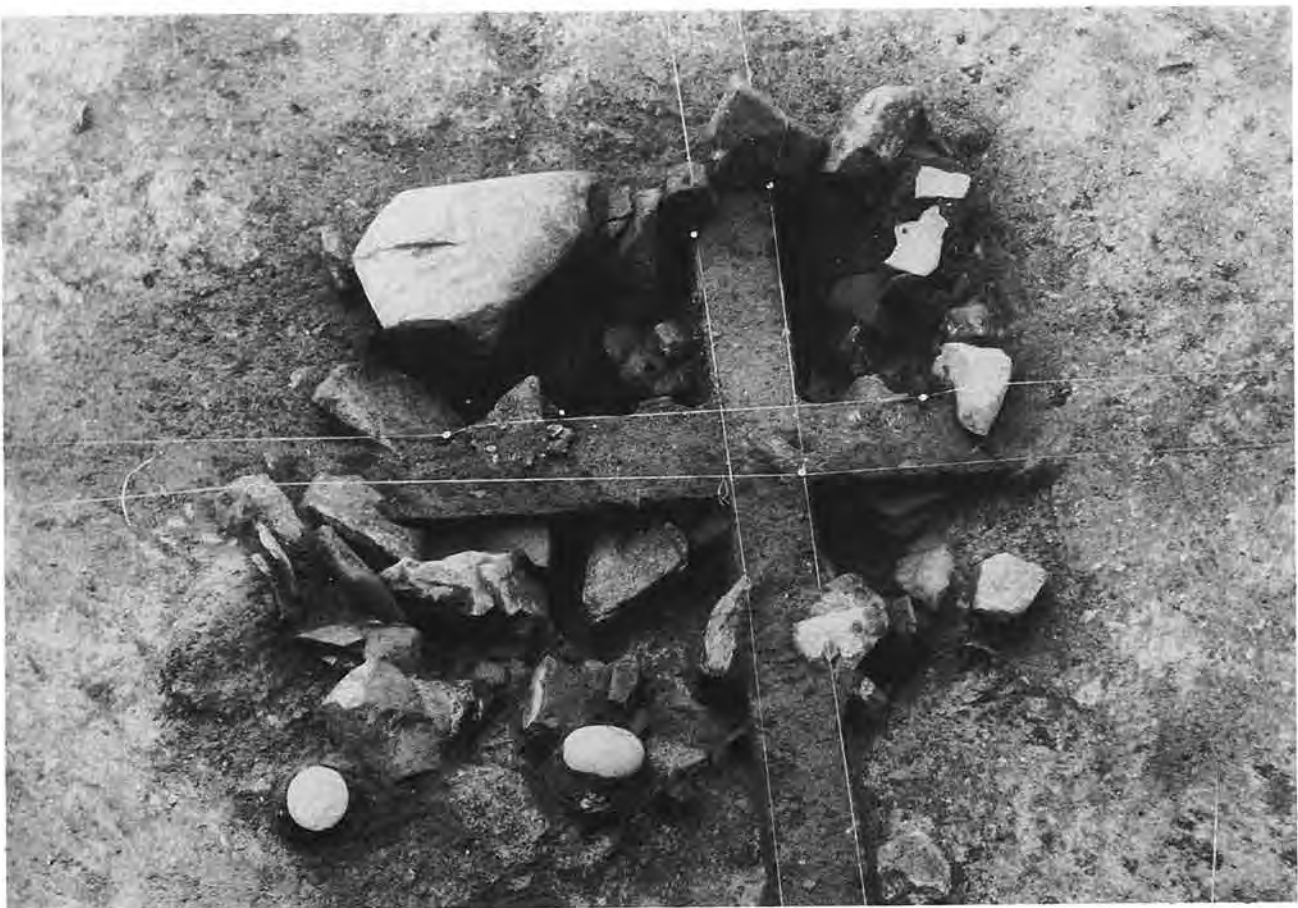
第12号豎穴住居跡・複式炉検出状況



第12号豎穴住居跡・遺物出土状況



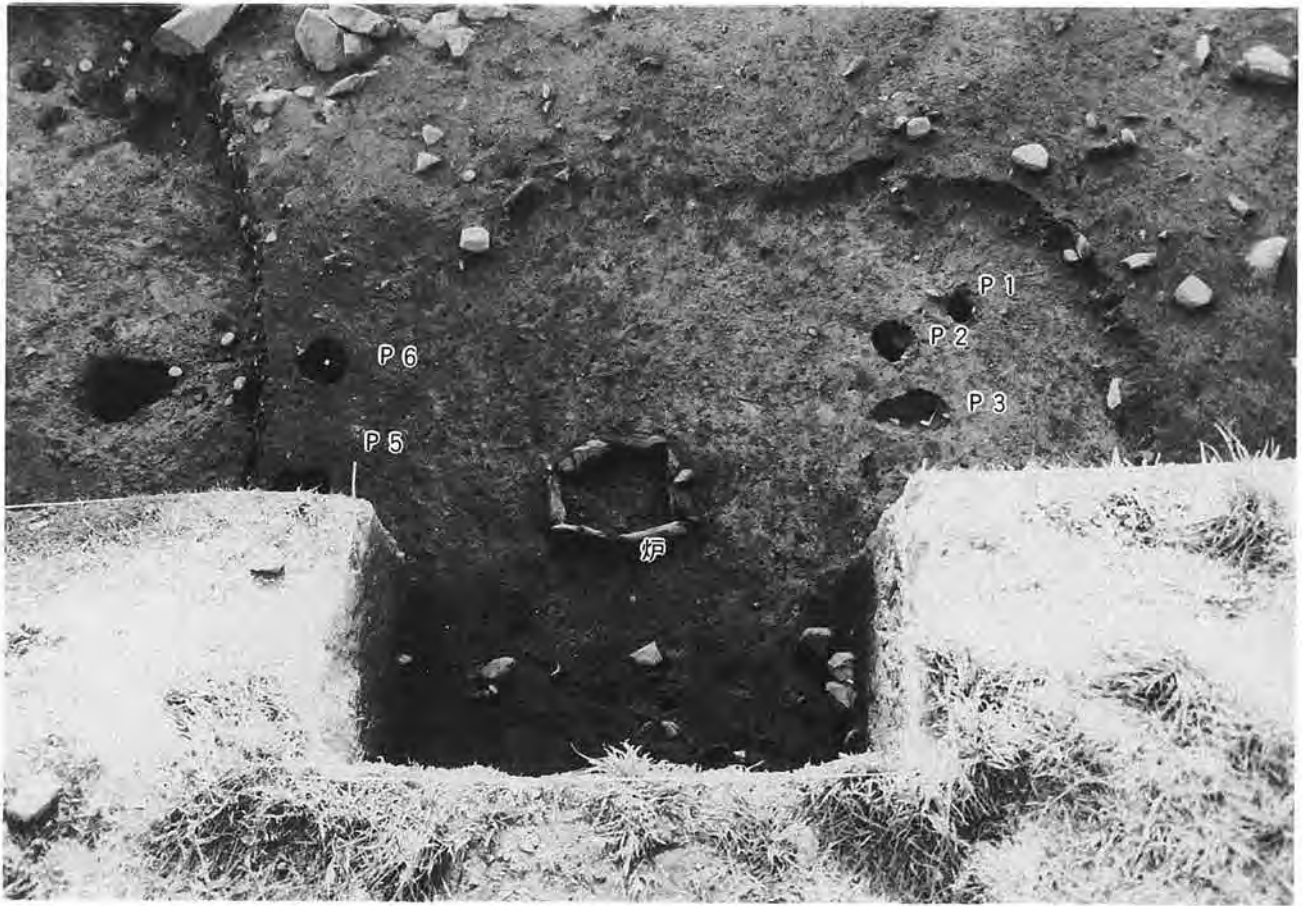
第12号竖穴住居跡・複式炉



第12号竖穴住居跡・石組部



# 第10図版

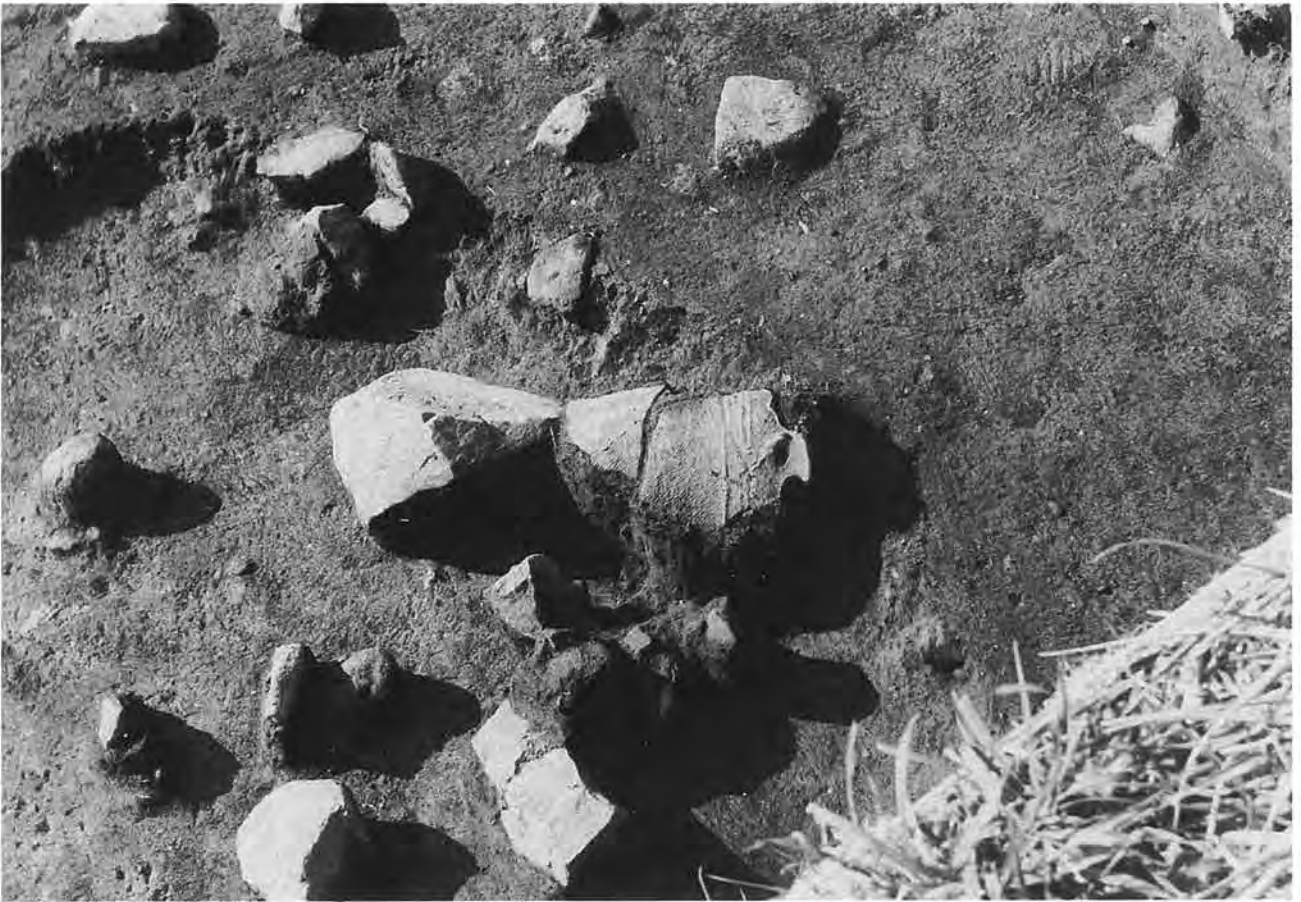


第11号竖穴住居跡



第11号竖穴住居跡・埋土堆積状況





第11号竖穴住居跡・遺物出土状況



第11号竖穴住居跡・柱穴堆積状況

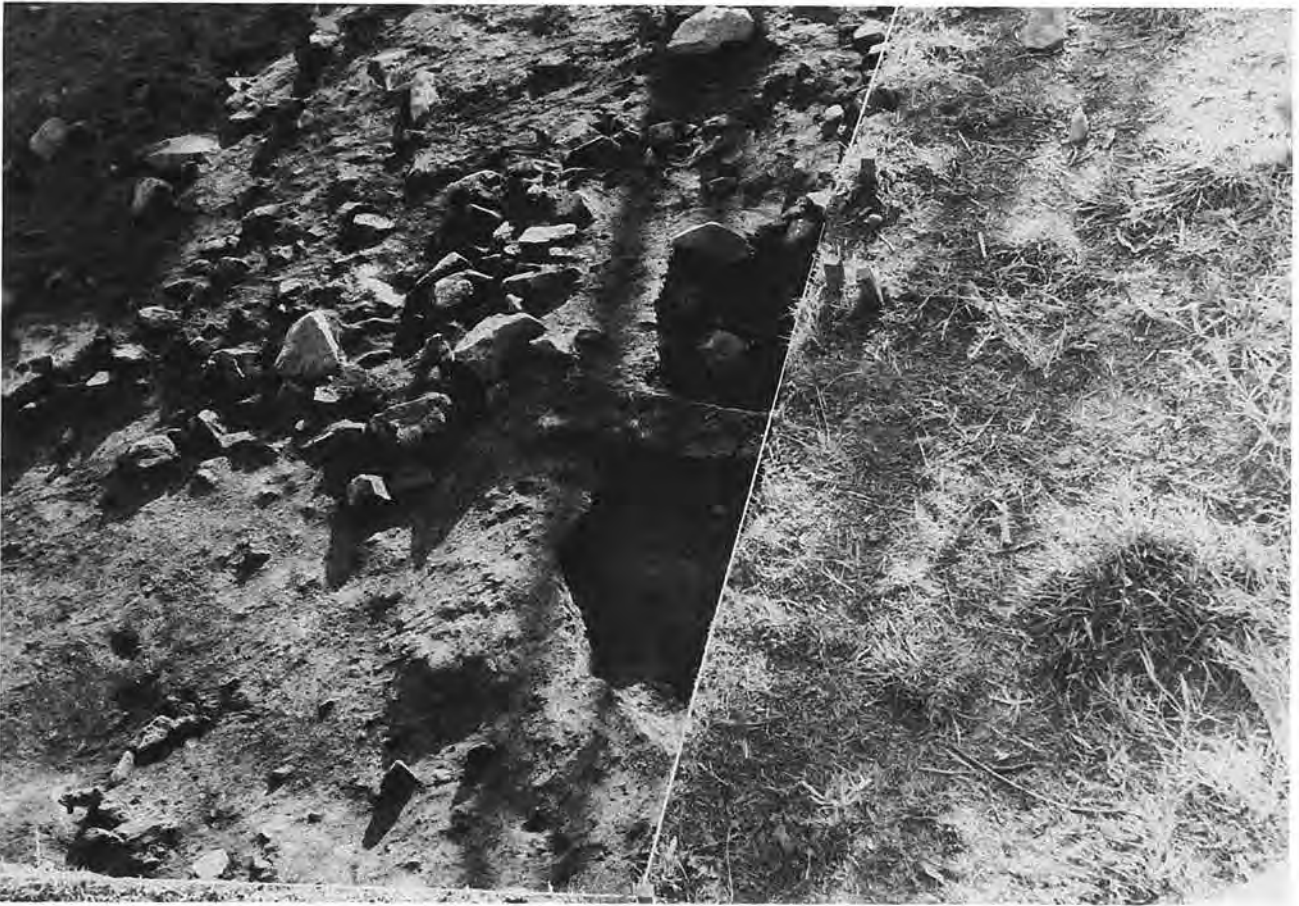
## 第12図版



第11号竖穴住居跡・炉検出状況



第11号竖穴住居跡・炉堆積状況



第13号豎穴住居跡 (?)



第7次調査・北斜面西端部Eトレンチ作業風景



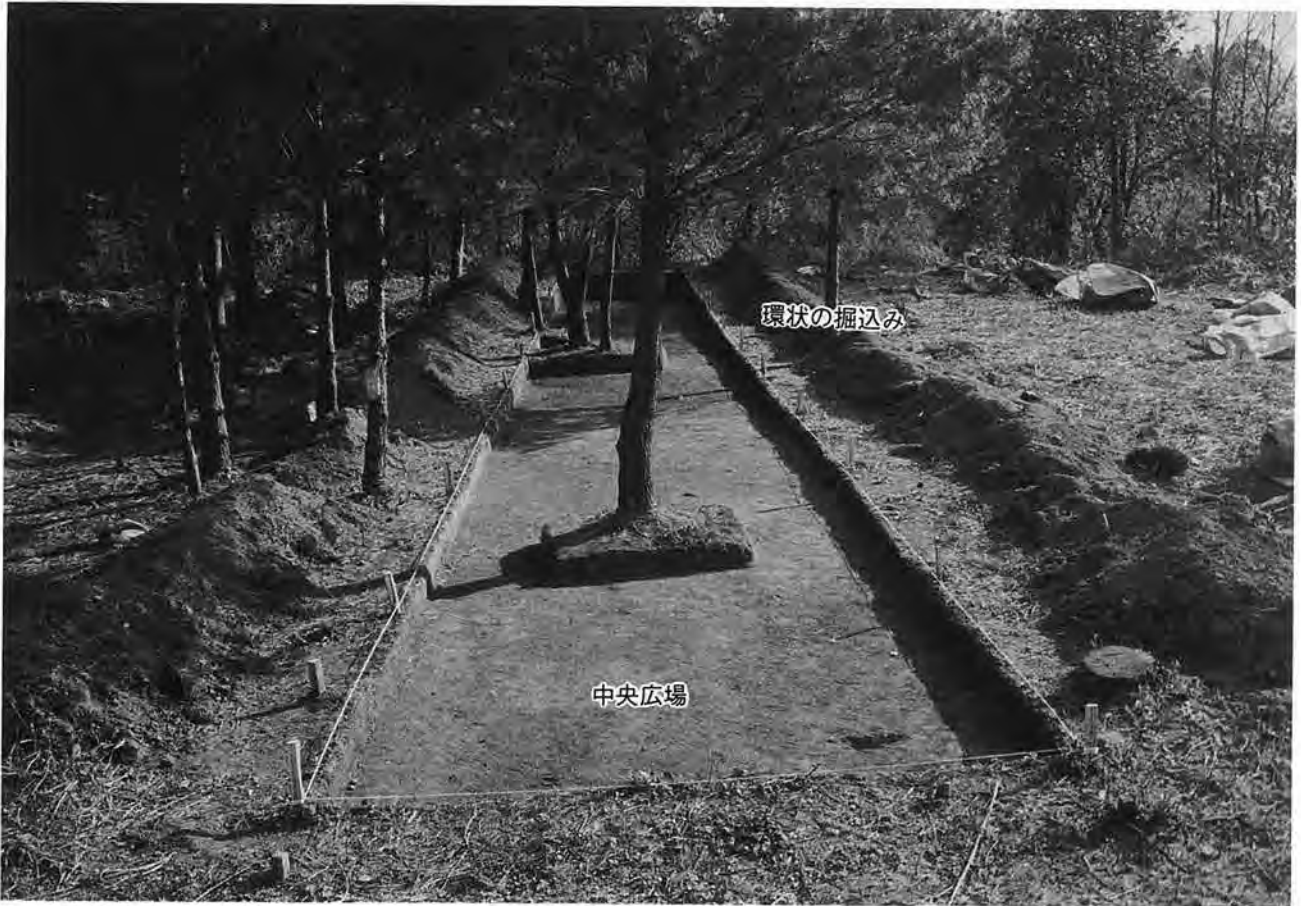
# 第14図版



第7次調査区（西から）



E6NSトレンチ



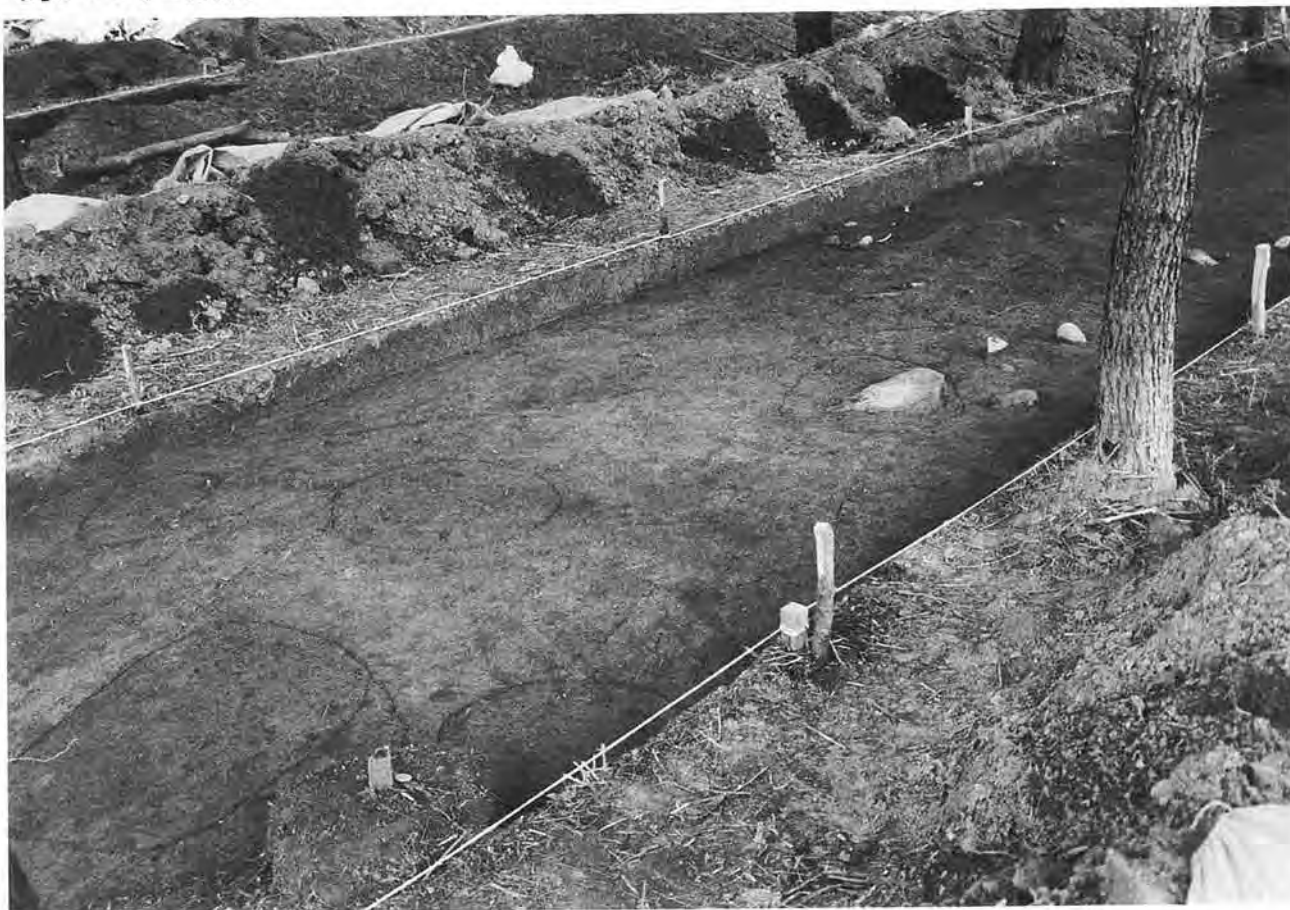
W6NSトレンチ



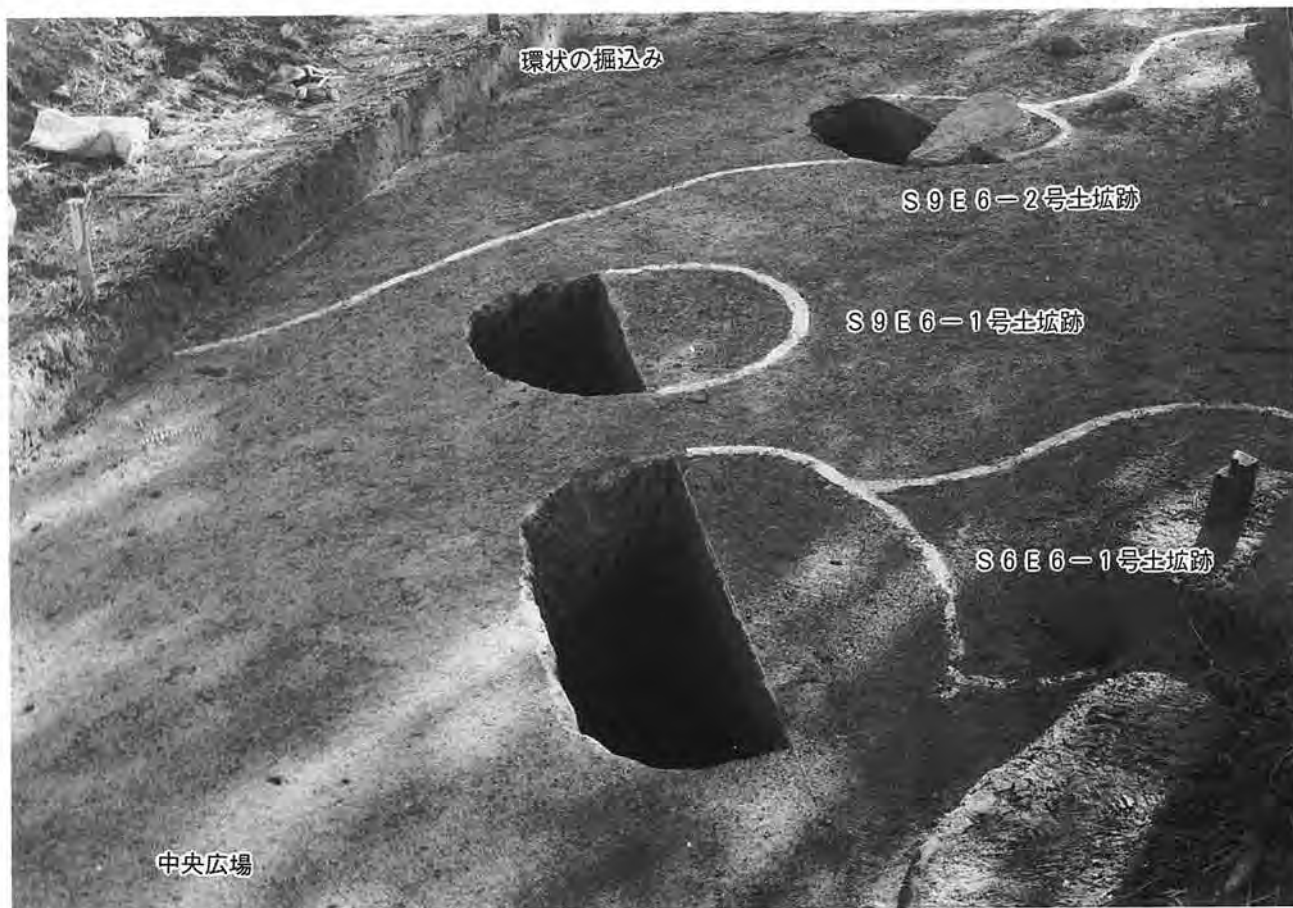
W15NSトレンチ



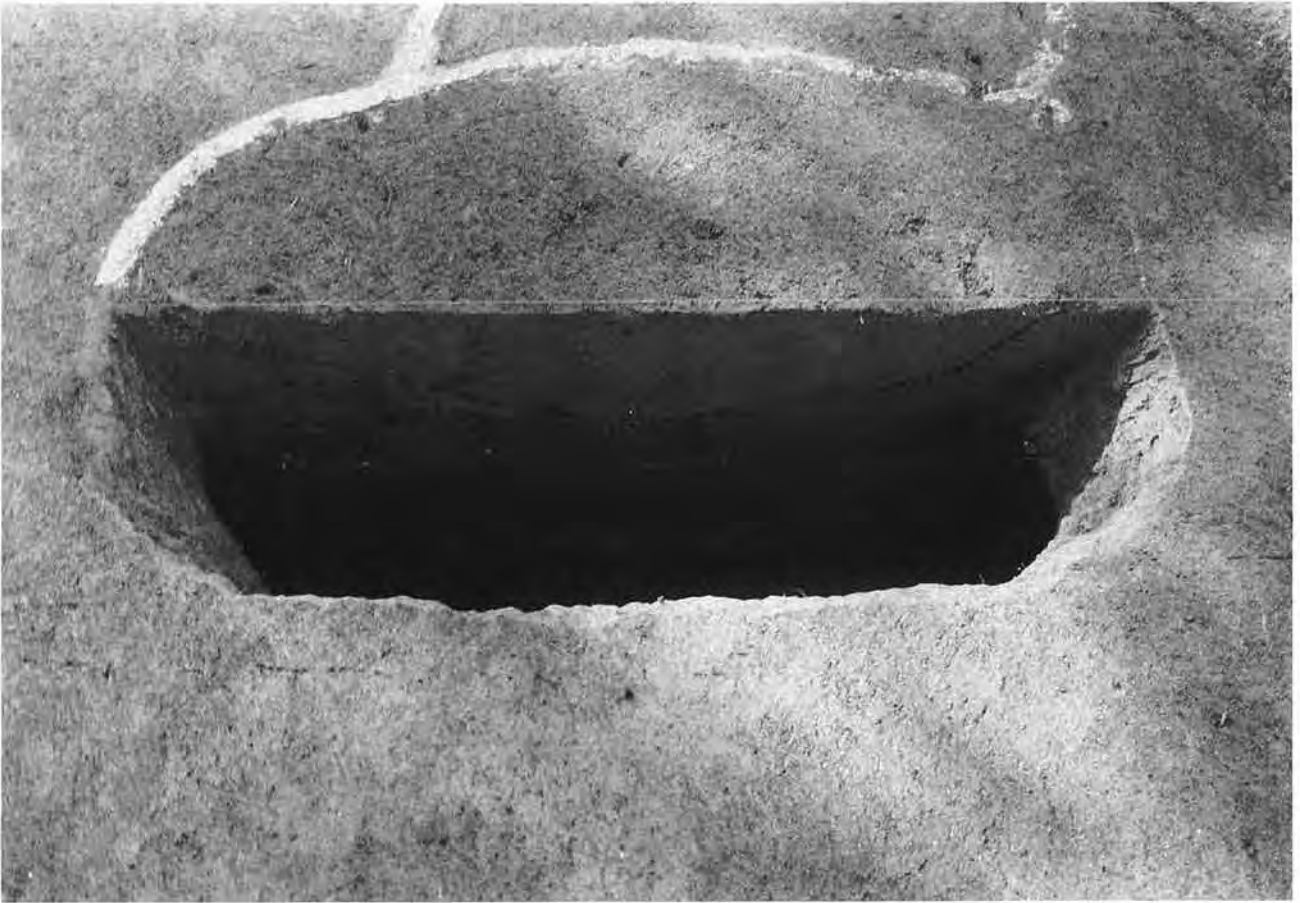
# 第16図版



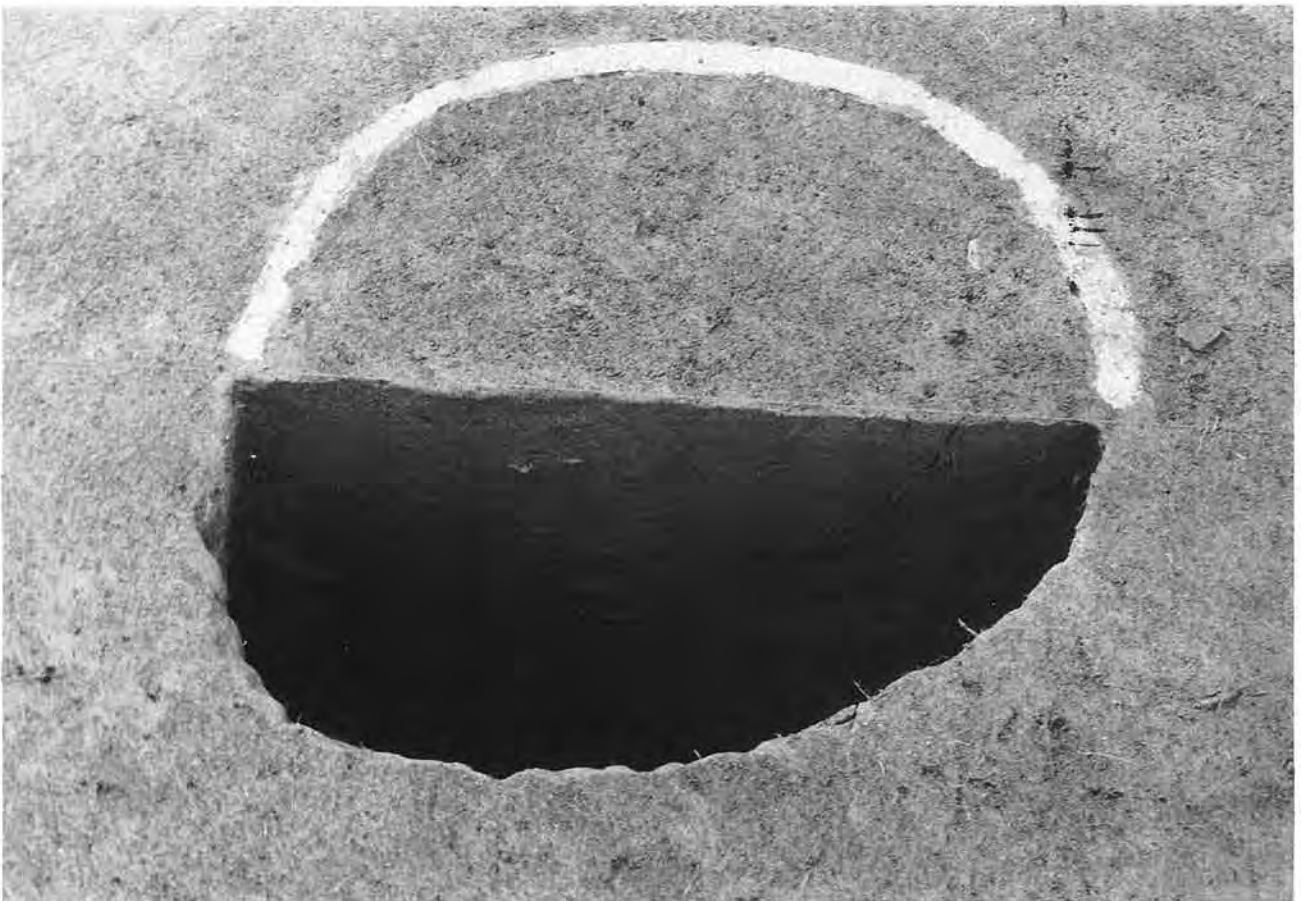
W6NSトレンチ (検出時)



W6NSトレンチ (遺構精査時)



S 6 E 6 - 1 号土坑迹



S 9 E 6 - 1 号土坑迹

# 第18图版



S 9 E 6 - 2号土坑跡



S 9 W 6 - 1号土坑跡





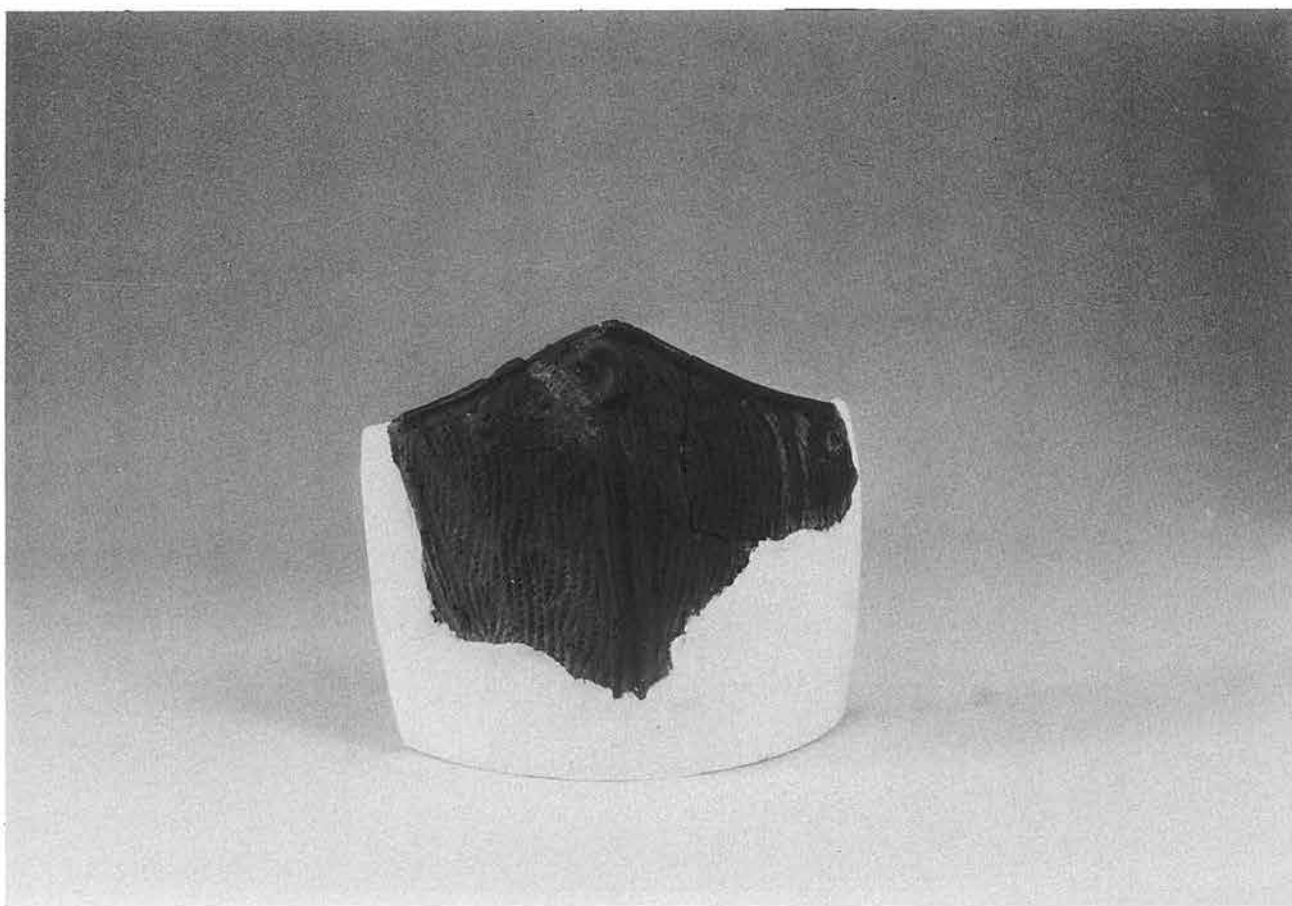
立 石



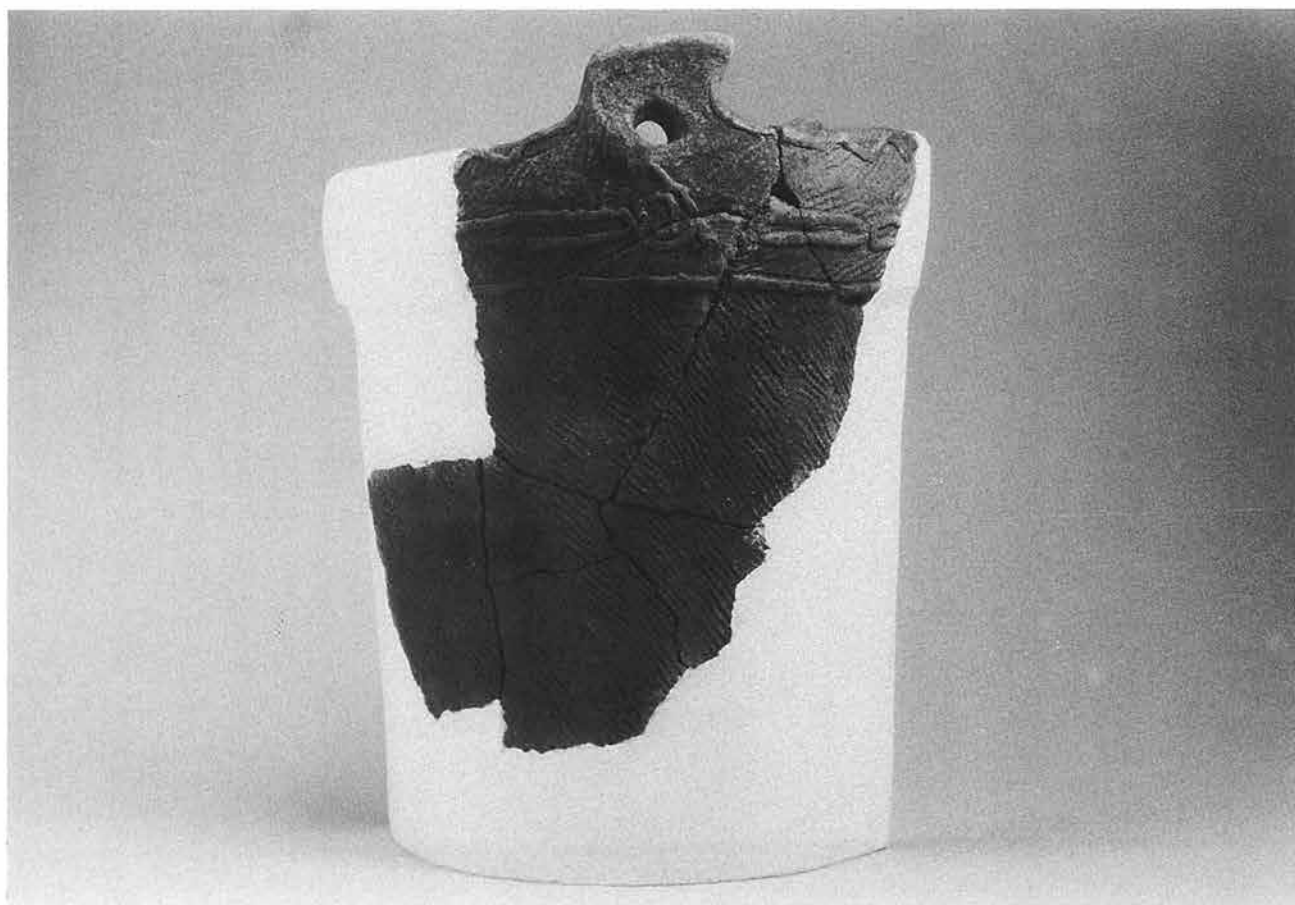
現地説明会実施状況



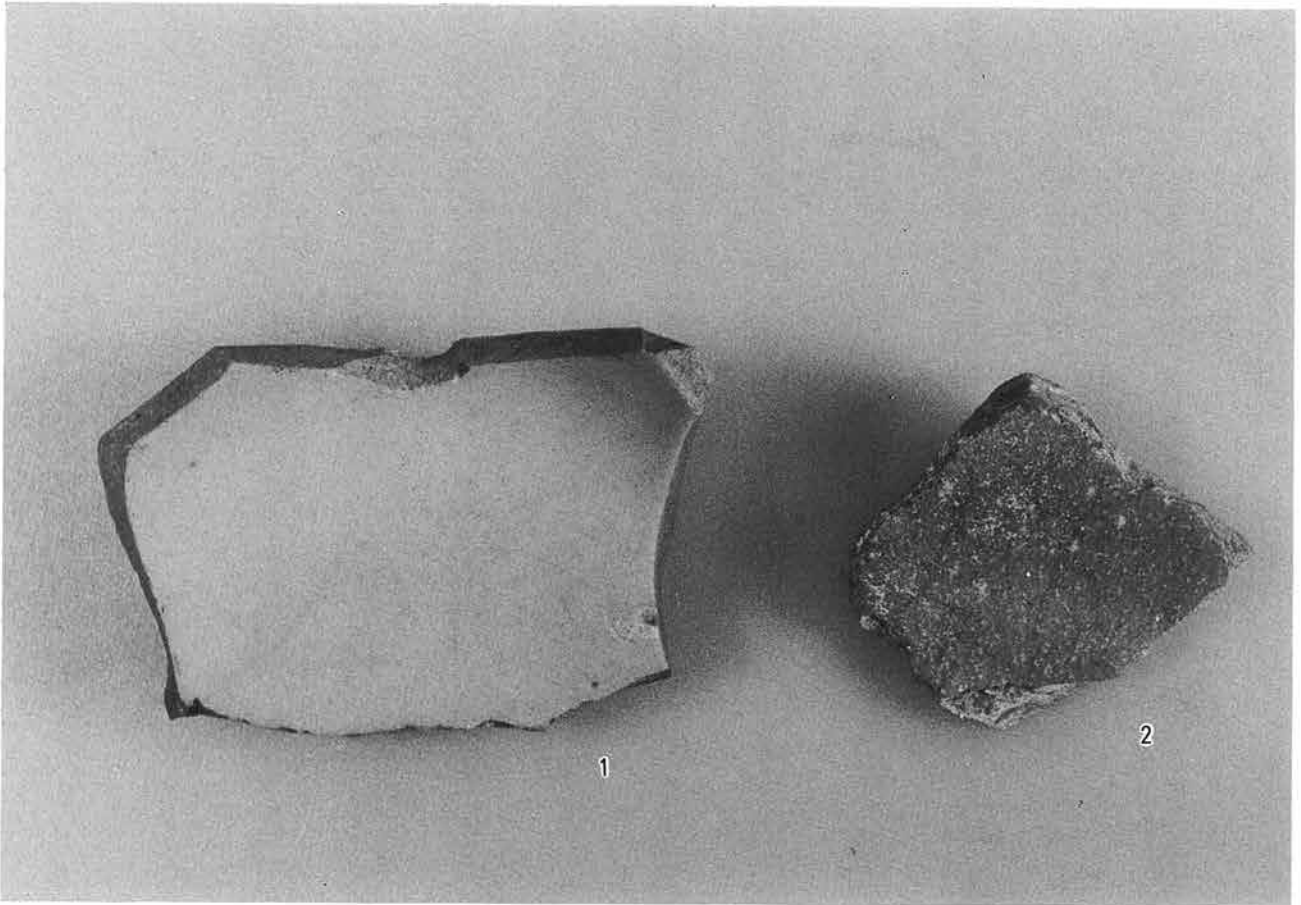
## 第20図版



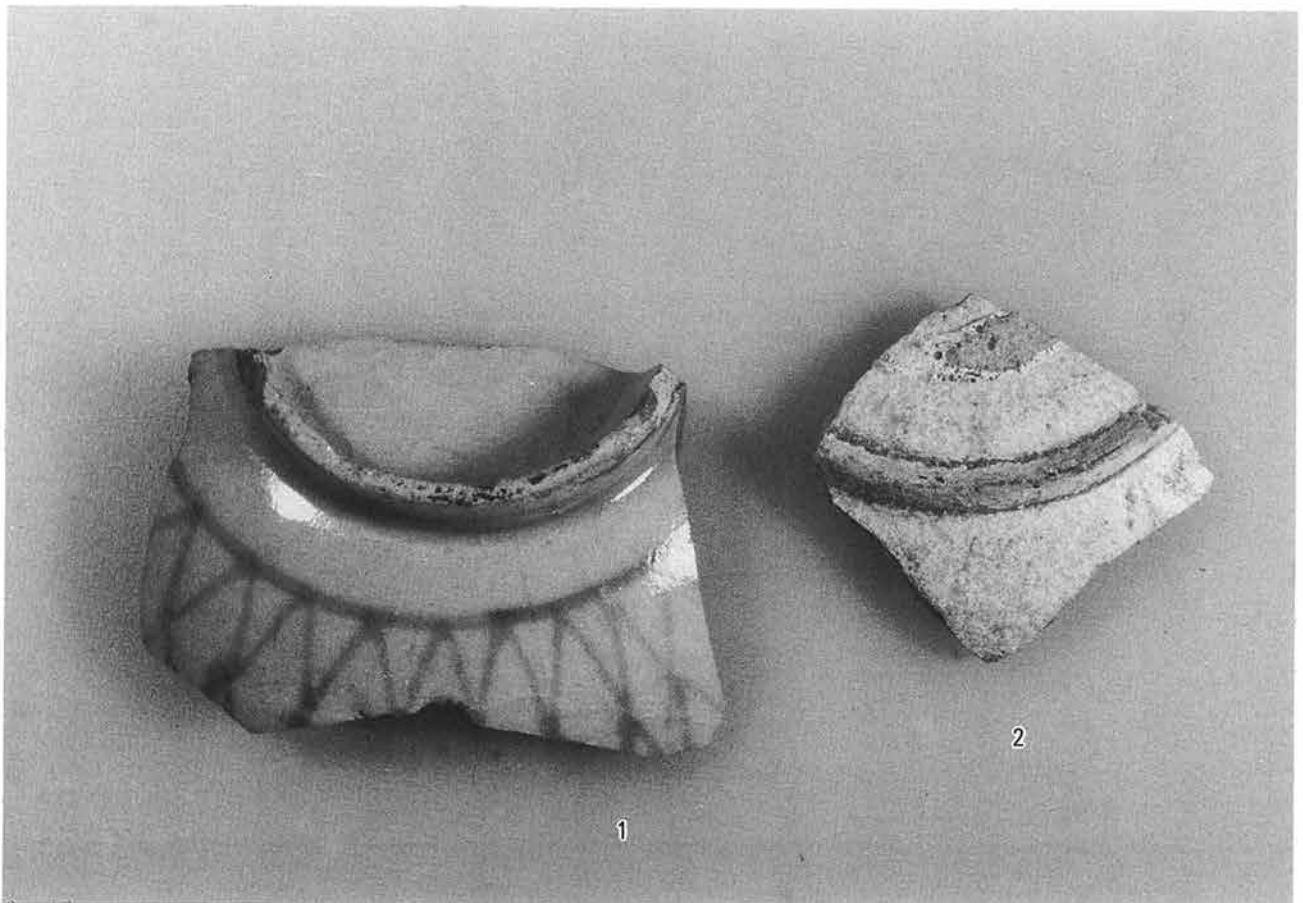
第12号竖穴住居跡・出土状況



第11号竖穴住居跡・出土遺物



1. 肥前染付一重網目文碗（くらわんか手） 2. 瀬戸美濃灰釉丸皿



第6次調査区遺構外出土遺物（陶磁器）



宮古市埋蔵文化財調査報告書37

# 崎山遺跡群VI

—平成3年度発掘調査概報—

1992.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印 刷 株式会社 文化印刷  
岩手県宮古市大通2丁目5の2